

### 支那形船舶ノ出入及其手數料ニ 關スル意見

從來支那形船舶ハ濟國稅關ノ所營ニ屬セザルガ故ニ、釐金局ニ於テ該船舶搭載貨物ニ對シテ釐金稅ヲ賦課スルノ外、稅關ニ關スル噸稅及輸出品稅ハ是ヲ納ムルニ及バザリシモ、今ヤ清國地方ヨリ開港地へ入出港スル支那形船舶ハ則外國ヨリ入出港スルモノニシテ、而シテ海外通航船タル蒸汽船ニ對スル稅關ノ取締ハ均ク海外通航船タル支那形船舶ニ適用セラルベキハ勿論ノ義ナルヲ以テ、別紙噸數ニ關スル意見書中ニ具陳セル趣旨ニ基キ、海外航支那形船舶ニ對シテモ、蒸汽船同様入港手數料金十五圓出港手數料金七圓合計金二十二圓ヲ徵收セザル可ラザルナリ。然レドモ支那形船舶ノ狀情及貿易ノ有様ヲ察スレバ是ニ對シテ蒸汽船同様ノ入出港手數料ヲ徵收スルノ妥當ナラザルヲ知ルベキナリ。本年六月乃至十一月間ニ於テ支那形船舶ノ淡水港へ入港シタル船舶ノ艘數及其容積ヲ概舉スレバ如左。

淡水港入港支那形船舶ノ艘數及容積概表

艘數

一艘容積

容積

二	七九〇担	一、五八〇担
一	八九〇	八九〇
一	八四〇	八四〇
四	六〇五	二、四二〇
二	五〇四	一、〇〇八
一四	二五二	三、五二八
四	二一八	八七二
四	三五三	一、四一二
一	一、三四四	一、三四四
一	八〇六	八〇六
一三	四〇三	五、二三九
三	一一八	三五四
二	二六九	五三八
一	二三五	二三五
一	九〇七	九〇七
一		一八五

支那形船舶ノ出入及其手數料ニ關スル意見



一	一六	一	一	一	一	二	一七	九	一	一	六	一	一一二	合	一一二
三七〇担	二〇二	一、〇〇八	六七	五八八	八四	三一九	三〇二	一五一	一、五一一	六〇五	一〇一	一三四	一三、九七七	清國從來ノ慣行ニ據レバ、支那形船舶ニ噸稅ヲ賦課スルコトナカリシハ前述ノ如シト雖トモ、他	一八六
三七〇担	三、二三二	一、〇〇八	六七	五八八	八四	六三八	五、一三四	一、三五九	一、五一一	六〇五	六〇六	一三四	三七、三一〇		

船舶ハ其船ノ蒸汽ト帆船トヲ問ハズ、登簿噸數百五十噸以上ハ一噸ニ付四メース、百十噸若クハ其以下ハ一噸ニ付一メースノ噸稅ヲ徵收スルヲ例トスルヲ以テ、本年六月以降外國通航船タル支那形船舶ニ對シテハ前記ノ標準ニ依リ一噸ニ付一メースノ噸稅ヲ徵收シ、今尙之ヲ施行セリ。是ヲ前表所掲ノ船舶ノ艘數ト容積トニ對照シ、一艘ノ噸數平均凡テ二十噸ニ一メース即十五錢四厘ヲ乘スルトキハ、金二圓〇八錢ノ噸稅ヲ徵收スルニ當レリ。而シテ明治十六年十二月七日布告第四十號但書ニ、當分ノ内各開港場ノ外長崎縣下對馬國嚴原山口縣下長門下ノ關福岡縣下筑前國博多ノ三港ニ限リ、朝鮮貿易ニ關スル日本人所有ノ船舶ノ出入及貨物ノ積卸ヲ許シ、日本形船舶ニ限リ出港手數料トシテ正金一圓、入港手數料トシテ正金二圓ヲ徵收スルコトアリ。其後明治二十六年三月十四日法律第十三號ニ、明治二十六年四月一日ヨリ京都府丹後國宮津港ニ於テ、露領浦鹽斯德及朝鮮貿易ニ關スル、帝國臣民所有ノ船舶ノ出入及貨物ノ積卸ヲ許ス。但該貿易ニ關スル手續ハ明治十六年十二月布告第四十號ニ依ルベシトアリ。故ニ本島開港ニ於ケル海外通航船タル支那形船舶ニ對シ、適當ナル入出港手數料徵收法ハ是等ノ布告及法律ノ精神ニ準據シテ入港手數料金二圓出港手數料金一圓ヲ徵收スルニアリ。倘如斯セザレバ或ハ恐ル沿岸ノ犯則終ニ多々タル嘆ナキヲ保ス可ラズ。且又本島沿岸ニ於テ從來清國地方ト支那形船舶ノ往復頻繁ナリト聞ヘタル重ナル港灣ヲ舉グレバ、則曰ク艫舳曰ク新竹、曰ク中港、曰ク後瀧、曰ク大安港曰クゴチエ、曰ク鹿港、曰ククワンワ、曰クアイ

支那形船舶ノ出入及其手數料ニ關スル意見



アウ、曰ク布袋、曰ク國姓港、曰ク東港、曰ク琅璫灣、曰ク黑石港、曰ク宜蘭、曰ク媽宮是ナリ。而シテ是等不開港ニ於テ支那貿易ニ關スル支那形船舶ノ出入及貨物ノ積卸ヲ許ス可ラザルハ固ヨリ言フ俟タザルトコロナリト雖モ、然レドモ因襲ノ久キ俄ニ慣行ノ移ス可ラザルモノアリ。無數ノ支那形船舶ヲ一時ニ驅ツテ開港ニ入レムトスルハ言フベクシテ行ハレザルニ近シ。故ニ當分ノ内本島民ノ所有ニ屬スル支那形船舶ニ限リ、漸次前記十六個所ノ港灣ニ於テ支那貿易ニ關スル支那形船舶ノ出入及貨物ノ積卸ヲ許スコト、猶明治十六年十二月七日布告第四十號及明治二十六年三月十四日法律第十三號及明治二十七年八月一日施行法律第二號及明治二十七年十月一日施行法律第三號ノ例ニ例フガ如クニシテ可ナリ。

因ニ記ス本年十月二十二日支那形船舶取締ノ爲稅關出張所ハ鹿港ニ設ケラレ支那地方へ往復スル支那形船舶ハ當分ノ内便宜上本島開港へ回船入出港手數濟ノ上貨物ノ積卸ヲ爲セルモノト看做シ此處ニ於テ稅金ヲ徵收スルナリ。開廳以來十一月中迄收入總額ハ一千六百十餘圓ニ達セリ。

## 海關稅率ニ關スル意見

進化ハ時日ノ問題ナリ、百年ノ長所ハ倏忽ノ間ニ確定スルモノニ非ラズ。猶物質ノ變化ニ相當ノ時期ヲ要スルガ如シ。若モ本島ノ内國稅ニ向テ俄ニ多額ノ收入ヲ舉ゲムコトヲ期スルハ、偶々以テ事業ノ發達ヲ遲鈍ナラシメ、加之徵稅費ノ巨額ヲ費スニ過ギザルベキノミ。抑モ施政ノ初期ハ視察的ナリ、準備的ナリ、視察ト準備トニ相當ノ時日ヲ與ヘテ仔細ノ觀察ヲ遂グルニ非ザレバ、或ハ恐ル、始メニ惡習慣ノ俑ヲ作り、百年ノ長計ハ終ニ挫折セラル、ニ至ルノ虞ナキニ非ルヤヲ。故ニ本島行政經費ノ財源ハ目下較々發達スル所タル海關稅ニ其多分ヲ舉ゲ得ルノ方法ヲ講究シ、島内百般ノ調査成ルニ及ビテハ、民度ノ負擔ト事業ノ發達トニ基キ、宜ク内國稅徵收ノ方法ヲ案查シ以テ、大早計ニ失スルナカラムコトヲ期スベキナリ。夫レ内國稅ノ發達ハ輸出稅一部ノ免除若ハ全部ノ廢棄ヲ促ガシ、否ラザル間ハ須要ト便宜トニ依リテ本島ノ輸出稅ハ姑ク保持セラルベシ。須要トハ行政經費ヲ本島ノ財源ニ求ムルノ必要アルヲ云ヒ便宜トハ勞少收多ニシテ、且ツ徵稅費ヲ省キ得ルノ利便アルヲ云フナリ。然ラバ則財政々略ニ基キテ制定セラルベキ本島ノ輸出入稅目ノ編目ノ編制ハ如何。曰ク左ノ綱領ヨリ成立ス。



一、輸入税目ハ總テ内地現行ノ税率ト均一ナラシム。  
 但阿片ハ當分ノ内別ニ禁止税ヲ課ス。  
 一、輸出税目ハ總テ本島現行ノ税率ト均一ナラシム。  
 但シ内地ヲ經テ外國ニ輸出セラルベキモノハ當分ノ内々地ニ陸揚スルト否トヲ問ハズ本島ニ於テ總テ輸出税ヲ徵收ス。

之ヲ換言スレバ曰ク輸入税目ハ最近締結ノ奥國條約第八條第一項ノ明文ニ準據シ、輸出税ハ曩ニ英國ト締結ノ帝國新税目ニ輸出税率ノ規定セラレザリシ精神ニ準據シテ各其庸ヲ採リ、輸入税ニ在リテハ彼ニ關係スル處尠カラザルヲ以テ、一律ニ内地ト均等タラシメ、輸出税ニ在リテハ我ニ關係スルトコロ多キヲ以テ、時ノ情勢ニ考ヘ本島現行ノ税率ヲ繼續施行セムトスルニアリ。是ニ對シテハ各國トノ協定ヲ要スルハ當然ノ順序ナルニ相違ナシト雖トモ、協定ノ方法及範圍ニ至テハ自カラ異同ナクンバアラズ。例ヘバ住居權及旅行權及動産ノ所有及遺囑又ハ相續其他權利義務ニ關スル一切ノ事項ニ至テハ、未ダ俄ニ決定ス可カラザルモノモアランカナレドモ、現行條約及貿易規則中本案ノ阿片及内地、回漕ニ關スル規定ニ矛盾スル條項ハ當分ノ内總テ本島ニハ適用セラレザルモノトスルノ協定ヲ得ルハ目下ノ必要ニシテ、而シテ英國新條約書中本條約ノ規定ハ總テ英領印度加奈陀領地西濠太利南濠太利其他八個所ニハ當分ノ内適用セラレザルモノトスルノ精神ニ準據スルナリ。

且又輸出税ノ義ハ帝國臣民ニ對シテハ之ヲ免除スルノ法令ヲ發シタルコトアルハ、明治九年八月以降明治廿七年七月ニ至ル迄前後十三回ノ多ニ及ビタルモ、固ヨリ以テ各國ノ協定ヲ要スルモノニアラザリシ。試ミニ現行條約及貿易規則又ハ稅關法及稅關規則ヲ本島ニ適用スルニ依リ生ズルコロノ收入上ノ結果ヲ概舉スレバ、曰ク條約上ノ義務ニ基キタル上屋及倉庫設立ヲ我ニ於テ負擔セザル可ラズ。曰ク燈臺標識等ノ設備ヲ我ニ於テ負擔スルト共ニ、目下徵收スルトコロノ噸税ヲ廢棄セザル可ラズ。曰ク高税率ニ屬スルモノハ内地回漕ニ依リテ更ニ外國へ輸出セラル、コトアルベキガ故ニ、是ニ對スル收入ハ殺減セラル可シ。曰ク輸出入税目ノ異同ニ依リテ生ズルトコロノ結果トシテ輸出入税金凡ソ三分ノ二強ヲ與フルニ至ルベシ。左ニ内地ト本島ニ於ケル現行税率ヲ對照シテ千八百九十四年輸出入税金ノ收入總額ニ對シ略表ヲ作り兩率異同ノ結果ヲ示ス。

	臺灣稅	帝國內地稅	臺灣稅超過
淡水港 輸入	三九四、九四六 <sup>四</sup> 七四三	九八、八四〇 <sup>四</sup> 三一一	二九六、一〇六 <sup>四</sup> 四三二
同 輸出	六三五、五三〇二六五	一八八、〇四〇一〇六	四四七、四九〇一五九
安平港 輸入	三〇二、三六四九六四	三九、三〇一七八八	二六三、〇六三一七六
同 輸出	一七二、三八〇〇五七	一五三、一一三二九四	一九、二六六七六三
合 計	一、五〇五、二二二〇二九	四七九、二九五四九九	一、〇二五、九二六五三〇



備考 淡水港ハ基隆港ヲ安平港ハ打狗港ヲ包含ス

淡水安平兩港ノ輸入税ハ總テ阿片税ヲ含有ス。

本表ハ阿片税ヲ含有スルヲ以テ之ヲ控除シテ更ニ對照スレバ左ノ如シ。

差 引	合 計	臺灣 稅		帝國内地稅		臺灣稅超過		帝國内地稅超過	
		淡 水 港 輸 入	同 輸 出	淡 水 港 輸 入	同 輸 出	淡 水 港 輸 入	同 輸 出	淡 水 港 輸 入	同 輸 出
		九三、五〇六二九	六三、五〇二六五	九八、八四〇三二	一八八、〇四二〇六	四四七、四九〇二五	五、三四〇九二		
		三三、九八三〇八	一七二、三六〇五七	三九、三〇二七八	一五三、二二二九四	一九、二六六七三	六、三三四八〇		
		九四、三九八四九	四七九、二九五九九	四六六、七五六九三	四六六、七五六九三	一一、六五七五二			
						四五五、〇九九五〇			

本表ニ就テ之ヲ觀ルトキハ、内地稅率ヲ適用スルノ結果トシテ、輸入ニ在テハ一萬千六百五十餘圓ヲ増加シ、輸出ニ在テハ四十六萬六千七百五十餘圓ヲ殺滅ス。即チ輸入ニ在テハ九分強ノ増加ヲ來シ、輸出ニ在テハ五割八分強ノ殺滅ヲ生ズ。故ニ輸出入稅合計九十三萬四千三百九十餘圓（阿片稅ヲ控除ス）ニ對シテハ僅ニ四十七萬九千二百九十餘圓ノ收入ヲ得ルニ止マルナリ。即チ其二分ノ

一強ニ當ル。之ニ反シ本案ノ如クスルトキハ、輸出ニ在テハ八十萬七千九百十餘圓、輸入ニ在テハ十三萬八千四百十餘圓合計九十四萬六千五百十餘圓ノ收入ヲ得ベシ。若シ阿片禁止後ノ效果ハ僅ニ其輸入總斤量ノ半額ヲ減スルニ止マルモノトセバ、税金トシテ得ルモノハ、三百九十萬九千七百餘圓タルベシ。難者アリ曰ク輸出稅ノ輕減若ハ全廢ハ事業ノ發達上必要條件ナリト。此論可ナリ、然レドモ本島ノ情勢ハ大ニ然ラザルモノアリ。支那人特有ノ性情及外商ト取引ノ有様等仔細ニ觀察シ來レバ、輸出稅ノ輕減若ハ全廢ハ斯品ノ發達上少クトモ目下何等ノ關係ヲ與ヘザルノ事實ヲ發見スベシ。茶ニ釐金稅アリ、樟腦ニ竈稅アリ、釐金稅アリ、然レドモ重要品中年々其輸出額ヲ増加スルノ傾向アルハ左表ニ就テ明カナリ

砂 糖

年	黑		白	
	數	價	數	價
一八九〇年	六七六、七七二九九	一、五六九、七一三	四五、八六八七二	一八三、六七三
一八九一年	五四五、三四六七七	一、三六〇、八九一	二四、五七七六八	一〇二、〇二四
一八九二年	五五八、六二六四一	一、一四五、二二四	四二、四七四八一	一六一、四三九
一八九三年	四八〇、五二九五四	一、一四〇、四六八	二九、三九〇五〇	一三二、二八九
一八九四年	六七一、九七四二六	一、六〇三、四一四	六三、六八九七二	二九四、五五二



樟腦

年	數	量	原	價
一八九〇年		七、二四一八四 <small>斤</small>		一〇八、七一三 <small>兩</small>
一八九一年		一八、八八一五〇		二八五、二八〇
一八九二年		一七、五四〇五七		三〇〇、五四五
一八九三年		三三、三一九九三		七二六、九三八
一八九四年		三九、五四七一二		八三三、二四三

茶

年	數	量	原	價
一八九〇年		一二八、八九九四三 <small>斤</small>		三、〇八九、〇一八 <small>兩</small>
一八九一年		一三五、八〇三四五		二、七一三、七五三
一八九二年		一三六、七三六五三		二、九二九、七四七
一八九三年		一六三、九四八五七		四、〇五〇、九八〇
一八九四年		一五四、四二一七四		四、〇八三、二六五

要スルニ時アリ、勢アリ俄ニ内國稅ノ財源ヲ發達シ得ルノ場合ニ至ラザル間ハ、則視察的又ハ準備的ノ時機タルヲ免レザルベキヲ以テ、此間本島行政經費ノ財源ハ首トシテ之ヲ海關稅ニ求メ、其方法トシテ輸入ニ在テハ内地同様ノ海關稅率ニ從ヒ、輸出ニ在テハ本島現行ノ海關稅率ニ依リ少クトモ從來同額ノ海關稅ヲ舉グルヲ期スベシ。漸次内國稅發達ノ時機ニ遭逢セバ、行政上我ニ餘地アリ輸出稅ノ輕減若ハ免除ハ時ニ及ビテ徐々ニ案査ヲ下シテ可ナリ。



## 輸入阿片始末ニ關スル意見

- 一、本島へ阿片ノ輸入ヲ禁ズルノ目的ヲ達スルガ爲メニ様ノ考案アリ、一ニ曰ク直接ニシテ過激ナリ、二ニ曰ク間接ニシテ漸漫ナリ、前者ハ輸入禁止令ニ、後者ハ輸入禁止稅ニ依ルナリ。
- 一、禁止令ノ目的ハ始メヨリ吸煙ノ絶滅ヲ期シ、禁止稅ノ目的ハ始メハ吸煙ノ範圍ヲ縮小ナラシメ終リニ絶滅ニ至ルヲ期スルナリ。
- 一、二者ノ結果タルヤ僅ニ其度ヲ異ニスルニ過ギズシテ、概シテ同一様ノ效果ヲ收メ得ルモノ、如シ。米國ハ禁止稅ノ結果トシテ吸煙ノ範圍ヲ縮小セリ。帝國横神兩港ハ禁止令ノ結果トシテ吸煙ノ絶滅ノ實ヲ擧ゲ得タリシ耶。將々其範圍ヲ縮小セシニ止ル耶。但禁止令ハ支那人ノ麁嚮ヲ爲サザル境土ニ於テノミ效果アリ、佛獨ノ如キ是ナリ、故ニ適當ナル方法ハ二者共ニ時ト所トニ依リテ定マル。

一、阿片輸入禁止令ヲ白紙ニ染メムトスルヤ易シ、斑痕餘白ナキ染紙ヲ白紙トセムトスルヤ難シ。今ヤ白紙ニ對シテ斷案ヲ下スノ時ニ非ルナリ。

一、黒ニ非レバ白ナリト斷定シ禁止稅タル中間ノ色アルヲ認メズシテ直ニ嚴禁ノ積極ニ達セムトスルハ本島ノ事情ヲ無視スルニ依リテ起ル。

一、臺灣ナル文字ノ起源ト共ニ早ク吸煙ノコトアリ、千七百二十九年阿片禁制ノ法文ハ本島ニモ適用セラレ、吸煙者其人ヲ除クノ外、阿片ノ問屋賣店地方官其他關係者ニ對スル禁錮笞刑放逐死罪等ノ嚴罰ハ毫モ其效果ナカリシ（法文ハ吸煙者其人ヲ罰スルノ必要ナキモノトセリ）

一、千七百八十二年阿片禁止令ノ徒法タリシ有様ハ、當時英國下議院ニ報告セラレタル、トーマスヒットヒュー氏ノ通信ニ依テ一般ニ知ラレタリ。

一、千八百年阿片禁止令勵行ノ結果トシテ茲ニ著ク潛商密賣ノ端ヲ啓クニ至レリ。

一、千八百二十二年地方官ニ於テ阿片密商ニ對シ嚴重ノ取締法ヲ設ケタリシモ一トシテ其效果ヲ收メ得タルモノナカリシ。

一、千八百七十九年淡水稅關長ノ報告ニ據レバ、吸煙一日ノ量ハ凡ソ一メース半ヲ以テ少量トシ、三メースヲ以テ中量トシ、八メースヲ以テ大量トス而シテ吸煙十年ニ互ル者ヲ以テ習慣ノ拔ク可カラザルモノトセリ。

一、阿片ノ在ル處支那人ノナキコトハ之アルベキモ、支那人アリテ阿片ノナキコトハ曾テ之アルナシ。是ニ對スル阿片禁止令ハ實ハ支那人放逐令トナル。

一、去ランカ本島特有ノ營業ヲ他ニ求メ得ズ、且ツ其ノ墳墓ヲ奈何セン。劉永福流言ヲ放ツ。曰ク



阿片ヲ絶ツガ爲ニ日本人本島ニ來レリト。

- 一、放逐令トシテハ間接ニ茶業其他殖産貿易ノ機關ヲ轉覆シ同時ニ外商間ニ一種恐惶ノ發作ヲ與フ。
- 一、是等ノ事情ニ處シテ行ヒタル禁止令ト禁止稅トニ依リテ生ズルトコロノ結果ヲ概括對照シテ左ニ二者ノ便否ヲ明ニス。

一、禁止令ハ法文ニ依テ阿片絶滅ヲ期ス。然レドモ密商ニ依リテ生存ニ必要ナル丈ノ數量ヲ輸入セリ。

一、禁止稅ハ法外ノ商價ニ依リテ阿片ノ絶滅ヲ期ス、然ドモ生存ニ必要ナル數量ハ高價ヲ拂フテ輸入セリ。

一、吸煙範圍ヲ縮少ナラシムルニ於テハ二者共ニ其效果アリ、然レドモ一ハ若干ノ税金ヲ得一ハ何等ノ收入ナシ。

一、阿片一斤ニ付金二十圓ノ禁止稅ハ千八百九十三年輸入總斤量四十六萬八千五百斤ニ對シテハ其税金九百三十七萬圓ナリ尙大ニ禁止稅ノ目的ヲ達シテ纔ニ生存ニ必要ナル數量ヲ輸入スルニ止マラズ、是ニ依テ得タル税金ヲ以テ且ツ教へ且ツ導キ重ネテ禁止稅ノ目的ヲ達スルコトヲ期シ得ベシ。禁止令ハ而カスルヲ得ズ。

一、禁止令ハ惡習ヲ脱スルニ必要ナル時日ト分量トヲ與ヘルコトナク、一舉ニシテ數十年來ノ習慣

ヲ脱却セヨト逼迫スルモノナレバ、將來ノ施政上生民ノ亂階ヲ作ルノ虞アリ。禁止稅ハ物ノ變形上漸ニシテ良民タル事ヲ得ルノ時日ト機會トヲ與フルガ故ニ、民心ニ感スル所自カラ辛酸ナラズ。

一、禁止令ハ阿片高價ニシテ内地ノ人民相近クコト容易ナラズ、尙富裕者ノ感染ハ別ニ取締ノ方法ヲ設ケテ可ナリ。内地ノ人民相齒セザルノ一事ニテモ自カラ制裁ヲ與フ。禁止令ハ密輸ノ阿片ニ依テ内地ノ人民相近クコト容易ナラザルニアラズ。

一、禁止令ハ先ヅ禁ジテ而シテ後其害大ヲ視ルニ至リ、茲ニ禁アレドモ無キガ如クニ畢ラン。又弊アリ。禁止稅ハ否ラズ黒ト白トノ間ニ處シテ先ヅ其結果ヲ察シ、事後ノ方案ニ餘地ヲ與ヘテ而シテ後嚴禁ノ策ニ出ルモ未ダ遲トセザルノ便アリ。

一、之ヲ要スルニ率土ノ濱誘フテ王化ニ入ルノ門ヲ開キ、漸ニシテ教ヘテ惡弊ヲ脱却セシメ、心身共ニ良民タルコトヲ得ルノ餘地ヲ本島ノ生靈ニ與フルハ實ニ阿片輸入禁止稅ノ方案ニアリテ他ニアラズ。少クトモ今ヨリ二年間ハ本島ノ民情風俗ノ眞象ヲ能ク視察シ、能ク準備シ、時ニ及ビテ阿片嚴禁令ヲ發スルトモ未ダ必ラズシモ遲シトセズ。今ヤ本島擾亂纔ニ鎮定ニ歸シ、行政漸ク其緒ヲ得ムトスルニアリ嚴然トシテ阿片禁ヲ國中ニ張り、從ハザレバ則國外ニ放逐セラルベシトナスハ亂後無辜ノ生靈ヲシテ王化ニ浴セシムルノ道ニ於テ或ハ過激ニ失スルノ方案タルニハ非ルナキカ。



## 海關稅協定ニ關スル意見

行政經費ノ一部若クハ全部ヲ本島ノ財源ニ求ムベキコト、及之ヲ決行スルニ於テハ本島現時ノ情勢ニ考ヘ之ヲ内國稅ニ求ムヨリハ目下較々發達スル所タル海關稅ニ對シテ其多分ヲ舉グルヲ以テ歲入ノ目的トスルコト、及此精神ニ基キテ制定セラレタル本島ノ海關稅率ハ輸入ニ在テハ阿片ヲ除クノ外内地現行稅目ヲ適用シ、輸出ニ在テハ本島現行稅目ヲ繼續施行シ、而シテ稅關ノ法令規則ニ至テハ回漕ニ關スル規定ヲ除クノ外、外商ニ對シテハ内地現行條約及貿易章程ヲ、帝國臣民ニ對シテハ稅關法及稅關規則ヲ適用シ、以テ大體ノ目的ヲ達スベキコト及此輸出稅目ヲ適用スルノ結果トシテ本島ニ於テ目下舉ゲ得ベキ輸出入稅收入總額ハ阿片ヲ除キ實ニ九十四萬六千五十餘圓ニ達スルコト、及内國稅徵收ノ方法發達スルニ伴フテ漸次本島ノ輸出稅ヲ輕減若ハ全廢スルノ方針ニ出ヅベキコト、是等ノ事項ニ關シテハ囊ニ提出セル海關稅率ニ關スル意見ニ於テ之ヲ詳述シ、併セテ輸出入稅目ハ外國人ノ利害ニ關スルコト尠カラザルヲ以テ、本案ノ海關稅目ヲ實行スルニ先チ、豫メ之ヲ其筋ノ外國公使ヘ交渉協定スルノ必要アルヲ具陳セリ。夫レ交渉協定ノ道ニ於テハ當局者自カラ成行アリテ他ノ啄ヲ容ルベキニ非ズト雖、試ミニ左ニ鄙見ヲ具陳シテ聊カ參考ニ供セムトス。

凡ソ外國ト交渉スルノ道ニ於テ、本案ニ就テ之ヲ大別スレバ二様ノ方案ニ歸ス。曰ク外交公文ヲ以テ之ヲ其筋ノ外國公使ヘ照會通牒スルニ止ムル是レ其一ナリ。曰ク始メヨリ本案ヲ具シテ之ヲ外國公使ノ協定ニ附スル是レ其二ナリ。第一案ニ依ルトセンカ、其方法トシテハ先ヅ本島ニ於テ外國貿易ノ開港トシテ淡水基隆安平打狗ノ四港ヲ開キタル旨ヲ帝國臣民ニ布告スベシ。而シテ本島ノ情勢ニ適應スル輸出入稅目ヲ制定シ、即チ本案ノ輸出入稅目ヲ以テ帝國臣民ノ遵奉スルモノトシテ之ヲ發布スベシ。此ニ於テ外國公使ニ照會シテ曰ク、今ヤ臺灣諸島纔ニ鎮定ニ歸シ平和ニ復シタリト雖トモ、自今二年間ハ島民未ダ全ク帝國臣民タルノ境域ニ達セズ、且又敗餘ノ殘兵匪徒動トモスレバ輒チ良民ヲ掠奪スルノ虞ナキニ非ルヲ以テ、之ニ備フルノ守備防衛ハ恰モ戰時狀況ノ痕跡ヲ留ムルモノニ似タリ。此時ニ當テ外國臣民ノ居住權及旅行權其他權利義務ニ關スル諸制度ヲ規定スルハ彼我雙互ノ利益ヲ完全ナラシムルノ道ニ非ルヲ以テ、追テ雙方交渉シテ完全ノ協定ヲ遂グルニ至ル迄、若ハ囊ニ締結セラレタル帝國新條約ノ規定ハ施行期日ニ至リ本島ニモ適用セラレベキニ依リ、孰レモ其時期ニ至ル迄ハ本島ニ於ケル外國貿易ハ都テ帝國臣民ニ對シテ發布シタル輸出入稅目及其法規ニ準據シテ支配セラレヘシ。仍テ本島貿易ニ從事スル外國臣民ハ帝國臣民ノ遵奉スルトコロノ輸出入稅目ニ依リ納稅セラルベキ旨ヲ其筋ノ外國公使ヘ通牒ニ及ブベキナリ。第二案ニ依ルトセンカ、始メヨリ本案ノ輸出入稅目ヲ外國公使ノ協定ニ附シ要求シテ曰ク、本島ニ適用セラレベキ輸出



入税目ハ財政々略ニ基キテ制定スルノ必要アリ。而シテ輸入税率如何ハ外國臣民ノ利害ニ直接ノ關係ヲ及ボスコト尠カラザルヲ以テ、帝國新條約施行期日ニ達スル迄ハ内地現行ノ輸入税目ハ本島ニ適用セラルベシ。曰ク本島現時ノ狀況ハ自今二年間ハ島民未ダ全ク帝國臣民ノ境域ニ達セズ、加之各地方ノ内國稅徵收區域ハ大ニ其秩序ヲ紊亂シ俄ニ拾收ス可ラザルニ依リ、便宜上姑ク歲入ノ多分ヲ海關ノ輸出稅ニ求ムルノ方策ニ出ルコトノ止ムヲ得ザル情勢タルヲ以テ、從來施行シ來リタル本島ノ輸出税目ハ目下猶繼續施行セラルベシト、理論的ヨリハ必要上ノ協定ニ及ブラ要スルナリ。顧フニ阿片禁ヲ解キ禁止稅ヲ課スルコトハ各國固ヨリ異議ナカル可シ。輸出税率如何ニ至テハ是又各國ノ容喙ヲ強行セザル所タルベシ。何者彼レ若シ異議ヲ此ニ主張セバ我ニ於テ翻テ内國稅ノ便法ヲ取リ、同一ノ物品ニ對シテ猶增稅ヲ賦課スルノ權ヲ有スレバナリ。況ンヤ本案ノ輸出税率ハ更ニ新案ノ高稅率ヲ制定スルニ非ズシテ從來ノ慣行ニ係ル稅率ヲ繼續施行セムトスルニ於テオヤ。而シテ之ヲ繼續施行スルノ結果トシテ本案曰フトコロノ回漕規定ヲ施行スルニ於テモ、是亦異議ヲ生ズベキ理由アルナシ。獨リ彼レノ要求スル所ハ本島ニ於テ適用スル輸出税率ハ各國相均霑スル所タル可シト云フニ過ギザルベシ。帝國新條約ニ於テ輸出税率ノ記載セラレザル所以ノモノハ蓋シ此義ニ外ナラザルベキノ耳。

## 臺灣總督府條例草案

第一條 臺灣總督府ヲ置キ臺灣島及澎湖列島ヲ管轄セシム。

第二條 總督ニ左ノ職員ヲ置ク。

總督

民政局長官

陸軍局長官

海軍局長官

參事官

祕書官

屬

第三條 總督ハ親任トス陸海軍大將若クハ中將ヲ以テ之ニ充ツ。

第四條 總督ハ天皇ニ直隸シ其管轄區域内ニ在ル陸海軍ヲ統率シ行政司法ノ事ヲ統理ス。

第五條 總督ハ其管理區域内ノ警備及防禦ノ事ヲ掌ル。



第六條 總督ハ其管轄區域内ノ衛戍勤務ヲ統轄シ諸團隊長ニ命ジテ之ヲ實行セシム。

第七條 總督ハ陸軍及海軍軍政並人事ニ關シテハ陸軍大臣及海軍大臣國防及出師ニ關シテハ參謀總長及海軍令部長ノ規畫ニ從フヘシ。

第八條 總督ハ麾下ノ船舶ヲ本邦及清國沿岸ニ派遣スルコトヲ得。

第九條 總督ハ戰時ニ在リテ軍司令官ト同一ノ職權ヲ有ス。

第十條 總督ハ主任ノ事務ニ付法律勅令ノ制定廢止及改正ヲ要スルコトアルトキハ案ヲ具ヘ内閣總理大臣ニ稟申スヘシ。

第十一條 總督ハ主任ノ事務ニ付其職權若クハ特別ノ委任ニヨリ府令ヲ發スルコトヲ得。

第十二條 總督ハ所部ノ官吏ヲ統率シ奏任文官ノ進退ハ内閣總理大臣ヲ經テ之ヲ上奏シ判任官以下ハ之ヲ專任ス。

第十三條 總督ハ内閣總理大臣ヲ經テ所部文官ノ叙位叙勳ヲ上奏ス。

第十四條 民政局長官ハ勅任トス總督ヲ佐ケ行政及司法ニ關スル事務ヲ整理ス。

第十五條 陸軍局長官ハ勅任トス總督ヲ佐ケ陸軍軍政及軍令ニ關スル事務ヲ整理ス。

第十六條 海軍局長官ハ勅任トス總督ヲ佐ケ海軍軍政及軍令ニ關スル事務ヲ整理ス。

第十七條 參事官ハ 人奏任トス總督又ハ長官ノ命ヲ承ケ審議立案ヲ掌リ又臨時命ヲ承ケ各局ノ事務ヲ助ク。

務ヲ助ク。

第十八條 秘書官ハ 人奏任トス總督ノ命ヲ承ケ機密事務ヲ掌リ又臨時命ヲ承ケ總督官房又ハ各局ノ事務ヲ助ク。

第十九條 屬ハ 人判任トス上官ノ命ヲ承ケテ庶務ニ從事ス。

第二十條 總督府ニ總督官房ヲ置キ左ノ事務ヲ掌ラシム。

- 一、機密ニ屬スル事項
- 二、官吏ノ進退身分ニ關スル事項
- 三、總督ノ官印及總督府印管守ニ關スル事項
- 四、公文書類及成案文書ノ接受發送ニ關スル事項
- 五、統計報告ノ調製ニ關スル事項
- 六、公文書ノ編纂保存ニ關スル事項
- 七、總督府ノ經費及諸收入ノ豫算決算並ニ會計ニ關スル事項
- 八、總督府ノ官有財産及物品ニ關スル事項
- 第二十一條 便宜ニ從ヒ總督官房ノ事務ヲ各局ニ於テ處理セシムルコトヲ得。
- 第二十二條 各局長官ノ中故參者ヲ以テ總督官房長ヲ兼務セシム。



第二十三條 總督府ニ任用スル文官ハ當分ノ内文官任用令ニ據ラス之ヲ任用スルコトヲ得。

第二十四條 前條ニ依リ任用シタル文官ハ高等又ハ普通試験ヲ經ルニアラサレハ他ノ文官ニ轉任スルコトヲ得ス但文官ニ任用後三ケ年以上官務ニ從事シ總督ニ於テ適當ト認メタル者ハ此限ニ非ラス

第二十五條 總督府ニ任用スル文官ハ當分ノ内例規ニ據ラス進級セシムルコトヲ得。

第二十六條 民政局陸軍局官制ハ別ニ之ヲ定ム。

附 則

第二十七條 本令ハ明治 年 月 日ヨリ施行ス。

## 臺灣總督府民政局官制

第一條 民政局ハ臺灣總督府ノ管轄ニ屬スル行政及司法ニ關スル事務ヲ整理スル所トス。

第二條 民政局長官ハ臺灣總督ニ隸シ行政及司法ニ關スル諸務ヲ管理シ及局務整理ノ責ニ任ス。

第三條 民政局ニ左ノ各部ヲ置ク。

總務部

警務部

殖産部

稅務部

學務部

民刑部

通信部

第四條 民政局ニ左ノ職員ヲ置ク。

事務官

臺灣總督府民政局官制



技師

屬

技手

警部

第五條 總務部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル。

- 一、機密ニ關スル事項職員ノ進退身分及長官ノ官印局印ノ監守ニ關スル事項
- 二、公文書及成案文書ノ接受發送保存及統計報告ノ調製並ニ圖書ノ管理ニ關スル事項
- 三、外國人交渉ニ關スル事項

四、民政局所管ノ經費及諸收入ノ豫算決算及所屬官衙ノ出納官吏監督ニ關スル事項

五、民政局所管ノ官有財産ノ管理需要物品ノ購買保存出納ニ關スル事項

第六條 警務部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル。

一、人口戶籍賑恤救濟並ニ警察ニ關スル統計報告及高等警察ニ關スル事項

二、公衆衛生及病院醫師藥劑師等ニ關スル事項

三、監獄ニ關スル事項

第七條 殖産部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル。

一、農業山林牧畜狩獵等ニ關スル事項

二、商工鑛山度量衝商事會社等ニ關スル事項

三、荒蕪拓植及生蕃招撫等ニ關スル事項

第八條 稅務部ニ於テハ左ノ事項ヲ掌ル。

一、關稅及諸稅ノ調査賦課徵收等ニ關スル事項

二、各開港出入ノ船舶取締ニ關スル事項

第九條 學務部ニ於テハ左ノ事項ヲ掌ル。

一、普通及高等教育及臺灣語學校ニ關スル事項

二、教科圖書編纂ニ關スル事項

第十條 民刑部ニ於テハ民事及刑事ニ關スル事務ヲ掌ル。

第十一條 通信部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル。

一、郵便電信ニ關スル事項

二、船舶燈臺氣象測量等ニ關スル事項

第十二條 民政局ノ下ニ臺北、臺中、臺南、臺東ノ四縣治部及澎湖島廳ヲ置ク其管轄區域ハ府會ヲ以テ之ヲ定ム。



第十三條 各縣治部ノ下ニ左ノ支廳ヲ置ク其管轄區域ハ府會ヲ以テ之ヲ定ム。

臺北縣治部管内

宜蘭、基隆、新竹

臺中縣治部管内

苗栗、鹿港、捕里社、雲林

臺南縣治部管内

嘉義、鳳山、恆春

第十四條 縣治部及島廳ニ於テハ管内ノ地方行政ニ關スル事務ヲ掌ル。

第十五條 各部ノ分課ハ民政局長官ノ定ムル所ニ依ル。

第十六條 總務部長ハ長官ヲ以テ之ニ充テ其他ノ部長島廳長及支廳長ハ事務官中ヨリ臺灣總督之ヲ補ス。

各課ニ長ヲ置キ總督府參事官又ハ民政局事務官技師中ヨリ臺灣總督之ヲ補ス。

第十七條 事務官ハ專任十人奏任トス。

縣治部長ニ補セラル、事務官ハ勅任二等ニ陞スコトヲ得。

第十八條 技師ハ十人奏任トス。

第十九條 屬ハ 人判任トス。

第二十條 技手ハ 人判任トス。

第二十一條 警部ハ 人判任トス。

第二十二條 部長ハ主任ノ事務ニ付其責ニ任ジ所部ノ官吏ヲ監督ス。

第二十三條 縣治部長島廳長事故アルトキハ次席者其事務ヲ代理ス。

第二十四條 縣治部長島廳長ハ民政局長官ノ指揮監督ヲ承ケ管轄區域内ノ行政事務ヲ管理ス。

第二十五條 縣治部長島廳長ハ法律命令ニ依リ若クハ特別ノ委任ニ依リ縣令若クハ島廳令ヲ發スルコトヲ得。

第二十六條 縣治部長島廳長支廳長ハ廳中處務ノ細則ヲ設ケ事務ヲ分掌ヲ爲サシムルコトヲ得。

第二十七條 支廳長ハ民政局長官ノ指揮及ビ縣治部長ノ指揮監督ヲ承ケ管轄區域内ノ行政事務ヲ管

理ス。

第二十八條 技師ハ民政局長官又ハ部長ノ命ヲ承ケ諸般ノ事務ヲ分掌ス。

第二十九條 屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス。

第三十條 技手ハ上官ノ命ヲ受ケ技術ニ從事ス。

第三十一條 警部ハ上官ノ指揮ヲ受ケ事務ヲ分掌シ部下ノ巡查ヲ指揮監督ス。



第三十二條 第四條職員ノ外地方醫員ヲ置ク奏任若クハ判任ノ待遇ス。

附 則

第三十三條 本令ハ明治 年 月 日ヨリ施行ス。

### 臨時臺灣鐵道部官制

第一條 臨時臺灣鐵道部ハ臺灣總督ノ監督ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル。

一、臺灣ニ於ケル官設鐵道ノ敷設保存及ビ運輸ニ關スル事項。

一、臺灣ニ於ケル官設鐵道ノ歲入歲出豫算決算出納並需要物品購買保存及出納ニ關スル事項。

第二條 臨時臺灣鐵道部ニ左ノ職員ヲ置ク。

部 長	人
事 務 官	人
技 師	人
書 記	人
技 手	人

第三條 部長ハ奏任トス臺灣總督及民政局長官ノ指揮ヲ承ケ部務ヲ管理ス。

第四條 事務官ハ奏任トス部長ノ指揮ヲ承ケ部務ヲ分掌ス。

第五條 技師ハ奏任トス部長ノ指揮ヲ承ケ工部ヲ分掌ス。



第六條 書記ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス。

第七條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ工事ニ従事ス。

附 則

第八條 本令ハ明治 年 月 日ヨリ施行ス。

### 臨時臺灣土木部官制

第一條 臨時臺灣土木部ハ臺灣總督ノ監督ニ屬シ臺灣及澎湖列島ノ土木事業ヲ計畫シ及其施行ヲ管理スル所トス。

第二條 臨時臺灣土木部ニ左ノ職員ヲ置ク。

部 長	人
技 師	人
技 手	人
書 記	人

第三條 部長ハ奏任トス臺灣總督及民政局長官ノ指揮ヲ承ケ部務ヲ管理シ所屬ノ職員ヲ指揮ス。

第四條 技師ハ奏任トス部長ノ指揮ヲ承ケ部務ヲ分掌ス。

第五條 技手ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ工事ニ従事ス。

第六條 書記ハ判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス。

附 則

第七條 本令ハ明治 年 月 日ヨリ施行ス。



# 臺灣稅關官制

第一條 臺灣稅關ハ民政局長官ノ管理ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル。

- 一、各開港ニ於ケル船舶ノ出入ニ關スル事項
- 二、貨物ノ輸出入ニ關スル事項
- 三、各開港外ニ於ケル外國貿易取締ニ關スル事項
- 四、各開港外ニ於ケル輸出入貨物搭載ノ船舶出入ニ關スル事項
- 五、輸出入稅噸稅外諸收入ノ徵收ニ關スル事項
- 六、港内航路標識燈臺及港内ノ安全ニ關スル事項
- 七、港内氣象ノ測定潮流干満ノ信報及海上信號ニ關スル事項
- 八、船籍ニ關スル事項
- 九、稅關管理ノ倉庫ニ關スル事項

第二條 左ノ四港ニ稅關ヲ置ク

臺北縣	淡水
-----	----

臺北縣	基隆
-----	----

臺南縣	安平
-----	----

臺南縣	打狗
-----	----

第三條 稅關ノ外稅關ノ事務ヲ行フヘキ場所ニ稅關出張所ヲ配置ス。配置ハ別ニ臺灣總督之ヲ定ム。

第四條 各稅關ニ稅關長一人ヲ置ク奏任トス。

淡水稅關長ハ基隆稅關長安平稅關長ハ打狗稅關長ヲ兼ネシム。稅關長ハ港長ヲ兼ヌルコトヲ得。

第五條 各稅關ヲ通ジテ左ノ職員ヲ置ク。

港長	二人	奏任
鑑定官	二人	奏任
屬	四十八人	判任
鑑定吏	六人	判任
監吏	十五人	判任
監吏補	九十八人	判任



- 第六條 稅關長ハ民政局長官ノ指揮監督ヲ承ケ稅關ニ關スル一切ノ事務ヲ掌理ス。
- 第七條 港長ハ稅關長ノ指揮監督ヲ承ケ港内ノ安全ニ關スル一切ノ事務ヲ掌理ス。
- 第八條 鑑定官ハ稅關長ノ指揮監督ヲ承ケ貨物檢査鑑定ノ事ヲ掌理ス。
- 第九條 屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス。
- 第十條 鑑定吏ハ上官ノ指揮ヲ承ケ貨物檢査鑑定ニ從事ス。
- 第十一條 監吏ハ上官ノ指揮ヲ承ケ監吏補ヲ監督シテ密商脫稅ノ監視ニ從事ス。
- 第十二條 監吏補ハ上官ノ指揮ヲ承ケ監吏ノ事務ヲ助ク。

附 則

第十三條 本令ハ明治二十年 月 日ヨリ施行ス。

### 臺灣總督府陸軍局官制

- 第一條 陸軍局ハ臺灣總督ノ統轄ニ屬スル陸軍々政及軍令ニ關スル事務ヲ整理スル所トス。
- 第二條 陸軍局長官ハ陸軍少將ヲ以テ之ニ補シ臺灣總督ニ隸シ陸軍軍政及軍令ニ關スル諸務ヲ管理シ又局務整理ノ責ニ任ス。
- 第三條 陸軍局長官ハ戰時ニ在テハ戰時高等司令部勤務令ニ準シ軍參謀長ノ職務ヲ執ルモノトス。
- 第四條 陸軍局ニ左ノ諸部ヲ置ク。

參謀部

副官部

憲兵部

監督部

軍醫部

法官部

第五條 陸軍局職員定員ハ別表定ムル所ニ依ル。







# 臺灣總督府海軍局官制

第一條 海軍局ハ臺灣總督ノ統轄ニ屬スル海軍軍政及軍令ニ關スル事務ヲ整理スル所トス。

第二條 海軍局長官ハ海軍少將ヲ以テ之ニ補シ臺灣總督ニ隸シ海軍々政及軍令ニ關スル諸務ヲ管理シ及局務整理ノ責ニ任ス。

第三條 海軍局ニ副官部軍務部軍政部ヲ置キ左ノ職員ヲ以テ組織ス

副官	一人	海軍少佐若クハ大尉
部長	二人	海軍大佐
科長	四人	海軍機關大監若クハ少監、海軍軍醫大監若クハ少監、海軍主計大監若クハ少監、主理
部員	四人	海軍少佐、海軍大尉、海軍大機關士
科員	七人	海軍少技監、海軍大尉、海軍大技士、海軍大軍醫、海軍大主計、主理、技師
看護手	一人	

書記 十三人  
 錄事 一人  
 技手 四人

第四條 副官部ニ於テハ人事及ヒ各部ニ屬セサル庶務ヲ掌ラシム。

第五條 軍務部ニ於テハ出師作戰沿岸防禦及諜報等ノ事ヲ掌ラシム。

第六條 軍政部ニ於テハ軍事行政ニ屬スル諸般ノ事務ヲ掌リ第一科第二科第三科第四科ヲ置キ左ノ區分ニ依リ之ヲ分掌セシム。

第一科 船舶兵器汽機機關ニ關スル事項

第二科 金錢及軍需品ニ關スル事項

第三科 醫務衛生ニ關スル事項

第四科 海軍刑法及海軍治罪法其他法律ニ關スル事項

第七條 副官ハ長官ノ命ヲ承ケ部務ヲ掌理ス。

第八條 軍務部長ハ長官ヲ補佐シ其機務ニ參シ部下職員ヲ指揮監督ス。

第九條 軍政部長ハ長官ヲ補佐シ部下各科長以下職員ヲ指揮監督ス。

第十條 各科長ハ軍政部長ノ命ヲ承ケ各主任ノ事務ヲ分擔シ科員以下職員ヲ監督ス。







## 臺灣及其ノ附屬島住民ノ現時ノ國 民分限並ニ日本國トノ將來ノ關係

デニソソ

下ノ關係約ノ第五條ニ於テハ割與セラレタル地方ノ住民ニシテ右割與セラレタル地方ノ外ニ住居セント欲スル者ハ自由ニ其ノ所有不動産ヲ賣却シテ退去スルコトヲ得ベシ。其ノ爲メ本條約批准交換ノ日ヨリ二ケ年間ヲ猶豫スベシ。但シ右年限ノ滿チタル時ハ未ダ該地方ヲ去ラザル住民ヲ日本國ノ都合ニ依リ日本國臣民ト看做スコトアルベシト規定セリ。此規定ニ關シ右ノ如キ疑問起ルベシ。

第一 臺灣及其附屬島ノ住民ノ現時ノ國民分限ハ如何。

第二 右二年ノ猶豫期限内ニ出產シタル住民ノ小兒ノ國民分限ハ如何。

第三 右二ケ年ノ猶豫期限經過ノ後割與セラレタル地方ノ住民ヲ日本國臣民トナス爲メニ日

本國ハ下ノ關係約ヲ補助スル爲メ法律ヲ設クルノ必要アリヤ。

往時ニ在リテハ土地ヲ割與スルトキハ、其割與セシ國ト割與セラレタル土地ノ住民トノ間ノ關係

ハ其割與ニ依リ自然ニ斷絶セラレ、斯ノ如キ住民ノ誓忠ハ全然且ツ無條件ニテ新主權者ニ移轉スベキモノナリトノ說ナリキ。然レドモ誓忠ハ明言若クハ暗裏ノ肯諾ニ因テ生ズルモノナリトノ論理起リタルト共ニ、法律上一層寬濶ナル規定ヲ設クルニ至レリ。此ニ於テ國籍選擇ノ權ガ割與セラレタル地方ノ住民ニ存スルコト一般ニ承認セラルルニ至レリ。故ニ斯ノ如キ住民ハ割與セラレタル土地ヨリ退去スルコトヲ許サレ、以テ其ノ原國籍及誓忠ヲ保有スルコトノ得ルト同時ニ、若シ右ノ如キ住民ニシテ境界内ニ留リシ時ハ、割與ヲ受ケタル國ノ臣民トナルコトヲ擇ビタルモノト見做サレタルナリ。然レドモ其選擇ハ直チニ爲スヲ要シ、且ツ退去ノ場合ニハ其財產ヲ處分スル爲メニハ少シノ猶豫期限ヲモ與ヘラレザリシナリ。

近年ニ至リ國際公法ハ讓與セラレタル土地ノ住民ノ屬籍及待遇上ニ一層大ナル改善ヲ加ヘタリ。現時ニ在リテハ右ノ如キ住民ニシテ若シ讓與ヲナシタル國ト盛衰ヲ共ニセント決心シタル者ニハ、其財產ヲ處分シ退去スルコトヲ得セシメンガ爲メ一定ノ猶豫期限ヲ與フルコトヲ以テ常例トス。若シ右ノ如キ住民ニシテ一定ノ期限内ニ退去スルノ權ヲ利用セザルトキハ、該住民ハ讓與ヲ受ケタル國ノ臣民ト見做サルベシ。然レドモ其選擇ハ通常個々ノ人々ニ存スルモノタルコトヲ記憶スベシ。フエルグソン氏曰ク(三百九節)

割與セラレタル土地ノ住民ガ其ノ本國ニ對スル誓忠ヲ保持スルノ權利ヲ有スルコトハ近世ノ

臺灣及其ノ附屬島住民ノ現時ノ國民分限並ニ日本國トノ將來ノ關係



國際公法ニ於テハ争フベカラザルノ原則ナリトス。故ニ平和條約ニ於テハ割與セラレタル土地ノ住民ヲシテ其ノ財産ヲ携ヘテ其ノ原國籍ノ政府ノ管轄區域内ニ退去(歸國)シ得ルノ自由ヲ與フル所ノ規定ヲ設クルヲ要スルナリ。

ホール氏ハ右ト同一ノ問題ヲ論ジテ(二百六節)

近世ノ條約ニ於テハ讓與セラレタル土地ノ住民ニ其ノ原國籍ヲ保持スルノ自由ヲ與フル所ノ規定ヲ設クルヲ常トス。

ハレツク氏曰ク(第三十三章)

讓與セラレ若シクハ征服セラレタル土地ノ住民ハ其ノ土地ノ引渡ト共ニ戰勝國ノ人民若クハ臣民トナルコトナク、又戰勝者ニ於テモ此等ノ臣民ニ對シ全然且ツ永遠ノ主權ヲ得タリトハ謂フベカラズ。

次ニ其例證トシテ氏ハ左ノ如ク附言セリ。

「カリフォルニア」及「ニューメキシコ」ニ於ケル若干ノ墨西哥人民ハ「グアダルーペヒダルゴ」條約ニ依リ右地方ノ合衆國ニ引渡サレタル爲メ決シテ合衆國ノ人民トナリタルコトナク又決シテ然ル能ハザルナリ。且又「カリフォルニア」ノ住民モ合衆國ノ戰勝後ニ於テモ合衆國議會ノ法律ニ因リ、國籍ヲ附與セラレタル時迄ハ依然トシテ外國人タリシナリ。

前記ノ原則ニ準據シ、千八百六十六年十月三日墺伊兩國間ノ平和條約ニ於テハ割與セラレタル地方ノ住民ニ一ケ年ノ時日ヲ與ヘ、此時限内ニ於テ「墺地利匈牙利國皇帝陛下ノ版圖内ニ退去スルコト、ナセリ。而シテ退去シタル場合ニハ右住民ハ墺國臣民タルノ資格ヲ保持スベシ」ト規定セリ。千八百七十一年五月十日ノ佛國及獨逸國間ノ平和條約ニ於テハ、佛國臣民ニシテ割與セラレタル地方ニ於テ民籍ヲ有セシ者ハ千八百七十二年十月一日迄ハ其籍ヲ佛國ニ變改シ、且ツ同所ニ居留スルコトヲ得ベシ「右ノ如キ場合ニハ佛國人民ノ名稱ヲ保持スベシ」ト規定ヲ設ケタリ。「サンステファア」條約中ニハ左記ノ如キ條款アリ。

露西亞國ニ割與セラレタル地方ニ於ケル住民ニシテ右地方ノ外ニ住居セント欲スル者ハ、自由ニ其ノ所有不動産ヲ賣却シテ退出スルヲ得。右ノ目的ノ爲メ本條約批准ノ日ヨリ起算シテ三年ノ猶豫期限ヲ右住民ニ許與ス。

右期限ノ經過シタル時猶ホ其不動産ヲ賣却セズシテ該地方ニ留マリシ住民ハ露西亞國民タルベシ。

千八百七十九年二月八日露西亞及土耳其間ノ平和條約ニ於テモ亦同様ノ條款アリ。

右條約ノ内ニテ後ノ二條約ハ割與シタル地方ニ留マル住民ノ國民分限ヲ確定シ、初ノ二條約ハ讓與シタル地方ヨリ退去セル住民ノ屬籍ヲ規定セシコトヲ知ルベシ。



前記露土條約中ニ於テ割與地方内ニ留マリ住スル人民ノ將來ノ國民分限ヲ確定スル爲メニ使用セシ「留マルベキ」ナル語ハ斯ノ如キ住民ノ選擇期限内ニ於ケル國民分限ニ關シ一種ノ疑問ヲ生ジタリ。

然レドモ前記千八百六十六年ノ埃伊條約及千八百七十一年ノ佛獨條約ノ文言ハ、退去ノ爲メ與ヘタル期限内ニ讓與地方ヨリ退去スル該地方ノ住民ハ右退去迄ハ其原國籍ヲ保有スルコトヲ判然ト明示スルナリ。

露國ガ「アラスカ」ヲ合衆國ニ讓與セシ千八百六十七年ノ條約ハ、千八百七十八年及千八百七十九年ノ露土條約中ニ於ケル露國政府ノ意志ヲ明示スルモノト信ゼラル。即チ右條約ノ規定ハ左ノ如シ。

讓與地ノ住民ハ其ノ選擇ニ從ヒ其本來ノ誓忠ヲ保有シ、三ケ年内ニ露西亞へ歸國スルコトヲ得。然レドモ若シ右住民ニシテ讓與地ニ留マリ居住セント欲スル者ハ合衆國人民ニ屬スル總テノ權利、利益及特典ノ享有ヲ許與セラルベシ。

右ノ場合ニ於テハ三ケ年ノ猶豫期限間「アラスカ」ニ居留シタル露國人ハ右期限間ハ其ノ露國ノ國籍ヲ保有シタルコトハ少シモ疑ヲ容レザル所ナリ。而シテ此ノ規定ハ現時ニ於テ一般ニ是認セラ、者ト信ズ。

割與セラレタル土地ノ住民ニシテ選擇ノ爲メ許與セラレタル期限間引渡濟ノ土地内ニ留スル者ハ同地方ニ住居スル總テノ他ノ外國人ト地方的即チ一時ノ誓忠ヲ新主權者ニ對シテ有スルヤ當然ノ事ナリ。然レドモ右猶豫期限間ハ斯ノ如キ住民ハ割與ヲナス國ノ臣民若クハ人民ノ資格ヲ失フト云フハ既ニ論述セシ所、斯クノ如キ住民ニ關スル現今ノ寬大ナル國際慣例ノ基礎タル肯諾ノ原則ヲ無視スルコトナリ。加之斯ノ如キ論旨ノ結果トシテ國籍ヲ變換スルコトハ一時的ノ誓忠ト異ナル永遠的誓忠ニ屬スル固定ノ性質ト矛盾スベシ。

下之關係約ニ於テハ臺灣島ニ居留スル臺灣ノ住民ハ二年ノ猶豫期限間ハ日本國臣民ニアラザルコト疑ヒヲ容レズ。何トナレバ該條約ニ依テ帝國政府ノ保有スル選擇權ハ右猶豫期限經過ヲ待テ始メテ實行セラルベキモノナルガ故ナリ。

國際公法竝ニ下之關係約ノ規定ニ依ルトキハ、第一ノ疑問ニ對シテハ臺灣ノ住民ハ猶ホ未ダ清國ノ臣民ナリト答辯セザルヲ得ザルナリ。而シテ二年ヲ經過シタル後其ノ時マデニ割與セラレタル地方ヨリ退去セザリシ臺灣住民ノ國籍ヲ決定スルコトハ日本國ノ權内ニ屬ス。

此ノ最後ノ點ニ付キ茲ニ一言スベキハ、下之關係約ハ近世ノ爾餘平和條約ト一致セザル點ナキニシモアラズ。斯ク普通ノ例規ニ倣ハザリシハ二個ノ理由アリタルガ爲メナリ。第一ハ經濟上若クハ其他ノ理由ニヨリ、臺灣ニ於ケル清國ノ居住民ニ對シ其ノ舉テ一時ニ歸化スルコトヲ制限シ、或



ハ又之レヲ禁止スル必要アルベシ。然レドモ假令ヘ若シ右ノ如キ居住民ニ向テ日本國臣民トナルコトヲ許可スルコトニ決定シタリトスルモ、該特權ヲ許スニハ數多ノ條件ヲ附シ、容易ニ歸化スルコト出來ザル様ニスルコト必要ナルベシ。然シテ帝國政府ハ此等ノ條件ヲ自由ニ指定スルノ權利ヲ保全シ置クコト肝要ナリ。第二ニハ帝國政府ハ臺灣ノ土人ニ對シ其ノ處置ノ自由ヲ保有シ置クコト亦望マシキコト、認定セラレタリ。

又假令帝國政府ガ臺灣ニ於テ民籍ヲ有スル居住民ニ向ツテ日本國臣民タルノ資格ヲ與フルコトニ決定シタリトスルモ、之レガ爲メ斯ノ如キ居住民ハ日本ノ本國ニ於テ日本國臣民ノ享有スルト同一ノ權利ヲ臺灣ニ於テ享有スベキモノナリトハ謂フ可ラズ。蓋シ憲法ノ規定ハ自然ニハ日本國ノ新領地ニハ及バザルナリ。隨テ右ノ如ク歸化シタル居住民ノ享有スベキ權利ハ臺灣ニ於ケル日本國臣民ニ附與セラレタル丈ノ權利ニ過ギザルベシ。

第二ノ疑問ハ別ニ辯論ヲ要セズ。左ノ如ク答フルヲ得ベシ。即チ二年ノ猶豫期限中ニ出產シタル臺灣ノ居住民ノ子ハ其ノ兩親ノ屬籍ニ從フベシ。

第三ノ疑問ニ對スル答トシテ述ブベキハ、臺灣ノ居住民ニ日本國臣民タルノ資格ル許與スル爲メ日本國ハ法律ヲ設クルコト必要ナルベシ。

之レニ關シ猶ホ説明シ置クベキハ下之關係約ハ臺灣ノ居住民ノ將來ノ國民分限ニ關シテハ何等ノ

約束ヲモ記載セザルナリ。右國民分限ヲ決定スルノ權能ハ日本國ノ保有スル所ニシテ此ノ保有ノ權カヲ實行セシムルハ即チ立法ナリトス。

千八百九十五年十一月二十七日

日本外務省ニ於テ



### 臺灣總督府法院職制

第一條 總督ニ法院ヲ置キ宜蘭、新竹、苗栗、彰化、雲林、埔里社、嘉義、臺南、鳳山、恒春及ヒ澎湖島ニ其支部ヲ置ク。

第二條 總督府法院及ヒ支部ハ各別表ニ定メタル管轄地内ニ於ケル臺灣住民ノ犯罪及ヒ民事訴訟ヲ審判ス。

總督府法院ハ支部ノ管轄地内ニ屬スル事件ト雖トモ總督ヨリ特別ノ命令アルトキハ之ヲ審判ス。

第三條 總督府法院ニ院長一人、審判官四人、書記四人、各支部ニ審判官書記各一人若クハ二人ヲ置ク。

院長、審判官ハ總督府高等官中ヨリ書記ハ同判任官中ヨリ總督之ヲ選任ス。

第四條 總督府法院長ハ院務ヲ綜理シ本院及ヒ支部審判官以下ノ職務ヲ監督ス。

又院長ハ審判官トシテ其職務ヲ行フコトヲ得。

審判官ハ刑事民事ノ審判ニ關スル職務ヲ行フ。

書記ハ審判ニ關スル調書其他ノ記録ヲ作り及ヒ庶務ニ服ス。

第五條 刑事民事ノ審判ハ主任審判官單獨ニテ之ヲ行フ。但刑事判決ノ執行ハ特ニ定メタルモノノ外總督ノ認可ヲ經ルコトヲ要ス。

第六條 總督府法院及ヒ各支部ニ通譯官並ニ延丁ヲ置キ上官ノ指揮ニ從ヒ各事務ニ服セシム。

### 臺灣總督府法院管轄區域

法院及支部廳名	管轄區域
本院	臺北縣直轄地及基隆淡水各支廳管轄地
宜蘭支部	臺北縣宜蘭支廳管轄地
新竹	臺北縣新竹支廳管轄地
苗栗	臺灣民政支部苗栗出張所管轄地
彰化	彰化
雲林	雲林
埔里社	埔里社
嘉義	嘉義



臺南支部	臺南民政支部直轄地安平出張所管轄地
鳳山	臺南民政支部鳳山出張所管轄地
恒春	恒春
澎湖島	澎湖島廳管轄地

朱書

『表中彰化支部ハ本院ニ移シ臺灣支部ト改稱ス』

# 臺灣總督府條例

再出

陸達第七十號

臺灣總督府條例左ノ通り定メラル

明治廿八年八月六日

陸軍大臣侯爵 大山巖

第一條 臺灣全島鎮定ニ至ル迄臺灣總督ノ下ニ軍事官衙ヲ組織スルコト別表ノ如シ。

第二條 參謀長ハ總督ヲ輔佐シ總督府内各局部ノ業務ヲ監視ス各局長ハ總督ニ具申スヘキ件ニ就テハ必ラス先ツ參謀長ノ承認ヲ經ヘキモノトス。

參謀長ハ幕僚ノ事務整理ニ關シ總督ニ對シ其責ニ任ス。

參謀及副官ハ參謀長ノ指揮ヲ受ケ各自擔任ノ事務ニ服シ其責ニ任ス。

新參ノ陸軍佐官副官ハ專ラ總督府全體ノ給養ヲ掌ル軍吏ハ此副官ノ指揮ヲ受ケ會計經理ノ事務ヲ掌ル陸海軍尉官副官ノ内各一名ハ總督ニ專屬シ通常庶務ヲ分擔セス唯事務繁劇ナル時爲シ得レハ



之ヲ幫助ス。

第三條 各局長ハ各自擔任ノ局務整理ニ關シ總督ニ對シ其責ニ任ス。

各部長各局ノ副官及事務官ハ局長ノ指揮ヲ受ケ擔任ノ事務ニ服シ其責ニ任ス。

各部ノ職員ハ部長ノ指揮ヲ受ケ擔任ノ事務ニ服シ其責ニ任ス。

第四條 民政局長ハ民政ニ關シ適宜ニ課ヲ分チ又民政支部ヲ置キ總督ノ認可ヲ得テ隸屬スル人員ヲ配屬シ各自擔任ノ事務ヲ整理シ其責ニ任セシム。

### 軍衙組織ニ付大本營ト臺灣事務局トノ事務分界

今般臺灣總督府ヲ以テ軍衙組織トセラレタルニ付テハ別ニ定ムルモノ、外大本營ト臺灣事務局トノ事務ノ分界ヲ左ノ如ク定ム。

- 一、民政ニ屬スル事件ハ臺灣事務局ノ所管トシ臺灣總督ハ臺灣事務局總裁ト直接往復ス。
- 一、軍事ニ屬スル事件ニ就テハ臺灣總督ハ大本營又ハ陸海軍省ト直接往復ス。
- 一、軍事ニ屬スルモノト雖トモ民政ニ關連スルモノハ大本營又ハ陸海軍省ヨリ事務局ニ協議シテ處分ス其急施ヲ要シテ協議ノ違ナキモノハ大本營又ハ陸海軍省ニ於テ處分ノ後可成速ニ事務局ニ報告ス。

#### 勅令案

朕茲ニ戰時若クハ事變ニ際シ軍衙ニ置ク文官ノ件ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

御名 御璽

軍衙組織ニ付大本營ト臺灣事務局トノ事務分界



年 月 日

內閣總理大臣

勅令第

第一條 戰時若クハ事變ニ際シ軍衙ニ置ク文官ハ明治二十六年勅令第百八十三號文官任用令ノ規程ニ依ラス任用シ及明治二十五年勅令第九十六號高等官官等俸給令第七條及第八條明治二十四年勅令第八十三號判任官俸給令第三條ノ規程ニ依ラス叙等陞叙又ハ増給スルコトヲ得。

第二條 文官任用令ノ資格ヲ具フル者ニシテ前條ニ依リ叙等陞叙又ハ増給シタル者ヲ普通文官ニ任用スル場合ニ於テ高等官ニ在テハ明治二十五年勅令第九十六號高等官官等俸給令第七條第一項及第八條ノ制限以內ニ於テ其官等ニ叙シ判任官ニ在テハ明治二十四年勅令第八十三號判任官俸給令第三條ノ制限以內ニ於テ其給俸ヲ給ス

參照

高等官官等俸給令（明治廿五年十一月勅令第九十六號）

第七條 初メテ奏任文官ニ任セラル、者ノ官等ハ六等以下トス。

奏任文官ヲ勤メ退官シタル者再ヒ奏任官ニ任セラル、場合ニ於テ其官等ハ前官ノ官等以下トス

第八條 奏任官ノ官等ハ別ニ進級ノ例ヲ定メタルモノヲ除ク外在職滿三年ヲ踰ユルニアラサレハ陞叙スルコトヲ得ス。

判任官俸給令（明治廿四年七月勅令第八十三號）

第三條 判任官ハ每級在職一年以上ニ至ラサレハ増給スルコトヲ得ス。

奏任官  
判任官  
在職三年以上  
在職一年以上  
昇叙



## 編成表中參謀官以下各局長等 補職ノ件

- 一、編成表中參謀長以下各局部長又ハ參謀若クハ副官等ハ大本營ニ於テ補職セラルヘキヤ將  
々臺灣總督府ニ於テ隨意命課シ得ヘキヤ。
- 二、前項若シ大本營ニ於テ補職セラル、トセハ將來變更ヲ要スルトキハ其都度總督ヨリ稟議  
セサルヘカラサルヤ。

「朱書以  
下如皆做此

「以上第一項第二項ハ左ノ通

- 上長官以下進級補叙ノ權ハ既ニ臺灣總督ニ假サレタリ將軍ノ進退ハ仍大本營ノ指揮ヲ要ス」
- 三、民政局長又ハ民政局事務官ハ參謀又ハ副官ノ如ク一種ノ職名ニ過キササルヘシ果シテ然レ  
ハ文官ヲ以テ此等ノ職員ニ充ツヘキ場合ニ於テハ其ノ身分ハ尙ホ從前ノ如ク他ノ官職ヲ帶  
ヒタル官吏（假令ハ公使等ノ如シ）又ハ陸軍省雇員若クハ臺灣總督府雇員トシテ相當ノ待  
遇ヲ爲スヘキ義ナリヤ。

「臺灣總督府編制表備考（八）ニ依レハ「民政局ノ職員ハ文武官ヲ以テ之ニ充ツ」ルモノトス。武官ヲ

以テ之ニ充ツル場合ニ於テ其局長事務官等ハ一種ノ職名タルコト明カナリト雖「文官ヲ以テ之ニ充  
ツ」ト云フニ至テハ備考ノ明文ノミヲ以テハ其意分明ナラズ、更ラニ他ノ事由ニ依テ之ヲ推測スル  
ニ「文武官ヲ以テ之ニ充ツ」トシタルハ武官ヲ以テ之ニ充テ又ハ文官ヲ任用スルコトヲ得」ノ意味  
ナリト解釋スルヲ得ベシ。既ニ文官ナリトセバ本項ノ疑問ハ以下第四項ヨリ第六項ニ至ル疑問ト共  
ニ自ラ消滅スベシ。

之ヲ文官トスル時ハ使用及官等ニ就テハ一般ノ規定ヲ適用セザルベカラズ。故ニ別ニ勅令案ヲ具  
シテ其除外例ヲ作り以テ實際ノ需用ニ應ゼントス」

四、各部屬員中准士官以下以外ニ「判任文官」ノ一項アリ右ハ必スシモ書記（官名）ノ名稱  
ヲ附スルノ謂ニ非スシテ從來ノ陸軍省雇員又ハ臺灣總督府雇員中ノ判任官待遇ノ輩ヲ指稱  
シタルモノナリヤ。

五、郵便部職員ハ備考第七項ニ依レハ文官ヲ以テ之ニ充ツトアリ右ハ現在々官者（假令ハ遞  
信省書記官ヲ部長ニ補スルノ類）ヲ該部長其他ニ補職スルノ義ナリヤ又ハ民政局事務官ノ  
如ク陸軍省雇員又ハ臺灣總督府雇員タル者ヲシテ之ニ當ラシムルノ義ナリヤ。

六、編制表ニ依レハ民政局事務官ハ中佐以下少尉以上ノ範圍内ニ於ケル相當官トシテ待遇ス  
ヘキカ如シ然レトモ右ハ身分上ノ取扱ヲ定メタルモノニシテ必ラスシモ俸給ノ多寡ニ關係

編成表中參謀官以下各局長等補職ノ件



スヘキニ非サルヲ以テ其ノ俸給ノ多寡ヲ問ハス又其ノ待遇スヘキ相當官ノ位置ヲ特定セス唯取扱上該相當官ノ範圍内ニ於テ廣ク之ヲ待遇シ差支ヘナキヤ。

『以上第三項ヲ參照スヘシ』

七、條例第四條ノ民政支部トハ必スシモ特定名稱ニ非ズシテ要スルニ民政局ノ分派ヲ指稱シタルモノナルベシ果シテ然レハ該分派ニ對シ或ハ縣廳ノ名ヲ附シ若クハ支廳ト稱スルモ差支ナカルヘキヤ。

『本文ノ通ニテ差支ナシ』

八、前項然リトセハ隨テ此ニ派遣スヘキ民政局事務官ニハ特ニ知事又ハ支廳長等一時便宜ノ名稱(一種ノ職名トシ)ヲ附スルモ差支ナキヤ。

『本文ノ通ニテ差支ナシ』

### 臺灣總督府諸般經費豫算ノ標準

從來臺灣總督府ニ係ル諸般ノ經費ハ、必要ニ應ジ其時ノ臨時軍時費ヲ以テ支辨致來候處、將來ニ於テハ之ガ豫算ヲ定メ置候事整理上尤モ必要ト存候。然ルニ臺灣總督府ノ組織ハ未ダ確定ニ至ラズ、又其施スベキ事業モ明定シ難キ今日ノ場合ニ於テハ、全備ノ豫算ハ到底相立テ難ク候得共、豫算全ク無之テハ事業ノ進抄經費ノ整理上不都合不少候ニ付、曩ニ臺灣總督ヨリ提出ノ同府組織ノ草案ニ本ヅキ、其職員ノ員數ニ係リ、又事業ノ一班ヲ豫想シ、豫算書調製致候。尤モ本調査ハ未確定ノモノヲ豫想積算書概算額決議ニ付、實際ニ於テハ定額ト齟齬ノモノ可有之ハ數ノ免レザル事ト被存候。且今後六ヶ月以内ニ於テハ臨事軍事費ノ處分及臺灣事業ノ計畫モ確定ヲ得候事ト存候ニ付、一ト先別紙ノ通六ヶ月分ノ經費豫算書調製提出候間御審議相成度候也。

#### 豫算積算ノ標準

- 一、親任官 一人
- 一、勅任官 十五人

臺灣總督府諸般經費豫算ノ標準



一、奏任官 八十人  
 一、判任官 三百人

一、雜給ヲ以テ支辨ノ傭員 二百人 (平均三十圓)  
 一、同 小使 五百人

右俸給及給料ニ五分ノ二ノ増俸ヲ加フ。

前記ノ人員ヲ本トシ臨時軍事費歲出科目ノ諸項目ニ從ヒ概算額ヲ調査シタルモノナリ。

12  
30  
42  
30

臺灣總督府條例中

陸軍部ニ關スル諸條例草案

臺灣總督府陸軍局參謀部及副官部服務規則

第一條 陸軍局參謀ハ平時ニ在テハ概ネ師團司令部本部服務規則第八條ニ準シテ事務ヲ分掌ス。  
 第二條 陸軍局參謀ハ戰時ニ在テハ戰時高等司令部勤務令ニ準シ概ネ軍參謀ノ職務ヲ執ルモノトス。

第三條 副官ハ陸軍局一切ノ庶務ニ任シ概ネ左ノ事項ニ係ル庶務ヲ分掌ス。

其一、日令、報告、暗號、衛戍、軍隊ノ內務

其二、文書ノ往復並ニ圖書

其三、將校下士卒人事叙勳恩給

其四、軍馬兵器彈藥裝具

第四條 高級ノ副官ハ副官部ノ庶務ヲ總理シ其事務ノ整否ハ躬ラ其責ニ任ス他ノ副官モ又各自分掌

陸軍部ニ關スル諸條例草案



ノ事務ニ就テ整理ノ責ニ任スルモノトス但其處理ノ件ハ豫メ高級副官ノ査閲ヲ受ク可シ。  
 第五條 副官ハ局内一切ノ取締ニ任シ又部内ノ會計經理ヲ管知ス。  
 第六條 戰時ニ在テハ概ネ高等司令部勤務令軍副官ノ規定ニ準據ス。

臺灣總督府陸軍局軍醫部服務規則

第一條 臺灣總督府ノ陸軍局軍醫部ハ臺灣總督ノ管下ニアル陸軍全體ノ衛生事務ヲ統轄スル所トス。  
 第二條 軍醫部長ハ陸軍局長官ノ指示ヲ受ク衛生事務ヲ總理シ衛生部員ヲ指揮監督ス。  
 衛生部員ノ人事ニ關シテハ陸軍省醫務局長ノ屬處ヲ承ク。  
 第三條 軍醫部長ハ戰時ニ在テハ戰時衛生勤務令ニ基キ軍々醫部長ノ職務ヲ執ルモノトス。  
 第四條 軍醫部長ハ管掌ノ事務ニシテ各部隊ニ涉ルモノハ直接ニ照會スルコトヲ得。  
 第五條 軍醫部長ハ管内衛生部員ノ派遣又ハ出張等ヲ要スルトキハ之ヲ陸軍局長官ニ具申スルコトヲ得。  
 第六條 軍醫部長ハ管内諸部隊ヲ巡閱シ事務ノ整否等ヲ査察シ陸軍局長官及醫務局長ニ報告スルコトヲ得。

第七條 軍醫部長ハ管内ニ傳染病流行スル時ハ豫防ノ方法ヲ計畫シ陸軍局長官ニ具申スヘシ。  
 第八條 軍醫部長ニ報告ス可キハ月報年報トス。  
 第九條 定例報告ノ外衛生上臨時必要ト認ムル事項及管内地方ノ衛生上ニ關スル事項ヲ醫務局長ニ報告ス可シ。  
 第十條 軍醫部長不在ノ時ハ駐屯ノ師團軍醫部長之ガ代理ヲ爲スモノトス。  
 第十一條 部員ハ軍醫部長ノ命ヲ承ケ各分擔ノ事務ニ服ス。

臺灣總督府陸軍局監督部條例

第一條 臺灣陸軍監督部ハ臺灣總督府所在ノ地ニ之ヲ置キ軍金糧部、陸軍糧餉部、陸軍經營部ヲ管轄シ總督府管下ニ在ル野戰師團外各軍隊會計事務ヲ指揮監視シ陸軍官衛會計事務並ニ砲工兵科ニ屬スル武器材料及器具以外ノ物件ヲ監視シ管内軍吏部士官下士ノ人事ヲ掌トル。  
 第二條 監督部ニ左ノ職員ヲ置ク。

- 部 長 一等監督
- 課 長 二三等監督若クハ監督補
- 部 員 一二三等軍吏

陸軍部ニ關スル諸條例草案



第三條 監督部ニ三課ヲ置ク第一課ハ金櫃計算事務第二課ハ糧食被服事務第三課ハ建築陣營事務ヲ分掌ス。

第四條 監督部ハ總督府ノ管轄區域ヲ以テ事務ノ管區トス。

第五條 監督部長ハ陸軍大臣ニ隸シ其部長タル監督ハ陸軍局ノ列員ニシテ同局長官ノ指示ヲ受ケ又會計經理事務ノ實施ニ付テハ法律規則ヲ遵奉シ其法規ニ明文ナキモノハ經理上上官ノ指揮ヲ乞フ可シ。

監督部長ハ監督部ニ屬スル事項ニシテ總督ニ上申シ又ハ總督ノ名ヲ以テ命令ヲ發ス可キハ先ヅ之ヲ陸軍局長官ニ具伸ス。

第六條 監督部長ハ部務ヲ綜理シ管掌ノ事務ニ於テハ其責ニ任ス。

第七條 監督部長ハ管區内ノ會計經理上ニ就テ必要アル時ハ當該長官又ハ主任官吏ニ諮問シ其辯明ヲ求ムルコトヲ得。

第八條 監督部長ハ管區内官衙及軍隊ニ係ル會計經理上ノ閱檢ヲ行ヒ且必要ニ際シ官衙軍隊ノ金櫃物體及帳簿ヲ検査ス又駐紮師團外ノ官衙及軍隊ニ係ル委任經理金ノ收支ヲ證認シ廢品賣却ヲ許可ス但軍隊ニ在テハ閱檢前總督ノ承認ヲ經ルモノトス。

第九條 監督部長ハ戰時ニ在テハ野戰監督部勤務令ノ主旨ニ基キ軍監督部長ノ義務權限ヲ有ス。

第十條 監督部長ハ駐紮師團監督部長ニ對シテ職務上ノ上官トス。

第十一條 課長ハ課務ヲ整理シ分掌ノ事務ニ於テハ其責ニ任ス。

第十二條 部員ハ課長ノ命ヲ受ケ事務ニ服ス。

第十三條 第二條ニ掲グル職員ノ外軍吏部下士ヲ置ク。

臺灣陸軍監督部ヲ設置スルニ於テハ、臺灣駐紮師團ノ監督部組織又戰時編成ニ準ジテ分課ヲ置カズ、又二三等監督ヲ以テ部長トス。但平時ニ在テハ金櫃部糧餉部ヲ置カズ。而シテ其戰務ハ師團各軍隊ニ係ル會計經理常務ヲ指揮監視スルコトニ止メ、戰時事變ニ際シテハ野戰監督部勤務令中野戰師團監督部長ノ義務職權ヲ有ス。

### 砲兵方面條例改正案

第二條 砲兵方面ハ第一方面第二方面第三方面トス第一方面ハ本署ヲ東京ニ置キ第一第二第三師營及北海道ヲ管轄シ第二方面ハ本署ヲ大阪ニ置キ第四第五第六師營ヲ管轄シ第三方面ハ本署ヲ臺北ニ置キ臺灣及澎湖島ヲ管轄ス。

第六條 本署長ハ陸軍大臣ニ隸シ砲兵方面ノ事務ヲ總理シ管掌ノ事項ニ付テハ其責ニ任ス。

前項ノ外第一方面本署長ハ特ニ全國（臺灣及澎湖島ヲ除ク）要塞第三方面本署長ハ（臺灣總督ノ



命ヲ受ケ)臺灣及澎湖島要塞ノ新設若クハ補修ニ關スル砲兵事業ノ調査ニ任ス。

第三方面定員表

本署	區分階級	
	長	一
署員	大尉	一
	中尉	一
吏員	少尉	一
	准士官下士	一四

工兵方面條例改正案

第二條ヲ左ノ如ク改ム。

工兵方面ハ通常本署支署本廠支廠ヨリ成リ本署ハ東京及臺北ニ置ク其東京ニ置クモノヲ第一トシ第一乃至第七師團管内ノ各支署及本支廠ヲ統轄シ臺北ニ置クモノヲ第二トシ臺灣及澎湖島内ノ支署ヲ統轄ス(以下原文ノ儘)但第二方面ニ在テハ器具材料ノ保管ハ本署ニ於テ之ヲ兼ヌ。

第五條 全國ヲ管内ニ改メ左ノ一項ヲ加フ。  
 第二方面本署長ハ第一項ノ外尙臺灣及澎湖島ニ於ケル工兵ノ事業ニ關シテハ臺灣總督ノ命ヲ受ケ調査ニ任ス。

工兵第二方面定員表案

本署	區分階級	
	長	一
署員	大(中)佐	一
	乘馬	一
吏員	少佐	一
	乘馬	一
軍吏	大尉	一
	中尉	一
	少尉	一
官	相當官	一
	乘馬	二
准士官下士	並判任文官	一〇



# 臺灣總督府條例發布後民政施行上概況報告

總發第二二號

臺灣總督府條例發布後民政施行上ニ關シテハ未タ充分記述スヘキ材料無之候得共不取敢別紙概況及報告候也

明治二十八年九月二十三日

臺灣總督伯爵 樺山資紀

臺灣事務局總裁侯爵 伊藤博文

本年八月六日附陸達第七十號臺灣總督府條例ハ同月二十一日當府ニ到着セリ其後民政局主管ノ事務施設ニ關スル一般ノ概況ハ左ノ如シ。

## 民政局組織ノ變更

從來民政局ハ囊ニ當府ニ於テ定メタル臺灣總督府假條例ニ依リ、部課ヲ分チ各其事務ヲ分掌セシメタリシガ、今回條例ノ發布ニ因リ其組織上多少ノ變更ナキ能ハズ。即チ別紙甲乙號ノ如ク分課規程及文書處理手續ヲ定メ、以テ其職務ニ從事セシメタリ。又總督官房ノ如キハ從來祕書官ヲ除クノ外總テ民政局員ヲ以テ其事務ヲ取扱ハシメタリシガ、條例ノ發布ニ因リ其事務ハ舉テ之ヲ幕僚副官部ニ引續ガシメタリ。但民政ニ從事スル職員ノ任免補職ハ委任ニ因リ民政局ニ於テ之ヲ取扱フコト、ナセリ。又中央會計部(明治二十八年六月二十八日臺灣總督府會計假條例ヲ定メ囊ニ設置シタル管理部ヲ廢シテ更ニ中央會計部ヲ置キ課ヲ分チ計算糧食被服運輸等ニ關スル事務ヲ分掌セシメタリ)ハ陸軍將校並ニ民政局員合同シテ事務ヲ取扱ヒ來リシガ、是亦其事務ノ一部ヲ監督部ニ一部ヲ幕僚副官ニ移セリ。又從來民政局遞信部ニ於テ取扱ヒ來リタル郵便電信ノ事務ニシテ直接之ニ關係スル者、及其技術ニ關スル事務ハ總テ陸軍局郵便電信ノ兩部ニ移シ隨テ其職員モ概ネ之ヲ郵便電信ノ兩部ニ引續ガシメタリ。

## 民政支部ノ組織

當府ニ於テハ明治二十八年日地方官假官制ヲ定メ、臺北臺灣臺南ノ三縣ヲ置キ、澎湖島ニ島廳ヲ置キ、又縣廳ノ下ニ支廳ヲ置クコト、シ、臺灣臺南兩縣ノ如キハ單ニ其職員ヲ定メタルノミニシテ、



未ダ開廳スルニ至ラザルヲ以テ、別紙丙號ノ通り民政支部及出張所規程ヲ設ケ縣知事ヲ支部長支廳長ヲ出張所長ト稱セシメ、軍隊ノ進行ニ伴ヒ、其平定シタル地方ニ進行シ、民政支部及其出張所ヲ置クノ豫定ニテ、軍制組織已ニ開廳セシハ苗栗及鹿港ノ兩出張所ナリ。臺灣支部長苗栗出張所長及其屬員等ハ既ニ出張シテ事務ヲ執リ、雲林及埔里出張所長等ハ其ノ屬員ヲ牽ヒ不日出發ノ準備中ナリ。

然レドモ臺北縣及其所屬支廳（基隆、淡水、宜蘭、新竹）及澎湖島廳ノ如キハ既ニ開廳シテ行政事務ニ從事シ、土民皆之ヲ熟知シ頗之ヲ便ナリトシテ服從セリ。今軍政組織トナリタルノ故ヲ以テ、俄ニ之ヲ民政支部ト改稱スルトキハ土民其何ノ故タルヲ解セズ、必疑惑ヲ抱キ信用ヲ殺ギ、大ニ施政上ノ障碍ナキ能ハズ。是ヲ以テ臺北縣及其支廳其他澎湖島廳ハ依然其廳名其職名ヲ用フルコトトシ、而シテ民政支部及其職員ノ心得ヲ以テ執務スベキ旨ヲ命ジタリ。

### 民政支部事務所ノ設置

臺灣民政支部員ハ既ニ彰化ニ進ミ、同地ニ民政支部ヲ設ケ、且其附近ノ鹿港ニ民政支部出張所ヲ置キ、專ラ行政事務ヲ處理セリ。但臺灣府ハ城門ノミアリテ官廳ヲ置クヲ得ザルヲ以テ、彰化ニ民政支部ヲ設ケタリト云フ。又同港ハ他日良港トナルノ見込アルノミナラズ、特別輸出港ト爲スベキ

地ナルヲ以テ、稅關員四名ヲ派遣シ其取締及調査ニ着手中ナリ。

### 民政局吏員ノ任用

吏員ノ任命ニ就テハ曾テハ官務ニ從事セシ者ハ當時ノ官等ヨリ一級ヲ昇セ採用スルノ例規ヲ定メ、此標準ニ因リ採用シ來リタリ。而カモ其前職ナキ者ニ在テハ之ガ標準ナキヲ以テ、別紙丁號ノ如ク銓考委員規程ヲ定メ、其前職ナキ者ハ勿論其他局員ノ進退ニ關スル銓考ヲ爲サシメ以テ弊害ナカラシメンコトヲ期セリ。

### 砂金採取ノ取締

從來臺北縣基隆支廳部内九份山近傍ニ金鑛ヲ出シ、又基隆河沿岸ナル瑞芳、八堵等ノ各地ニ砂金ヲ產出セリ。今回ノ擾亂ニ乘ジテ土人濫リニ之ヲ採取シ不都合尠カラザルヲ以テ瑞芳ニ砂金署ヲ置キ、別紙戊己號ノ如ク砂金署章程及砂金採取規則ヲ設ケ、專ラ從來ノ慣例ニ從ヒ採取ノ許可ヲ得タル者ヨリ鑑札料トシテ一日金十五錢ヲ納メシムルコトトナシ、其職員ハ既ニ本月十一日ヲ以テ赴任セシメタリ。



## 會計事務

總督府全般ノ會計ハ中央會計部ノ所轄スル所ナリシガ總督府條例發布ノ結果ニ依リ、給與ハ副官部ヨリ供給シ、其他ノ仕拂ハ金櫃部ニ於テ所管スルコトナリシモ、民政局ハ民政施行上ニ關スル經費ノ調査及民政局所屬官衙ノ會計事務ヲ監視スルノ必要アルガ故ニ、民政局分課規程ヲ定ムルニ方リ局長部ニ經理課ヲ置キタリ。

民政施行上ノ必要ニ應ジ、各地ニ官衙ヲ設置シタルモノ縣廳、支廳、支部、出張所及稅關ノ如キアリ、已ニ官衙ヲ設置スル時ハ給與之ニ伴ハザルベカラザルヲ以テ、相當ノ會計事務官ヲ派遣シ、其中現金前渡分任官ヲ派スルノ必要アリテ、現ニ分任官ハ十二人ノ多キニ及ベリ。而シテ分任官ハ巨額ノ金員ヲ保管スルノ責任アルヲ以テ、充分ノ信用アル者タルベキハ勿論、常ニ最モ頻繁ナル事務ニ從事スルガ故ニ、相當ノ熟練アル者ナラザルベカラズ。然ルニ當初任命ノ事務官ハ僅ニ總督一廳ノ會計事務ニ應ズル程度トシタルガ故ニ、其數僅ニ十餘名ニ過ギザルニ、其中已ニ各地ニ派遣シタル前記分任官ノ數ニ充テタルモノアリ、又陸軍局監督部其他ニ陸軍々吏又ハ書記アリト雖ドモ、各定員アリテ之ヲ使用スルハ事情ノ許サザルモノアリ、到底適當ノ分任官ヲ必要トスト雖ドモ、平定迄ハ行政官ヲ増加セザル方針ナルヲ以テ、新ニ之ヲ採用スルハ他日ニ讓リ、其選任監督ニ

關シテ慎重ヲ加フルノ必要ヲ認メ、別紙庚申號ノ如キ規定ヲ設ケタリ。

然レドモ軍隊南進シ各地ノ平定スルニ從ヒ、直チニ民政支部要クハ出張所ヲ開設スルノ必要アリ。會計事務官ハ第一着ニ之ヲ附隨セシメザルベカラズ。到底全部ノ平定ヲ俟ツヲ得ス止ムナク不日若干ノ人員ヲ採用セントス。

## 淡水稅關ノ徵收稅額

囊ニ本島ハ到ル處騷擾ヲ免レザリシモ、淡水稅關ハ夙ニ（本年六月九日）事務ヲ開始シ、姑ク從前ノ稅法稅率ヲ襲用シテ關稅ヲ徵收セリ。爾來徵收セシ輸出入ノ稅額ハ、本年八月二十一日迄ニ二十七萬八千六百八十四圓八十錢トナレリ。而シテ同港輸出ノ重ナルモノハ茶、樟腦、ビス紙、硫黃及材木ニシテ、輸入ノ重ナルモノハ鴉片、金巾類、米、絹織物及豆類ナリトス。

## 保良局ノ設立

是ヨリ先キ臺北縣廳ノ直轄及其支廳ノ分轄ニ屬スル地方ハ既ニ鎮靜ニ歸セシモ、創草ノ際未ダ土民ノ人情習慣等ヲ知悉スルノ暇ナク、施政上頗ル不便ヲ感ゼシモ、幸ニ市民中ノ紳商等保良局ナルモノヲ設ケ、官民ノ間ニ在リテ上意下達上疏以テ良民ヲ保護スルノ趣旨ニ因リ、本年八月八日



ヲ以テ臺北稻埕ニ其總局ヲ設置セリ。爾來艋舺街其他各地ニ分局ヲ設置シ、又ハ設置セントシ民政局ヨリ時ニ吏員ヲ總局又ハ分局ニ派出シテ民情ヲ諮問セシムル等官民頗ル其便ニ賴レリ。

### 自費渡航ノ許可

又是レヨリ先キ臺北城内ニハ軍隊吏員ヲ始メ其他多數ノ内地人滞在シ、爲メニ物品ノ供給ハ自然需要ト伴ハズシテ上下大ニ不自由ヲ感ゼシニ、當地滞在ノ内地商人ニシテ貨物輸入ノ爲メ自費渡航ノ出願アリ、乃チ別紙千號ノ如ク自費渡航者心得ヲ規定シテ之ヲ許可スルコトトナセシモ、今回本島へ航行ノ商船商賈ノ取締ハ、當分ノ内占領地航行商船商賈取締規則ニ準據シ大本營ニ於テ取締ルコト、ナリシニ因リ、從前當府ニ於テ許可シタル特許及自費航渡者心得ハ總テ自然消滅ニ歸セシメタリ。

### 民政局ノ沿革調査

民政局設置以來ノ沿革ハ今日ニ於テ取調ブルニアラザレバ創草ノ際事實湮沒ノ虞アルヲ以テ、今回之ガ取調委員ヲ定メ執務ノ傍之ガ取調ニ從事セシメタリ。

(甲號)

### 民政局分課規程

- 第一條 民政局ニ局長部及內務部、殖産部、財務部、學務部ヲ置ク
- 第二條 局長部ニ人事、文書、外事、民刑、經理ノ五課ヲ置キ左ノ事務ヲ分掌セシム
- 一、人事課ハ職員ノ進退身分及局長官印及局印ノ管守ニ關スル事項
  - 二、文書課ハ公文書及成案文書ノ接受發送保存及統計報告ノ調整並圖書管理ニ關スル事項
  - 三、外事課ハ外國人交渉ニ關スル事項
  - 四、民刑課ハ民事刑事ニ關スル事項
  - 五、經理課ハ民政ニ要スル經費ノ調査ニ關スル事項
- 第三條 內務部ニ庶務、遞信、警保、土木ノ四課ヲ置キ左ノ事務ヲ分掌セシム
- 一、庶務課ハ行政戶籍地理、其他各課ニ屬セサル事項
  - 二、遞信課ハ遞信ニ關スル事項
  - 三、警保課ハ警察監獄ニ關スル事項
  - 四、土木課ハ道路橋梁其他土木ニ關スル事項



第四條 殖産部ニ農務、商工ノ二課ヲ置キ左ノ事務ヲ分掌セシム

一、農務課ハ農業林野水産ニ關スル事項

二、商工課ハ商工鑛業ニ關スル事項

第五條 財務部ニ租稅關稅ノ二課ヲ置キ左ノ事務ヲ分掌セシム

一、租稅（海關稅ヲ除ク）ノ賦課徵收調査ニ關スル事項

二、海關稅ニ關スル事項

第六條 學務部ハ教育ニ關スル事項ヲ掌ル

第七條 各部及各課ニ部長及ヒ課長ヲ置キ分掌ノ事務ニ關シ局長又ハ其所管部長ニ對シ其責任ニ任セシム

シム

第八條 局長部ニ參事官ヲ置キ局長ノ命ヲ受ケ文書ヲ調査シ又ハ各部課ニ分屬シテ事務ヲ擔任セシム

ム

(乙號)

### 民政局文書處理手續

第一條 本局一切ノ來書ハ凡テ文書課長之ヲ査閱シ其主管ノ部課ヲ指定シ局長ノ指揮ヲ得テ各部長

若クハ各課長ニ配付スベシ

第二條 各部課ノ成案ニシテ局長ノ提出スルモノハ局員ノ身分進退ニ關スルモノノ外凡テ文書課長ヲ經由スヘシ

第三條 局長ニ提出シタル成案ニシテ總督若クハ參謀長局長ノ決裁ヲ經タルモノノ内幕僚副官部ニ於テ發送ノ手續ヲ爲ササルモノハ局員ノ身分進退ニ關スルモノノ外凡テ文書課ニ於テ發送ノ手續ヲ爲スヘシ

第四條 來信ト發信トヲ問ハス文書課ヲ經由スル文書ハ受付簿ニ文書ノ要領及年月日番號等ヲ登記シ其文書ヲ交付若クハ配付シタルトキハ受領ノ捺印ヲ求ムヘシ  
受付簿ノ番號ハ原稿及淨書ニ記入シテ他日ノ搜索ニ便スヘシ

第五條 發信ハ淨書ノ後必之ヲ校正シ總督若クハ參謀長局長ノ捺印ヲ要スルモノニハ各々其當該官吏ニ就キ捺印ヲ請ヒ各部長ノ名若クハ部課名ヲ以テ發スルモノハ其部課ニ就キ捺印ヲ求メ發送ノ手續ヲナシ其原稿ニハ發送濟ノ印ヲ捺シ記錄掛ニ付スヘシ文書ノ性質ニ依リ處分決了迄原稿ヲ主任ニ於テ保管スル必要アルモノハ豫シタ文書課長ニ協議シ本條ニ依ラサルコトヲ得

第六條 第一條第二條ノ文書ニシテ他ノ局部ノ立案ニ係リ本局會議ニ止マルモノハ局長ニ提出シ局長檢印濟ノ後他ニ送付スルトキハ別ニ書留簿ニ其全文若ハ要領ヲ筆記シ置クヲ要ス



本文書類中發送前其決裁ノ顛末ヲ知ルコトヲ必要トスルモノアルトキハ再回ヲ要スル旨ヲ附箋シテ他ニ送付スヘシ

第七條 各部課ニ於テ他ノ來信ニ對シ回答ノ處分ヲ稽緩スルモノアル時ハ文書課長ハ局長ノ指揮ヲ得テ各部課長ニ對シ處分ノ督促ヲ求ムルコトヲ得

第八條 本局發送ノ文書ニ對スル回答書到達シタル時ハ文書課長ハ其發信ノ原稿ト共ニ各部長若ハ各課長ニ配付スベシ

第九條 記錄編纂ノ手續ハ別ニ定ムル所ニ依ル

(丙號)

### 民政支部及出張所規程

第一條 臺灣及臺南ニ民政支部ヲ置キ支部ノ管轄内須要ノ地ニ民政支部出張所ヲ置ク

支部ノ管轄區域竝ニ出張所位置及管轄區域ハ別ニ之ヲ定ム

第二條 支部ニハ部長出張所ニハ所長各一名ヲ置ク

第三條 部長ハ局長ノ指揮ヲ受ケ所長ハ局長又ハ支部長ノ指揮ヲ受ケ其管轄内ノ行政事務ヲ管理シ其責ニ任セシム

第四條 部長及所長ハ所屬吏員ヲ監督シ其功過ハ部長ハ局長、所長ハ部長ヲ經テ局長ニ具申スヘキモノトス

第五條 部長及所長事故アルトキハ其首席ノ吏員ヲシテ其職務ヲ代理セシムルコトヲ得其處分若クハ命令ノ成規ニ違ヒ又ハ權限外ニ涉リタルトキハ部長若クハ所長ヲシテ其責ニ任セシム

第六條 部長ハ支部ニ課所長ハ出張所ニ掛ヲ設ケ行政事務ヲ分掌セシメ課長若クハ掛長ヲシテ其責ニ任セシム

部長及所長ハ處務細則ヲ設クルコトヲ得但所長ハ部長ヲ經テ部長ハ直ニ之ヲ局長ニ報告スヘシ其課長若クハ掛長ノ定メタル場合亦同シ

(丁號)

### 民政局銓考委員規程

第一條 民政局ニ銓考委員ヲ置キ局員ノ進退ニ關シ局長ニ對シ銓考ノ責ニ任セシム

第二條 人事課長ニ於テ局員進退ノ議案ヲ起草シタルトキハ先ツ銓考委員ニ回付シ其意見ヲ求メタル後局長ニ提出スヘシ

内地ヨリ召喚新任スルモノニ就テハ召喚狀ヲ發スル前ニ前二項ノ手續ヲ行フコトヲ要ス



- 第三條 銓考委員ノ意見ハ多數ヲ以テ決ス可否同數ナルトキハ可否ノ兩意見ヲ提出ス  
少數ノ意見ト雖トモ提出者ニ於テ局長ノ參考ニ供スル爲局長ニ陳述シ若クハ附箋スルヲ妨ケス
- 第四條 緊急ノ必要ニヨリ第二條ノ手續ヲ履行スルニ違ナカリシモノハ決行ノ後人事課長ヨリ其理由ヲ付シ銓考委員ニ回付スヘシ
- 銓考委員ニ於テ意見アルトキハ前條ニ同シク提出シ將來ノ參考ニ供ス
- 第五條 局員ノ進退中一時ノ出張又ハ定規ノ結果ニ依リ叙位勸勵ヲ上奏スルノ類ハ銓考委員ニ回付スルノ限ニアラス

(戊號)

### 砂金署章程

- 第一條 砂金署ハ基隆支廳長ノ管理ニ屬シ砂金採取ニ關スル事務ヲ掌ル
- 第二條 砂金署ニ署長一人署員若干人ヲ置ク  
署長ハ署務ヲ掌理シ其責ニ任ス  
署員ハ署長ノ指揮ヲ受ケ庶務ニ從事ス分擔ノ事務ニ付テハ其責ニ任ス
- 第三條 砂金署ニ庶務掛、鑑札掛、簿記掛、徵收掛、監督掛ヲ置ク、庶務掛ハ公文ノ往復會計及他

掛ノ主掌ニ屬セサル事務ヲ掌ル

鑑札掛ハ採取ノ許否及鑑札ニ關スル事務ヲ掌ル

簿記掛ハ鑑札料ノ簿記ニ關スル事務ヲ掌ル

徵收掛ハ鑑札料ノ徵收ニ關スル事務ヲ掌ル

監督掛ハ採取ノ監督ニ關スル事務ヲ掌ル

第四條 署長ハ署中ノ處務細則ヲ設クルコトヲ得

第五條 署長ハ毎月十日二十日三十日ノ三回前期日分ノ鑑札料ニ精算書ヲ添へ基隆支廳長ニ送付シ

支廳長ハ直ニ總督府金庫ニ轉送スヘシ

第六條 署長ハ基隆支廳長ヲ經テ毎月十五日マテニ前月分ノ事業ノ景況及事務ノ成績ヲ民政局長ニ報告スヘシ

第七條 砂金採取規則第十一條ニ依リ砂金採取ノ禁止セントスルトキハ假ニ停止ヲ命シ事情ヲ具シテ基隆支廳長ヲ經民政局長ノ指揮ヲ請フヘシ但シ至急ノ場合ニ於テハ直ニ民政局長ニ具申シ同時ニ基隆支廳長ニ通報スヘシ



(己號)

### 砂金採取規則

- 第一條 砂金ノ採取ハ從來ノ採取地區ニ限リ此規則ニ依リ許可ス
- 第二條 砂金採取者ハ採取ノ地名及區域ヲ定メ砂金署ニ出願シ鑑札ノ下附ヲ請フヘシ  
採取地ヲ變更セントスルトキハ砂金署ノ許可ヲ請フヘシ
- 第三條 砂金採收ノ許可ヲ得タル者ハ鑑札料トシテ一日ニ付十五錢ヲ納ムヘシ
- 第四條 鑑札料ハ一六ノ日前期日分ヲ砂金署ニ納メ領收證ヲ受クヘシ
- 第五條 降雨ノ日ハ午前十時マテニ鑑札ヲ返納スルトキハ當日ノ鑑札料ヲ免ス
- 第六條 砂金採取ノ業ヲ中止シ若クハ廢止スルトキハ鑑札ヲ返納スヘシ鑑札ヲ返納セサレハ何等ノ場合ヲ問ハス鑑札料ヲ徵收スヘシ
- 第七條 鑑札ハ他人ニ貸付スルヲ許サス
- 第八條 鑑札ヲ紛失シタルトキハ直ニ砂金署ニ届出ヘシ
- 第九條 砂金採取者ハ適宜總代ヲ設ケ其業務ヲ代辦セシムルコトヲ得  
前項ノ場合ニ於テハ地方ノ有力家ニ保證人トシ雙方連署ヲ以テ豫メ砂金署ニ届出ヘシ

- 第十條 砂金ヲ採取スルトキハ必ス鑑札ヲ携帯スヘシ之ニ違フ者ハ十五圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第十一條 砂金採取ノ方法他人ノ採取ニ妨害ヲ加ヘ若クハ鑛利ヲ損害シ若クハ公益ノ害アルト認ムルトキ又ハ定期ニ鑑札料ヲ納メサルトキ若クハ五日以内ニ罰金ヲ納メサルトキハ其採取ヲ停止シ又ハ禁止スルコトアルヘシ

(庚號)

### 民政局所屬官衙會計事務規程

- 第一條 此規程ノ民政局所屬官衙トハ民政局長ノ監督ニ屬スル縣廳、同支廳、民政支部、同出張所、稅關其他特ニ現金前渡分任官ヲ置ク官衙ヲ總稱ス
- 第二條 所屬官衙ニ會計課ヲ置キ當該官衙ノ金錢物品ノ出納糧食建築運搬其他會計ニ關スル事務ヲ掌ル

第三條 會計課ニ左ノ職員ヲ置ク

課長

課長ハ現金前渡分任官ヲ以テ之ニ充ツ但所屬官衙ノ長又ハ他ノ官等官ヲ以テ會計課長ニ充ツルトキハ別ニ現金前渡分任官ヲ置クコトヲ得



課員

課員ハ課長ノ官等身分以下ノ者ヲ以テ之ニ充ツ

第四條 課長ハ其所屬官衙ノ長ノ指揮監督ニ屬シ課務ヲ整理シ管掌ノ事務ニ就テハ其責ニ任ス

會計課長ハ會計上ノ法律規則ニ就キ所屬官衙ノ長ト見解ヲ異ニスルトキハ直ニ民政局長ノ指揮ヲ求ムルコトヲ得

第五條 民政局經理課長ニ於テ所屬官衙ノ會計整理上ノ必要ニ依リ會計課長ニ推問スルコトアルトキハ直チニ之ニ應スヘキモノトス

第六條 民政局長ハ經理課長又ハ其他ノ責任アル官吏ニ命シテ金櫃物件及帳簿ヲ檢查セシムルコトアルヘシ

經理課長又ハ其他ノ責任アル官吏ニ於テ檢查ノ結果ニ依リ違法ノ事實ヲ發見シタルトキハ事實重大ナルモノハ直チニ民政局長ノ指揮ヲ求ムヘク其他ハ詳細報告スヘシ

第七條 會計課長ハ毎月一回以上事務ノ成績及其他ニ於ケル給與上ノ便否得失ヲ民政局長ニ詳細申報スヘシ

第八條 所屬官衙ノ長又ハ會計課長ノ意見ニ依リ便宜會計課中ヲ分課シテ其主任ヲ定ムヲ得ルト雖トモ其主任ハ會計課長ノ指揮下ニ屬スルモノトス

第九條 民政局長及民政局經理課長ハ此規則施行ノ責任ニ陸軍戰時給與規則臨時費支出及整理規程其他ノ法律規則ノ範圍内ニ於テ細則若ハ手續ヲ定ムルコトヲ得

所屬官衙ノ長ハ會計上常ニ民政局長及經理課長ト協同シ事務ノ進捗ヲ圖ルト同時ニ會計法規ヲ確實ニ履行セシムルコトヲ勉ムヘキモノトス

第十條 會計課長ハ現金前渡分任官ノ資格ヲ以テ職務上必要アルトキハ直チニ陸軍局監督部長又ハ金櫃部長ニ稟議スルヲ得ルト雖トモ其文書ハ凡テ民政局經理課長ヲ通過スルヲ要ス。

附 則

第十一條 會計課ヲ置カス會計掛ヲ置クトキハ此規程ニ於テ會計課長ノ職務ニ屬スルモノハ凡テ會計掛長ニ屬スルモノトス

(辛號)

現金前渡分任官任命手續

第一條 各支部及其他ノ所屬官衙ニ於テ臨時費支出及整理規程第十一條ニ依リ分任官ヲ置ク必要アルトキハ分任官タルヘキ者ノ官氏名ヲ具シテ其氏名ヲ民政局長ニ申請スル事

已ニ定メタル分任官ヲ變更スルトキ亦同シ



第二條 民政局長ハ前條ニ依リ之ヲ指命シタルトキハ之ヲ監督スル官吏(即チ支部長若クハ其他ノ官衙ノ長)ハ直チニ該分任官カ現金出納上ニ用フル印鑑三葉ヲ民政局長ニ差出サシムル事

第三條 民政局長ニ於テ前條ノ印鑑ヲ受取タルトキハ臨時費支出及整理規程第十二條ニ依リ其分任官ヲ監督スル官吏氏名、分任官ノ官氏名、就職ノ月日ニ該分任官ノ印鑑一通ヲ添付シ陸軍大臣ニ届ケ出ツルト同時ニ右ノ事項ヲ監督部ニモ移牒シ且印鑑一通ヲ送付スル事。

(参照)

### 臨時費支出及整理規程拔萃

第十一條 分任現金前渡官吏ノ取扱金額ヲ分割シ又其分割シタル金額ヲ尙ホ分割シテ取扱ハシムルモノヲ分任官トス

第十二條 分任現金前渡官吏及ヒ前條分割セル現金ノ取扱ヲ爲サシムル者ノ官氏名ハ順序ヲ經テ陸軍省ニ届ケ出ツヘシ分任收入官吏モ亦同シ

(壬號)

### 自費渡航者心得

自費渡航者心得

第一條 當府ノ許可ヲ得テ渡航スル者ハ左ノ事項ヲ詳記シタル書面ニ指令書ノ寫ヲ添ヘ其着港地管轄ノ地方官廳ヘ差出シ其指揮ヲ受ケ陸揚スヘキモノトス

- 一、船籍及船名
- 二、船主ノ氏名
- 三、噸數
- 四、乗込人員並氏名
- 五、上陸スヘキ者ノ族籍身分職業姓名
- 六、積荷ノ種類及數量
- 七、陸揚貨物ノ數量並ニ種類
- 八、陸揚貨物ヲ積ミ入ルヘキ倉庫又ハ貯藏場ノ位置
- 九、陸揚貨物營業ノ場所

第二條 自費渡航者ハ貨物其他積卸ニ要スル艀船又ハ汽船ノ便乘等ハ官署ニ對シ請求スルコトヲ得ス但官廳ニ於テ必要アリテ特ニ搭載又ハ陸揚ヲ命シタル場合ハ此限リニ非ス

第三條 貨物其他ノ陸揚ハ其管轄地方官廳ノ指示シタル場所ノ外陸揚スルコトヲ許サス

第四條 官廳ヨリ船内及積荷其他ノ検査ヲ要求スルトキハ何時タリトモ之ヲ拒ムヲ得ス



憲兵警察官ヨリ指令書ノ開示ヲ要求シタル場合亦前項ニ同シ

第五條 自費渡航者内地へ歸航セントスルトキハ其乗組人ノ氏名積荷ノ數量、種類、其歸着スヘキ豫定ノ日時場所等ヲ詳記シ第一條ニヨリ届出ツヘシ

第六條 自費渡航者ハ其船舶ニ搭載シ來リタル貨物ヲ販賣スル爲メ要スル人員ヲ除クノ外他人ヲ上陸セシムルコトヲ許サス

但船員ニ限り其着港セシ附近ノ地へ一時上陸スルハ妨ケナシ

第七條 公益ヲ害シ又ハ風俗ヲ亂シ若クハ危險ノ虞アリト認ムヘキ人物並貨物ニ對シテハ特ニ其上陸ヲ禁スルコトアルヘキハ勿論場合ニ依リテハ渡航許可ヲ取消スコトアルヘシ

### 臺灣總督府民政事務報告

本年八月臺灣總督府條例發布後ニ係ル民政事務施行ノ概況等ハ曩ニ及報告置候處去ル九月中ニ施行シタル民政事務ノ概況等別冊及報告候也

明治二十八年十月二十二日

臺灣總督伯爵 樺山資紀

臺灣事務局總裁侯爵 伊藤博文殿

追テ曩ニ提出セシ報告書ヲ第一號トシ本報告書ヲ第二號トシ今後提出スヘキ報告書ハ逐次番號ヲ記シ可申候此段追申候也

報告第二號

### 事務施行ノ概況

民政局事務ノ施行ハ曩キニ報告セシ如ク民政局分課規程及文書處理手續等ヲ定メ、各吏員ヲシテ



其責任ノ分界ヲ明カナラシメ、而シテ曩ニ報告セシ砂金署章程ニ依リ設置シタル砂金署ハ九月十五日ヲ以テ事務ヲ開始シ、別紙甲號官租徵收取扱心得及官租徵收並罰則ヲ規定シテ官租ヲ徵收セシムルコトトシ、別紙乙號鑛業規則（金ヲ除ク）ヲ規定シテ鑛業人ノ取締ヲ爲サシメ、別紙丙號民政局記録規則及丁號記録分類規則ヲ規定シテ公文書ノ整理並ニ保管ヲ爲サシメタリ。又軍隊ノ進行ニ伴ヒ其平定シタル地ニ設置シタル民政支部及其出張所即チ臺灣支部及苗栗鹿港兩出張所ノ如キハ、開廳後銳意清潔法施行戸口調査其他諸般ノ事務ニ從事シテ着々其歩ヲ進メ、臺北縣ニ於テ九月十日ヲ期シ、同縣管下ノ臺民ヨリ提出セシメタル地基契据（地券及家屋賣買契約證）ノ調査ハ九月下旬ニ至リ粗其緒ニ就キ、又同縣管下大嵙崁ニ同縣ノ出張事務所ヲ設置シテ既ニ事務ヲ開始シタリ。

### 生蕃人ノ來府

民政局殖産部長心得橋口文藏臺北縣知事心得田中綱常ハ九月二日各其僚屬數名ヲ率ヒテ臺北縣管下大嵙崁ニ到リ、同七日ヲ以テ蕃界ナル草嶺山下ニ於テ生蕃人男女十九名ト會見シ、其十名ヲ伴フテ大嵙崁ニ互リ、又其五名ヲ伴フテ同九日臺北ニ歸レリ。蓋シ生蕃人ノ性タル極メテ蒙昧愚魯ナリト雖ドモ、亦正直固信ノ風ヲ存ス。之ヲシテ一タビ惡感情ヲ懷カシメンカ、他日之ヲ挽回スルノ途ナク、夫ノ二百年來支那人ヲ仇敵視シテ常ニ反抗ヲ試ミルガ如キハ好例證ト謂フベシ。故ニ之ヲ

綏撫馴服セシムルハ實ニ本島拓殖上緊要ノ事ナリトス。乃チ總督府内ニ宿泊セシメ酒食ヲ供シ衣物ヲ給シテ其遠來ノ勞ヲ慰メタルニ、彼等ハ眞ニ歡天喜地ノ衷情ヲ表シ、宿舍ニ三泊シテ同十二日歸社ノ途ニ上レリ。其出發ニ際シテ憲兵ヲシテ蕃界マデ之ヲ護送セシメタリ。又其草嶺山下會見ノ始末ハ別紙戊號臺北縣知事心得ノ會見報告ニ詳カナレバ茲ニ之ヲ略ス。

### 保良局ノ概況

上意下達下情上疏以テ良民ヲ保護スルノ趣旨ニ因リ、臺北民中ノ紳商等本年八月八日ヲ以テ保良總局ナルモノヲ設置シ、爾來各地ニ其分局ヲ設立シタル次第ハ曩ニ報告シタリ。其後分局ノ設置二十餘個所ニ達シ、臺灣支部管下鹿港ノ如キ亦已ニ之カ設置ヲ見ルニ至レリ（別紙己號報告書參看）今總局設置以來ノ景況ヲ觀ルニ、人民綏撫ノ上ニ就キ頗ル好成績ヲ得テ官民大ニ其便ニ賴リ、加フルニ惡漢匪徒ノ探捕上亦力ヲ盡スモノ尠カラズ。依テ九月二十五日民政局長ヲシテ別紙庚號書面ノ通金圓ヲ賜與シテ之ヲ賞勵セシメタリ。猶南部ノ平定スルニ隨ヒ南部各地ニ其分局ヲ増設セバ、戰後ノ人民綏撫上裨益スル所亦實ニ尠カラザルベシ。



(甲號)

## 官租收納取扱心得

(明治廿八年九月廿八日訓第七……)

第一條 官租トハ從前清國政府ニ於テ收納セル抄封田、學田、官莊田、隆息田、息莊田、義渡田等ノ大租若クハ小租ヲ云フ。

但學田義渡田ノ分ハ官租收納ノ際收納セシムルト雖トモ之ヲ收入ニ立テス地方廳ニ於テ保管シ總督府ニ其金額、穀數小租戸佃戸ノ姓名等ヲ報告スヘシ。

第二條 大租ノ納入ハ其田ノ小租戸トシ小租ノ納入ハ其田ノ佃戸トス。但本年ハ適宜舊慣ニ依ルコトヲ得。

第三條 收納着手ニ先チ豫メ告示ヲ發シ官租ノ納期日及從來ノ慣例ニテ前期後期ノ別アルモノハ先ツ前期ノミヲ收納スルコト竝ニ納入ヲシテ納入ノ時ハ前年ノ領收證書ヲ添付セシムルコトヲ達スヘシ。

第四條 從前石代ノ定價ニ準シテ收納セシモノハ定價ノ割ヲ以テ市價ニ準シテ收納セシモノハ市價

ノ割ヲ以テ收納セシムベシ。

但市價ハ前年ノ例ニ據ル。

第五條 收納スヘキ貨幣ハ凡テ日本銀貨又ハ兌換銀券ヲ以テ納付セシムヘシ。

但シ厘以下ノ端數ハ四捨五入ノ算法ニ據ル。

第六條 本地通用ノ小錢ヲ以テ拂込ムモノアルトキハ十錢以上ハ之ヲ拒ムコトヲ得。

第七條 納期日ヲ過キテ官租ヲ納メタル者ハ納額ノ外別ニ滯納過怠金トシテ納額ノ二割ヲ納付セシムヘシ。

第八條 納期日ヲ過キテ完納セサルモノアルトキハ督促令狀ヲ發スヘシ督促令狀ヲ發シタル日ヨリ十日以内ニ尙官租ヲ完納セサルトキハ滯納者ノ財産ニ就キ納額及滯納過怠金五割ニ當ル分ヲ見積リ沒收シ評價ヲ以テ之ヲ賣却スヘシ。

但賣却代金納額及滯納過怠金ニ充テ殘餘アルトキハ滯納者ヘ還付ス。

第九條 前條ノ場合ニ際シ滯納者ニ於テ納額及滯納過怠金五割ヲ完納シタルトキハ直ニ財産ノ沒收ヲ解クヘシ。

第十條 親戚隣佑質取主及其他第三者ヨリ代納アルトキモ亦前條ノ例ニ依ル。

第十一條 官租納入ノ義務アル者故意ニ隱蔽シテ脱免ヲ謀リタル者ハ其財産ノ全部ヲ沒收シ尙政府



ノ佃戸タルコトヲ禁スヘシ。

第十二條 收納掛員ハ地方廳ニ於テ之ヲ命シ便宜ノ地ニ出張所ヲ設ケ又巡回シテ收納事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得。

但巡回事務ヲ取扱フトキハ豫メ各庄ノ長ニ巡回ノ期日ヲ達シ置クヘシ。

第十三條 收納掛員中ニ收入主任官ヲ置キ分任收入官吏ノ事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得。

第十四條 收入主任官ニ於テ官租ノ納付ヲ受ケタルトキハ官租臺帳及納人ヨリ提出セル前年ノ領收證書ヲ照ラシ其符合ヲ認メテ之ヲ領收シ別紙領收證書ヲ納人ニ交付スベシ。

但納人ヨリ收ムル所ノ金額田種又ハ穀類等ニ疑義アルトキハ假リニ之ヲ領收シ假領收證書ヲ發シ其旨ヲ納人ニ告知シ置クヘシ。

第十五條 延納滯納脱租等ノ違犯ニ係ル處分ハ分任收入官又ハ收入主任官ニ於テ即決執行スルモノトス。

第十六條 收入主任官ニ於テ前條ノ納金ヲ領收シタルトキハ可成の速ニ分任收入官吏ニ拂込ノ手續ヲ爲スヘシ。

但金櫃ヲ回送スルトキハ憲兵守備兵又ハ警察官ノ護衛ヲ請求シ相當ノ保管ヲ爲スヘシ。

第 (何) 號	二十八年 度前 (後) 期	何堡何庄小租戸 (又ハ佃戸) 姓名納
一金 何 程	抄封田又ハ何々田大租 (又ハ小租) 何石何斗何升 此代金定價 (又ハ時價) 一石一圓十七錢ノ割	
明治二十八年 月 日	領 主 主任 收 入 官	檢印

..... (主任收入官檢印) .....



第	號	二十八年度前(後)期	何堡何庄小租戶(又ハ佃戶)姓名納
---	---	------------	------------------

一金	何	程	(主任收入官檢印)
----	---	---	-----------

抄封田又ハ何々田大租(又ハ小租)何石何斗何升何々  
此代金定價又ハ時價一石金一圓何々ノ割

右證領收

明治二十八年 月 日

何々出張所收入主任官 氏 名 印

### 官租徵收ニ關スル諭告 (明治廿八年九月廿八日日令第十號)

本總督各地方官廳ニ命ズルニ官租徵收ノ事及其徵收ノ納期收納場所其他ノ條規ヲ告示スルコトヲ以テシタリ。依テ各官田ノ租戶佃戶等ハ該地方官廳ノ告示スル所ニ遵ヒ各其租額ニ前年ノ領收證書ヲ添ヘ、期日ニ違ハズ指定ノ場所ニ納入スベシ若シ納期ヲ過ギテ納ムルカ、又ハ督促ヲ受ケテ尙ホ完納セザルカ又ハ故意ニ隱蔽シテ脱租ヲ謀リタル者ハ左ノ罰則ニ照シ之ヲ處分スベシ。

### 罰 則

- 第一條 納期ヲ過ギテ完納シタルトキハ納額ノ二割ニ當ル滯納過怠金ヲ徵收ス。
- 第二條 督促ヲ受ケテ尙十日以内ニ完納シタルトキハ納額ノ五割ニ當ル滯納過怠金ヲ徵收ス但此場合ニ於テハ滯納者ノ財産ニ就キ納額及過怠金額ヲ見積リ其全部若クハ一部ヲ公賣シ納額及過怠金ニ充テ殘餘アルトキハ之ヲ納人ニ還付ス。
- 第三條 故意ニ隱蔽シテ脱免ヲ謀リタルトキハ其財産ノ全部ヲ沒收ス。

### 同 譯 文



臺灣總督海軍大將伯爵樺山 爲

勸功曉諭事照得本總督諭飭各地方官廳徵收各項官租並使其便宜告示納期分設課館等章程准爾各等租戶佃戶凜遵該地方官廳所告屆期各自到課館繳驗完納並同滯舊年完單毋得混雜合行出示曉諭爲此示仰爾等知悉務復踵來投徵絲毫不准蒂欠遲悞倘有逾限來完或催而完或故意隱害謀脫者一經查覺卽照左開罰款章程分別究辦姑不寬貸其各凜慎之毋違特示

罰 款

第一條 逾限來完者應罰加租二成。

第二條 遇催之後再過十日倘未完納者查出該租戶或佃戶資產案算抵租並加其五成清完如有剩餘還給。

第三條 故意隱實謀脫者全徵該租戶或佃戶資產一切充公。

(乙號)

鑛 業 規 則

日令第九號

鑛業規則左ノ通り相定ム

明治三十八年九月 日

臺灣總督伯爵 樺 山 資 紀

第一條 鑛物(金ヲ除ク)ノ採掘及之ニ附屬スル事業ハ當分ノ内從來ノ鑛業人及採掘區域ニ限リ之ヲ認可ス。

第二條 鑛業人ハ地方官定ムル所ノ期限内採掘願書ニ從來ノ採掘區域圖ヲ添ヘ地方官ニ差出スヘシ其期限經過後ノ出願ハ無効トス。

第三條 二人以上ノ鑛業人同區域内ニ於テ採掘ヲ爲ストキハ總代一名ヲ選定シ其名義ヲ以テ出願スヘシ總代ノ選定ハ各鑛業人ノ連署ヲ以テ地方官ニ届出ヘシ。



第四條 探掘ヲ出願スル者ハ手數料トシテ一人ニ付金五圓ヲ納ムヘシ。

第五條 地方官ハ從來ノ探掘區域廣キニ過クルト認メタルトキハ臺灣總督府民政局長ノ認可ヲ經テ減縮セシムルコトヲ得。

第六條 地方官探掘ノ許可ヲ與フヘキモノト認メタルトキハ鑛業許可證ヲ下付スヘシ。

第七條 許可ヲ得タル鑛物ノ探掘權ハ賣買讓與又ハ書入ヲ爲スコトヲ許サス。

第八條 鑛業人廢業シタルトキハ其旨ヲ地方官ニ届出鑛業許可證ヲ返納スヘシ。

鑛業人休業三十日ニ互ルトキハ其理由ヲ地方官ニ届出ヘシ地方官休業ノ理由ヲ不當トシ且ツ將來適當ニ事業ノ繼續スル能ハサルモノト認ムルトキハ臺灣總督府民政局長ノ認可ヲ經テ探掘ノ許可ヲ取消スコトヲ得。

第九條 詐偽又ハ錯誤ニ由リ探掘ノ許可ヲ得タルコトヲ發見シタルトキハ地方官ハ臺灣總督府民政局長ノ認可ヲ取消スヘシ。

第十條 鑛業人ハ毎月ノ製産高ヲ翌月十日マテニ地方官ニ届出ツヘシ。

第十一條 許可ヲ得スシテ探掘ヲ爲シタル者又ハ詐偽ニ由リテ許可ヲ得タル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス。

第十二條 第八條及第十條ニ違背シタル者ハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス。

第十三條 探掘ノ事業他人ノ探掘ニ妨害ヲ加ヘ若クハ鑛利ヲ損害シ若クハ公益ニ害アリト認ムルトキハ地方官ハ其探掘ヲ停止シ又ハ禁止スルコトヲ得。

(乙號)

譯文

第一條 鑛物之探掘(除黃金)暨屬探掘之業始限清國政府從來所准之鑛業人暨探掘地區允准探掘。

第二條 鑛業人遵守地方官廳所示之期日將探掘稟帳竝從來探掘境域他圖應赴廳稟請允准若過期具稟一切無准。

第三條 鑛業人二人以上欲同就一處探掘鑛物則豫先選定工頭一名以稟請允准。

其所選定工頭必須共鑛業人等連署具稟。

第四條 稟請探掘允准者每一名先徵手數料五圓。

第五條 從來之探掘地區如有失廣濶ノ虞則地方官廳隨時稟臺灣府民政局長割減其地區。

第六條 地方……官廳允准探掘則必發給允准證票。

第七條 既經允准者不准轉賣探掘鑛物之權或讓與別人或充借銀之用。

第八條 鑛業人永停廢業則應具稟地方官廳還納允准證票暫停探掘者其停業逾三十日則應赴地方官廳



具稟停業緣由地方官查明之後其緣由不理或以爲不耐繼續其業則稟臺灣總督府民政局長消廢其允准。  
第九條 據假冒或錯誤之稟請發給允准證票之後地方官查出其緣由則稟臺灣總督府民政局長消廢其允准。

第十條 鑛業人期每月初十日應赴地方官廳具稟前月內所出之量數。

第十一條 不經允准私爲探掘者竝假冒探掘者徵五圓以上五十圓以下之罰金。

第十二條 違犯第八條暨第十條者即徵五十錢以上一圓九十五錢以下之科料。

第十三條 妨害他人之業務或亂開坑服荒廢鑛地或有碍公益者地方官一經查出則使其停業或日不准探掘。

(丙號)

### 臺灣總督府民政局記錄規則

(明治二十八年九月三日民政局長決議)

第一條 民政局ノ記錄文書ハ凡テ文書課記錄掛ニ於テ之ヲ管理ス

第二條 記錄掛ハ文書ヲ適當ニ檢別編次シテ之ヲ保管シ兼テ參考上必要ナル法令ヲ編纂シテ事務ニ便スルノ責任ヲ有ス

第三條 記錄掛ニ於テ文書ノ引繼ヲ受ケタルトキハ之ヲ受書簿ニ登錄シ各文書ニ就キ左ノ事項ヲ檢別スヘシ

一、保存若クハ廢棄

二、分類別

三、關係文書ノ完否

四、他ノ關係文書ニ對スル訂正追加ノ要否

第四條 保存文書ニハ更ニ其文書ノ番號及件名ヲ類別目錄ニ登錄スヘシ



- 第五條 記錄掛ニ於テ文書ヲ檢別シ他ノ關係文書ニ訂正追加スルノ必要アルモノハ各其文書ニ變更シタル字句及變更年月日ヲ記載シ置クヘシ
- 第六條 文書ノ各部又ハ各類交互聯繫スルモノハ一方ニ原本ヲ收メ一方ニハ摘要書ヲ收ムヘシ但其類別目錄ヲ記載スルトキハ摘要書ヲ收メタルモノニハ朱記ヲ例トス
- 第七條 文書ハ其類別ニ依リ書函ノ類別ニ收藏スヘシ
- 第八條 文書中民政局長ノ命令又ハ各部長ノ命令ニ依リ特ニ貴重スヘキモノ又ハ祕密ニ付スヘキモノハ之ヲ特別ノ書函ニ收藏シ文書課長又ハ記錄掛長自ラ之ヲ管守スヘシ
- 第九條 書函ノ管鑰ハ之ヲ鍵箱ニ收メ記錄掛長自ラ之ヲ保管ス
- 第十條 文書ノ出納、閱覽ハ凡テ丁寧ニ取扱ヒ錯雜汚損スヘカラス
- 第十一條 文書ヲ閱覽セントスル者ハ凡テ記錄掛ニ就キ之ヲ閱覽スヘシ何人ヲ問ハス記錄掛長ノ許可ヲ受クルニ非サレハ自ラ書函ニ就キ文書ヲ搜索スルコトヲ得ス
- 第十二條 各局課員ニシテ文書ノ借覽ヲ要スル者アルトキハ之ヲ借受クルコトヲ得借受人ハ文書貸付簿ニ文書ノ類別番號及氏名ヲ登錄シ其借受文書ヲ返付シタルトキハ借受人自ラ貸付簿ニ消印スヘシ
- 第十三條 祕密文書ヲ借覽スル者ハ當該局課長ノ證明ヲ要シ又其文書ヲ他人ニ轉貸スルコトヲ得ス

(丁號)

### 臺灣總督府民政局記錄分類規則

(明治廿八年九月三日民政局長決議)

- 第一條 民政局記錄文書ハ之ヲ大別シテ二十九門トシ門ヲ分ケテ部トシ部ヲ分ケテ類トシ文書ハ凡テ各類ニ依リ編次ス其類別ハ別表定ムル所ニ依ル
- 第二條 各部中ニ總規ノ一類ヲ置キ該部全體ニ關スル規則其他重要ノ文書ヲ編次ス
- 第三條 類別表ニ適當セサル文書アリタルトキハ當分文書課長假ニ之ヲ定ムルコトヲ得
- 第四條 既廢ノ法規等ニ基ケル文書ニシテ將來ニ同種ノ公文ナシト認ムルモノ及參考摘要書ハ之ヲ類別外トシ別ニ之ヲ保管ス



### 臺北縣知事生蕃會見報告

九月四日大崙嶽附近ニテ生蕃ト會見スル爲メ、小官ハ本月二日正午當縣廳ヲ發シ、零時三十分ノ汽車ニ便乗シ、屬官二名ヲ從ヘ桃子園ニ向ケテ出發セリ。但シ殖産部長橋口文藏其屬官一兩名ト同ジ目的ヲ以テ小官ト同行セリ。午後二時桃子園ニ着シテ下車シ、二時半桃子園ヲ發シ同シ五時大崙嶽ニ到リ、當縣ノ出張所ニ入ル。由テ生蕃ト出會ノ都合ヲ議シ、通譯人ヲ招キ寄セ蕃地ノ事情及蕃人ノ嗜好スル所ヲ聞キ、準備シテ其期ヲ待テリ。然ルニ此夜ヨリ天候宜シカラズ、翌三日ヨリ暴風雨トナリ、暮連四晝夜ヲ荒シ本月六日マデ日光ヲ見ル能ハズ。此間蕃地ノ光景ヲ視セシメ生蕃ノ來會ヲ催サン爲メ通辯ヲ遣セシモ溪水暴漲シテ内山ニ入ルコト能ハズ。已ムナク此ニ五日ヲ消シ本月七日ニ至リ始メテ通辯ヲ内山ニ遣ルコトヲ得タリ。翌八日通辯未ダ歸ラザルモ思フニ天氣モ晴タレバ生蕃必ズ來ルベシト爲シ、此方ヨリモ出掛ベシト、由テ前ニ會見セシ守備隊ト計リ、午前十時一同出發セリ。守備隊長渡邊少佐ハ部下若干ヲ率ヒテ一行ヲ護衛セリ。正午前三層庄ニ着セリ。當庄ハ大崙嶽ヨリ蕃地ニ通ズル最終ノ村落ニシテ、背後ニ峻峻ナル草嶺山ヲ以テ生蕃ト境セリ。一行ハ此庄内ニ入り林本源ノ課館ト云フニ入り、此ニテ一行ノ晝食ヲ濟セ、午後二時半出テ草嶺山下溪水

ノ邊ニ到リ、遙カニ内山ヲ望テ生蕃ノ出來スルヲ待テリ。午後三時過遙カニ一族ノ人景ヲ前山ノ頂ニ認ム。是即チ蕃人ノ來リシナリ。然ルニ前山ニ歩ヲ停メ敢テ下リ來ラズ、思フニ或ハ我一行ノ多人數ニシテ行裝嚴シク、彼等ノ恐怖ヲ來セシニアラズヤト、急ニ通辯人及屬官ヲシテ出テ前山ヲ過ギテ彼等ヲ招キ迎ヘシムルヤ、少時ニシテ彼等ハ前進シテ徐々山嶺ヲ下リ、一行モ亦溪水ヲ陟テ進ミ之ヲ中路ニ迎ヘ、山嶺ノ左生園ニ會シ、雙方會見スルコトヲ得タリ。小官ハ彼等ヲシテ芝生ニ列生セシメ、人員ヲ點スルニ男九人女六人小孩四人計十九人ニシテ其人名ヲ聞クニ左ノ如シ。

- |           |         |        |                |
|-----------|---------|--------|----------------|
| カツバン山社會長  | ワタナウキ   | 同一族    | アツカアウ          |
| 同社ハオキルノ子  | タイム     | 同      | タイムマヲ          |
| 同社會長ノ一族   | ユミナサム   | 同壯丁    | マラエシラン兄弟       |
| 同社アフマ之後家  | チツシヤ    | 同後家ノ子  | ワタン            |
| 同社壯丁      | マライコンモオ | 同      | カンシユツ          |
| 同社カシシユウノ妻 | チワナブウ   | 同カワア之妻 | クルン            |
| 同         | ワシヤ     | 同      | 支那人ニテ生蕃人ト通辯スル者 |
| 同         | 同       | 同      | 妻リムキマト         |
| シヤナスシ社會長  | モトネバ兄弟  | ラスン社會長 | マタモト之妻バフカアオ    |



ラスン社會長ノ一族　シヤナア之後家　サユン

右ノ男女ハ命ニ從ヒ一列ニ芝生ニ坐セリ。由テ先ヅ葉卷煙草ヲ個々ニ與ヘテ吃煙セシメテ、小官ハ先ヅ左ノ言ヲ通譯セシメテ以テ彼等ノ意ヲ試ミタリ。

爾等ハ其婦人小兒マデモ携ヘテ遠ク山路ヲ來リ茲ニ我等ト相見ス我等ノ大ニ悦ブ所ナリ。但我等ハ爾等ト會見シ、交宜ヲ序シ且ツ訓諭スベキ緊要ノ公事アルヲ以テ、前日ヨリ大崙嶽ニ來リ今日ヲ待チ居タリ。茲ニ相會シテ爾等ノ健強ニシテ溫順ナル有様ヲ見ルコトヲ得タルハ我等一同ノ歡喜スル所ナリ。云々

茲ニ於テ酒ヲ與ヘテ吃セシム彼等ハ且ツ飲ミ且談ジテ云フ。

前日爾等大家ト會見ヲ相約シタレドモ、雨降りテ溪水漲リ期ノ如ク來ルコト能ハズ、今水勢ノ稍々減少セシヲ以テ是丈ノ人數ニテ來會セリ。別社ノモノハ大溪アリテ涉ルコト能ハズ云々。

依テ小官ハ總督府ノ告示ヲ示シ、其大意ヲ通譯セシメ且ツ左ノ言ヲ述ベタリ。

茲ニ爾等ニ告グベキ最モ緊要ノ事アリ、爾等宜シク小心シテ靜聽スベシ。當臺灣島ハ爾等ノ住フ處モ支那人ノ住フ處モ、全體共ニ我大日本ノ有ニ歸シ、我　天皇帝ノ知シ召ス處トナレリ。故ニ從前所在ノ官衙等ハ當大崙嶽モ臺北モ皆一律ニ我日本官之ヲ管理スルニ付キ、從

前ノ支那官吏ハ皆逃ゲ去リタリ。故ニ今日以後爾等ハ悉ク我等ト同ジク我大日本　皇帝陛下ノ赤子トシテ、亦我等ノ兄弟ナリ。爾今能ク我官衙ノ命ヲ聽キ以テ我大日本　皇帝陛下ニ忠義ヲ盡スベシ云々。

彼等ハ右ノ言ヲ聽キ畢テ互ニ何事ヲカ談話シタル後、首長アカアウハ徐々トシテ右ノ如ク述ベタリ。

當臺灣ノ日本ノ領分トナリシ事ハ前日已ニ之ヲ聞キ、已ニ我等ガ社及ビ近邊ノ社ニハ一般ニ之ヲ告ゲタリ。依テ各社ノ老若ハ來テ日本官ニ見ユルベキ筈ナレドモ、北方ハ支那人多クシテ何かト詐リ害セラレンコトヲ疑ヒ來見スルト云フモノ少ナカリシガ、今日大家ノ此ノ如ク多人數ニテ而カモ此ノ如ク我等ヲ悦バルル上ハ我等内山ノモノハ一圓ニ悦ビ來リテ相見ルベシ。

小官ハ又左ノ言ヲ爲セリ。

爾等大家我等ト斯ク親交シ、双心融和シテ兩々相疑フコトナク兄弟家相名乗合フタル上ハ、爾等ハ自由ニ全島ヲ往來シ其餘レルヲ與ヘ足ラザルヲ補フベシ。我等大家モ亦自由ニ内山ヲ往來シ手ヲ携ヘテ俱ニ大平ヲ樂ムベシ。

此ニ於テ彼等ハ彌々喜ンデ鯨飲セリ。時ニ屬官ノ大碗ニ酒ヲ盛り彼等ニ與フルモノアリ、酋長アカアウ碗ヲ執テ立テ屬官ヲ擁シ共ニ飲マント擬ス、屬官モ亦相擁シテ兩面相磨シ、双口ヲ碗ノ一方



ニ接ケ碗ヲ傾ケテ牛飲ス。彼等衆蕃大ニ喜ビ立テ胸ヲ打チ天ヲ指テ其誠實親交ノ情ヲ表ス等光景誠ニ宜シカリシ、斯テ談話モ畢リ日モ漸ク晩セシヲ以テ、持ラセル所ノ赤布小刀洋酒鐘詰等ヲ均一ニ分配シ、異日ノ再見ヲ誓フテ相別レヲ交セシニ、彼等ハ大ニ安心セシモノノ如ク、何カ残り惜カリシニヤ、彼等ハ一半ハ是非大料炭マデ往キ一泊センコトヲ請フ。由テ相伴フテ大料炭ニ歸ルコトトシ、婦人小兒等ト相別シ頭目五人婦女及小兒五人ト與ニ俱ニ大料炭ニ歸リシハ午後六時ナリシ。

今日已ニ會見ヲ畢リ撫安ノ意ヲ通ズルコトヲ得タルヲ以テ、明日ハ早々歸廳スルコトニ決シ、俄カニ其準備ヲ爲セリ。此夜彼等ヲ饗セントシ、一同奔走シテ酒肴ヲ整へ、舊撫墾局内ヲ借テ宴席ヲ設ケ、生蕃十人支那人五人ヲ招キ守備隊長以下五六人ト一行ノ者ヲ會シタリ。此夜彼等ハ大食大飲大ニ歡樂ヲ盡セリ。宴酣ニシテ一會歌ヒ二會和セリ。試ニ其歌意ヲ譯セシメシニ左ノ如キモノナリシ。

我等大家遠ク來リテ是等ノ大家ト相會セシニ、昨晚マデ社人ドモノ兎ヤ角言ヒシトハ異ヒ、我等大家ト同ジ心ニテ兄弟ト同ジ心ヨ相共ニ酒飲ミテ樂シキ。

是等ノ大家カ我等カ社ニ來レバ今夜ノ様ニ我等ト共ニ醇ノ熟セルヲ飲ミテ樂マン。

以上ノ光景ニテ彼等ハ最初草嶺山ニテ會見ノトキヨリモ一層親交ヲ厚クセシモノ、如クナリシヲ以テ、次手ニ臺北ニ往キ總督ニ拜觀スベキコトヲ勸メタルニ、彼等相議シテ答フルニハ、苟メニ社

ヲ出來リ直ニ歸ル積ナリシヲ、茲ニ一泊スルサヘアルニ、又臺北ニ往ケバ留守中ノコト甚心懸ナリ。此次ハ一先歸山シ、再ビ來テ臺北ニ往クベシト、由テ其何事カ心懸ナルヤト問フニ、留守ニハ老タルモノト稚キモノトノミナレバ、猪ノ來テ家ヲ荒シ芋畑ヲ掘ランコトヲ恐ルト。此ニ於テ説キ勸メテ一半ヲ歸山セシメ以テ互ニ其留守ヲ守ラセ、一半ハ臺北ニ往クベシトノコトニ決シ、此夜ハ一同ヲ當縣出張所ニ泊セシメタリ。翌日彼等ノ歸村スルモノニ牛一頭ヲ贈ラントシ夜中買入ヲ爲サシメタリ。

翌九日早朝彼等ノ歸山スル者ニ別ヲ告ゲテ赤牛一頭ヲ與へ、且ツ記念ノ爲メ左ノ如キ意味ヲ書シテ與ヘタリ。

今ヤ本島ハ我帝國ノ版圖ニ歸シ茲ニ爾等ト相見スルコトヲ得タリ爾今以後信義ヲ表スル爲メ且ツ今日ノ紀念トシテ赤牛一隻ヲ送ル

月 日

田中臺北縣知事

橋口殖産課長

カツバン山社ヲタナウキシヤナマン社モトネハ外諸子

右ノ書面ヲ通譯セシメシニ彼等ハ左ノ言ヲ述ベタリ。



ヒラ マキタ キタタ スベラタクワラ ヒメロゲルギ ヤアミヤン リギエン コレリヤ  
アナンブサ プカワス

右ノ語ヲ譯セシメタルニ左ノ如シ。

昨晚大家ト相見シタリ、大家ノ來タルヤ好シ此字ハ妻子菓實五谷ヨリモ好シ今日ヨリ後我等  
ハ此好心ヲ記シテ忘レザルベシ。

此ニ於テ今朝歸山スル一半ノ男女ニハ昨日會見セシ場所マデ兵士ヲシテ送ラシメ、其臺北ニ來ル  
ト云フモノ男女五人ヲ伴ヒ、大料炭ヲ出發セリ。歸路ハ小舟ヲ雇ヒ生蕃ト舟中ニ墾坐シ、板橋ニ至  
テ晝食シ午後四時半ニ大稻埕ニ到テ上岸ス由テ直ニ生蕃ヲ率テ貴覽ニ入レ候ヒシ。

大料炭ニ於テハ一告示ヲ出シテ生蕃ト關係スルモノハ各自ノ小兒ニ接スルガ如ク極メテ慇懃ヲ加  
ヘ懇切ニ遇スベシ云々ノ意ヲ人民ニ告ゲシメタリ。其他種々觀察上ノ項目アルモ右生蕃ニ關スル件  
ノミ及申報候也。

明治廿八年九月十二日

臺北縣知事心得 田中綱常

臺灣總督伯爵 樺山資紀殿

## 兒玉臺灣民政支部長鹿港巡視報告

一、九月廿一日午後一時彰化ヲ發シテ鹿港ニ向フ、此里程我三里有餘ニシテ到ル處一面ノ水田ナリ。  
所々竹叢アリ人家ヲ繞ラスモ、一村ヲ爲スモノ稀ナリ。道路ハ廣狹アリテ一定ナラズト雖ドモ  
多少工事ヲ施サバ馬車ヲ通ズル敢テ難キニアラザルベシ。沿道ノ水田往々龜裂シテ廣漠タル田野  
ノ荒蕪シタルアリ、其原因ヲ問ヒシニ這地一體彰化ヨリ高層ナル處アリ、水利從テ乏シ、殊ニ客  
年蠻賊等ノ用水ヲ他ニ流出セシ故水田概ネ荒蕪ノ狀況トハナレリト。然レドモ一體水利潤澤ナラ  
ザルヲ以テ、水悍棒ノ水流ニ堰ヲ築キ分水セシモ、年々出水ノ都度破壞ヲナシ、災害ヲ被ル場所  
多々アリ。故ニ技師ヲ派シテ調査セザレバ利害ヲ論ズル能ハザルモ、從來工事費用ヲ如何ニ處分  
シタルカヲ問ヒシニ皆人民ノ負擔ニ係リシト云フ。

一、十二日ハ鹿港ニテ保良局開業式ノ招待ヲ受ケテ臨席セリ。當所宿營陸軍少將川村旅團長以下ノ  
將校等集會シ創業主趣書及章程等アリタリ是則辜顯榮ノ斡旋ヨリ成ルモノナリト云フ。

鹿港一ケ年間商業上輸出入ノ總價格ヲ問ヒシニ金二百萬兩ニシテ米穀ノ輸出多キニアリト云フ。  
而シテ這地ヨリハ福州廈門ノ諸港ニ航スルヲ得ルモ、其最モ交通スルハ泉州ヲ以テ第一トセリ。



目下輸出ノ盛ナルハ曩キニ電報ヲ以テ報告シタル如キ原因ナルヤ、將タ收穫後ナルガ故カ之ヲ詳ニセズト雖トモ、獨リ臺灣地方ノ豊凶ノミニ依リテ從來ノ米價ニ關係スルコトナシ、然レドモ清國湖南地方ノ豊凶ニ關シテハ臺灣地方ノ米價ニ關係ヲ及スコト從前ヨリ普通ノ實況ナリト云フ。

一、農家小作人ニアツテハ米穀ヲ商ヒ一家ノ生計ヲ營ムモノ十中八九ナリ然ルニ之ガ輸出ヲ禁ズルニ於テハ貧民ノ之ガ影響ヲ蒙ル容易ナラズ、全體這地ハ水田勝チニシテ畑地ハ稀ナリ。從テ米穀ヲ商ヒ諸般ノ用度ニ供スルハ自然ノ道理ニ出ヅ、依テ輸出ヲ禁ズルハ即チ商買上ニ影響ヲ及ボシ、貧民ハ生活ノ途ヲ失ヒ困難ニ陥ルコト論ヲ俟タザルナリ。

一、鹿港ハ彰化縣輸出ニ於ケル中央部第一ノ港ナリ。商買繁盛豪商ノ輻湊スル所ニシテ管下諸港口ニ出店ヲナシ、商業ヲ營ムモノ最モ多シ。故ニ中央諸港ニシテ何レノ港口ヲ開設スルモ鹿港ノ商業家ニアツテハ利害ノ更ニ關係スルコトナシト主張シ居ルモ、是未ダ鐵道ノ便利海陸運輸ノ遲速等其得失影響ノ如何ニ各港口ニ及ブカノ度ヲ知ルニ到ラザル人民ガ、各縣各地ト相適宜ノ便ニ從ヒ一ニ港口ヲ開キ僅カニ交通シ來リ、未ダ全ク陸運交通ノ便ヲ開カザル今日ニ於テ、管下從來ノ港口ヲ閉塞シ、一ノ港口ヲ以テ輸出港ト指定スルニ於テハ其縣下ノ人民ニアツテハ幸福ヲ得ルモ、他ノ縣下ハ運輸ノ途ヲ閉塞セラレ、悉ク困難ニ陥ランコト敢テ疑ヲ容レザルナリ。依テ輸出港ノ如キハ從來ノ自由ニ任セ、自然鐵道布設計畫モ臺灣地方迄延長スルノ時機ニ際會セバ、縣下人民

モ亦從テ道路交通ノ便ヲ利用スルニ至ルヤ必セリ。於是乎管下中央部ニ輸出港ヲ指定セララルルニ於テハ、人民ノ利害得失大ニ其宜シキヲ得ルモノアラン。然リト雖ドモ從來ノ各港口ニシテ輸出取締等ヲ設置スルニ於テハ、其方法及人員ノ配置等甚ダ至難ナレドモ、目下ノ現狀ヨリ觀察セバ其他ニ良法アルヲ知ラズ因テ茲ニ愚見ヲ掲ゲタルノミ。

當部所轄ノ各縣下ニ於ケル輸出入港口ヲ參考ノ爲メ左ニ掲グ。

苗栗縣下 中港、後壠港、通霄港、大安港

臺灣縣下 梧栖港

彰化縣下 鹿港、王宮港

雲林縣下

嘉義縣下 布袋嘴港

一、管下商人ノ所有セル商船十七艘ニシテ、何レノ港ト雖トモ遠干瀉ニシテ、本船ハ二三哩内外ノ海濱ニ碇泊シ、貨物ノ積卸ハ悉ク竹筏ヲ用ヒテ、潮ノ干滿ニ從ヒ之ヲ運用セリ。又筏一個ニシテ水夫四人ヲ使用シ、四斗入米百俵ヲ積ミ、而シテ一俵ノ賃銀五錢ナリト云フ。即チ一回金五圓ニシテ筏ニ登載スル運般人夫ノ幾百人ナルヤ知ルベカラズト雖モ、道傍ニ立食スルモノ多キヲ以テ見レバ貧民ノ之ガ爲メ生計ヲ立ツルモノ多數ナリト觀察スルモ大過ナカルベシ。



一、鹿港市街ニ鹽釐局ナルモノアリ、官鹽貯藏ノ所ニシテ倉庫二十二ヶ所アリ、現今倉庫ニ貯藏シアルモノ十二室ナリ製鹽ハ疏製ノ儘貯藏シ、容易ニ戸口ヲ開クコト能ハズ。依テ數量ノ如キ未ダ詳カナラザレドモ、大小二十二室アリテ各室悉ク充實セバ清石ニテ四萬石餘ヲ貯藏シ得ベシトナリ。目下憲兵ヲ以テ之ニ止宿セシメ取締ヲナサシメタリ。

一、臺灣彰化ノ兩縣下ニ於テ官有財産ニ係ル物件其他取調中ニ付キ追テ何分報告スベシ。右報告候也。

明治二十八年九月十七日

臺灣民政支部長 兒玉利國

民政局長 水野 遵殿

### 保良總局へノ交付金

臺灣紳民ノ協同設立ニ屬スル保良總局ハ官民和合ノ樞機トナリ下情上達ノ關鍵トナリ大ニ民政施行及匪徒探捕ニ補益シタルモノ多シ依テ本官ハ保良總局既往ノ效果ヲ總督閣下ニ具申シタルニ總督閣下ハ將來益設局ノ旨趣ヲ貫徹センコトヲ勸諭シ併セテ金二百五十圓ヲ交付シ既往ノ功勞ヲ賞スベキコトヲ本官ニ命ゼラレタリ依テ茲ニ恭シク總督閣下ノ旨ヲ傳達ス。

明治二十八年九月

民政局長 水野 遵

譯 文

臺灣紳民所設立之保良總局者官民和洽之樞機下情上達關鍵也雖設立日淺而其所裨益於民政施行匪徒探捕寔多矣是以本官具稟該局既往之功勞於總督大憲大憲乃命本官諭示該局自今之後益貫通常初設立之主旨且賜白銀二百五十圓以賞既往之功勞茲謹致總督大憲之意。

明治二十八年九月 日

保良總局へノ交付金



民政局長 水野 遵

具僉稟臺北保良總局正主理劉廷玉副主理葉爲圭  
會辦李春生

等爲稟陳祇領申謝事竊玉等自奉

諭創設保良總局以來幾屆兩月閣屬居民望風

繼起洗心歸順者咸知共浴吾

大皇帝皇上陛下恩寵優渥澤及臺民所致地方

安謐民生樂業胥由

政府深仁厚德撫綏周到玉等職司保良方愧辨

理無狀何幸更荷

將大請

樺山總督府帥憲閣下寵錫酌金二百五十圓感

愧交集惶悚莫鳴雖欲堅辭壁謝又恐倏拂鈞意致滋疑貳因是冒昧祇領存爲將來善舉之用敬謹肅稟鳴

謝竝候

水野民政局長大人

崇安百益朗照不既

明治二十八年十月初二日

具僉稟臺北保良總局

副主理	葉	爲	圭
主理	劉	廷	玉
會辦	李	春	生

譯 文

臺北保良總局正主理劉廷玉、副主理葉爲圭、會辦李春生等謹テ受領陳謝仕候玉等貴諭ヲ奉シ保良局ヲ創設セシ以來殆ント二ヶ月ヲ經過仕候處所屬人民ノ風ヲ望テ興起シ洗心歸順セシ者ハ咸ク優渥ナル我

大皇帝皇上陛下ノ恩寵ニ浴シ德沃臺民ニ及フヲ知リ地方安謐民生業ヲ樂ミ居候是皆政府ノ至仁厚德撫綏周到ナルニ由レリ玉等保良ヲ職司トシテ辨理狀ナク方ニ慙愧仕居候然ルニ何ノ倖力更ニ樺山總督府帥憲閣下ニ大請セラレ酬報金二百五十圓ヲ寵賜セラレ感愧交集リ恐懼罷在候固辭可存仕

保良總局ノ交付金



候得共盛意ニ悖リ疑惑ヲ滋サンコトヲ恐レ謹テ領收シ將來善事舉行ノ用ニ充テ可申候茲ニ鳴謝ノ意ヲ表シ茲ニ水野民政局長憲臺大人ノ崇安百益ヲ希ヒ候

不既

明治二十八年十月初二日

臺北保良局

正主理	劉	廷	玉
副主理	葉	爲	圭
會辨	李	春	生

保良局ノ設アリテヨリ日尙淺シト雖トモ縣下各庄ニ分局ヲ請開セシムルコト已ニ二十有六ニ至リ皆其地豪名族ヲ舉ケ之カ長タラサルナシ亂雜ノ際此舉アリ良民ハ喜ヒ匪類ハ恐ル功跡未タ著ナラスト雖モ能ク彼我ノ間ニ立テ下ニ臨ンテハ皇恩ノアル所ヲ論シ上ニ對シテハ民情ノ存スル所ヲ訴フ殊ニ當部ニ對シテハ匪徒ノ探報捕獲ニ便益ヲ計リシコト事實數回ニ及ヒ功績誠ニ不少右ノ事實ニ付不敢右賞トシテ金若干圓下賜相成度候也

明治二十八年九月二十二日

總督府陸軍局

憲兵部長 萩原貞固

民政局長 水野 遵殿



## 拓殖務省官制及拓殖務會議規則 草按

### 拓殖務省官制

- 第一條 拓殖務大臣ハ左ノ事項ヲ掌ル。
- 一、臺灣ニ關スル文武諸般ノ事務但軍機軍略ニ關スルモノハ之ヲ除ク。
- 一、北海道及沖繩縣ニ關スル事務但特ニ各省大臣ノ主管ニ屬スルモノハ之ヲ除ク。
- 第二條 拓殖務大臣ハ臺灣總督府北海道廳長官及沖繩縣知事ヲ監督ス。
- 第三條 拓殖務省專任參事務官ハ 人專任書記官ハ 人ヲ以テ定員トス。
- 第四條 拓殖務省ニ局ヲ置カス拓殖務大臣ニ於テ便宜分課ヲ設ケ書記官若クハ參事官ヲシテ之カ課長タラシム。
- 第五條 拓殖務省屬ハ 人ヲ以テ定員トス。
- 附 則

第六條 北海道廳官制第六條中內務大臣ノ指揮監督トアルハ本令ノ結果ニ依リ拓殖務大臣ノ指揮監督ニ變ズルモノトス。

地方官官制第六條ノ規定モ亦沖繩縣ニ付テ前項ノ例ニ依ル。

第七條 本令ニ規定スルモノ、外總テ各省官制通則ニ依ル。

第八條 本令ハ明治 年 月 日ヨリ施行ス。

### 拓殖務會議規則

- 第一條 拓殖務省ニ屬スル事務ニ付法律勅令ノ制定、廢止及改正ヲ要スルコトアルトキ又ハ其ノ他拓殖務大臣ニ於テ重要ノ事項ト認メタルトキ之ヲ諮問スル爲メ拓殖務會議ヲ設ク。
- 第二條 拓殖務會議ハ拓殖務大臣次官及評定官ヲ以テ組織ス。
- 第三條 拓殖務會議ノ議長ハ拓殖務大臣ヲ以テ之ニ充ツ大臣事故アルトキハ次官又ハ上席評定官之ヲ代理ス。
- 第四條 評定官ハ 人以内トシ勅命ヲ以テ各省勅任官中ヨリ之ヲ補佐ス。
- 第五條 拓殖務會議ハ評定官半數以上 名出席スルニ非サレハ會議ヲ開クコトヲ得ス。
- 第六條 議事ハ多數ニ依リ之ヲ決ス但可否平等ノ場合ニ於テハ議長ノ決スル所ニ依ル。



第七條 拓殖務大臣ハ參事官ヲシテ會議ニ列シ議案ヲ說明セシムルコトヲ得。

第八條 拓殖務會議ノ事務ハ拓殖務大臣之ヲ管掌ス。

附 則

第九條 本令ハ明治 年 月 日ヨリ施行ス。

參照

一金三萬九千五百五十圓

俸給

內

金六千圓

大臣

金四千圓

次官

金一萬千五百五十圓

祕書官一人、參事官三人、書記官三人

金一萬八千圓

屬五十人

〇〇

退官賜金、死亡賜金

一金一萬七百二十圓

廳費

內

備品費

金四千七百二十圓

圖書及印刷費、筆紙墨文具消耗品

一金六千圓

通信運搬費

一金三千圓

修繕費

一金〇〇

死傷手當

一金五千一百一圓十六錢

旅費

一金一萬千八百二十八圓十二錢五厘

雜給及雜費

內

金三百圓

給與

金千八百圓

雇員給

金五千八百八十四圓三十七錢五厘

傭人料

金四百四十八圓七十五錢

被服費

金三千三百九十五圓

雜費

計金七萬百九十九圓二十八錢五厘

外

金三千圓

拓殖務省官制及拓殖務會議規則草按



是レハ創設ノ際ニ付廳中諸般ノ器具等調製ヲ要スル諸費ノ見積  
合計金七萬三千百九十九圓二十八錢五厘

## 臺灣移住民ニ關スル覺書其他

一、臺灣島ニハ將來可及的我國農民ヲ移住セシムルノ方針ヲ取ル事。

一時的射利ノ目的ヲ以テ渡臺スモノノ如キハ到底該島ニ從來住居スル支那人ト競争スルコト能ハザルベシ。故ニ康熙年間ニ福建及ビ廣東兩省ノ支那人ガ該島西海岸ニ移住セシ時ノ如ク成ルベク農業上ノ目的ヲ以テ渡臺スルモノヲ獎勵スル事永遠ノ利益ナルベシ。

現今該島北部ニ住居スル彼ノ平埔蕃族<sup>ベホワシ</sup>ノ如キハ最モ農事ニ適當スル種族ニシテ、此等ハ大抵元ト琉球諸島ノ移住者ナリト云フ。此平埔蕃ノ農事ニ勤勉ナルハ支那移住農家ノ恐怖スル處即チ支那人ノ俗諺ニ「平埔用袴爲成無耕地」(平埔カ開化シテ支那ノ衣服ヲ用ユル時ニ至ラハ臺灣ノ農業ハ彼等ノ爲メニ奪レ去ルト云フ意ナリ)ト云ヘルヲ以テ之ヲ證スベシ。

一、現在臺灣南北及ビ廈門、汕頭、福州間ニ航路ヲ有スル「ドグラス」汽船會社ヲ我手ニ買收スルノ方法ヲ請究スルコト。

右ノ方策ヲ立テンニハ今ヨリ臺灣及ビ南清沿海ニ我汽船ノ交通ヲ開キ以テ充分ノ競争ヲ試ルコト。



惟フニ今日ノ必要ハ政略上通商上兩ナガラ可及的上海、福州、廈門、汕頭、香港、臺灣ニ我汽船ノ航海ヲ頻繁ニシ、本邦人ノ往來關係ヲ緻密ナラシムコトニアリ。

現今ノ狀形ヲ觀察スルニ南清航業權ハ悉ク前述「ドグラス」會社ニ壟斷セラレ貨物及ビ航客運賃ハ彼レノ爲スガ儘ナリ。

現在「ドグラス」會社所有ノ汽船ハ左ノ如シ。

- “Haitan” 此二艘ハ福州廈門汕頭
- “Namo” 香港間定期
- “Phales” 臺南廈門汕頭香港間往來
- “Formosa” 淡水廈門汕頭香港間往來
- “Hailoog” 同上
- “Hannu” 同上

曾テ劉銘傳ガ臺島ノ巡撫タリシ時、該地商務局付屬ノ汽船「カス」及ビ「スミス」兩號ハ常ニ上海、廈門臺灣間ヲ航通シ、米穀其他諸雜貨ハ上海ヨリ一旦臺灣ニ運送セシモ近來北部ノ貨物ハ上海ヨリ一旦廈門ニ輸入シ然ル後「ドグラス」社ノ船舶ヲ以テ廈門ヨリ臺島へ再輸出スルノ手續ニ成レリ。

本年一月ヨリ三月迄三ヶ月間ニ臺灣へ再輸出ノ爲メ北支那貨物ノ廈門へ輸入セシモノ大約元價十萬圓ナリ。

一、「マニラ」港ト廈門トノ間ニ我汽船ノ交通ヲ開キ、以テ追々南洋各地ト廈門汕頭福州間ノ關係ヲ親密ナラシメ、而シテ南洋各島往來ノ貨物及ビ支那出稼旅客ハ漸次我手ニ吸收スルノ方策ヲ講ズル事。

明治二十八年廈門ヨリ支那出稼者ノ出港セシモノ十一萬三千人ノ内「マニラ」及ビ南洋各地ニ向ケ出發セシモノ凡ソ八萬人ナリ。

又タ廈門及ビ南洋群島トノ貿易額ハ未ダ精細ノ調査ヲ得ル能ハザレドモ例年大約海關銀一百二十萬兩乃至一百四十萬兩ノ間ニアルベシ。

一、臺灣島ト廈門トノ間ニ郵便事務ヲ開設シ且ツ小爲換等ノ便利ヲ與ヘ可及的通信ノ敏速ヲ謀ル事。

目下本地ヨリ臺灣各港ニ送發スル支那人ノ書信ハ一封銀二百文ノ遞送費ナリト云フ。

右ハ只ダ要項丈ケヲ申上タルモノニテ尙ホ本港貿易ノ大體ニ就テハ別添二十八年廈門貿易額大略書參看ヲ祈ル



# 明治廿八年廈門ニ於ケル貿易額大略

## 船舶出入港員數

汽船入港 八百六十一隻  
 此屯數 八十三萬二千五百八十二噸  
 同上出港 八百五十七隻  
 此屯數 八十二萬九千五百四十八噸  
 小計船數 一千七百十八隻  
 噸數 一百六十六萬二千百三十噸  
 風帆船入港 五十八隻  
 此屯數 二萬八千八百十九噸  
 同上出港 六十隻  
 此屯數 二萬九千七百一十一噸

小計船數 一百十八隻

噸數 五萬八千五百三十噸

總計 船數 一千八百三十六隻

噸數 一百七十二萬〇六百六十噸

## 外國產輸入貿易額

海關銀九百七十七萬六千五百十兩テイル

內國產即チ支那生産品輸入貿易額

海關銀五百八十二萬二千九百七十四兩

內國產即チ支那生産品輸出貿易額

海關銀二百五十七萬九千三百三十八兩

但シ内國產輸出總額四百八十七萬二千九百二十二兩ノ中再輸出額二百二十九萬三千七百八十四兩ヲ引去リ本額ノ如シ。

## 右輸出入總計貿易額

海關銀一千八百七十七萬八千六百二十二兩

輸出入貿易品ニ對スル海關稅收入額

明治廿八年廈門ニ於ケル貿易額大略



海關銀七十萬千五百五十兩

內阿片稅十九萬二千四百四十四兩

各種阿片輸入額

三千〇五十八担<sup>ビコル</sup>

元價關銀一百七十三萬四千四百五十四兩

貨幣輸出入額

金地輸入

關銀五萬七千五百七十八兩

銀貨輸入

關銀二百四十九萬六千六百八十五兩

日本紙幣

關銀二萬二千五百三十三兩

『朱書ノコト』

『明治廿九年一月ヨリ四月迄日本紙幣ノ臺灣地方ヨリ輸入シタルモノ共計三十七萬九千七百三十八圓ナリ此レハ厦門ヨリ横濱ヘ向ケ再輸出ノ分』

金地輸出

關銀九萬四千八百〇四兩

銀貨

關銀二百三十三萬三千六百三十兩

日本紙幣

關銀一萬千七百二十八兩

支那人旅客往來員數

出港

十一萬三千六百名

入港

七萬三千九百九十五名

共計

十八萬七千六百十二名

厦門輸出入重要貨物

但元價關銀十萬兩以上ノモノ

外國品ニシテ輸入最要ナルモノハ木綿織物、毛織物、金屬類ナリ

輸出品

錫 六千百一十一担

元價關銀 十五萬四千三百七十六兩

麥粉

十二萬六千三百二十七担

元價關銀 三十六萬二千八百三十八兩

米國人蔘

一百二十一担

元價關銀 十萬四千五百三十九兩

日本製マツチ

六十一萬二千五百八十グロース

元價關銀 十萬五千百〇二兩



露國石油

一百三十二萬二千二百七十七加侖

元價關銀

十一萬七千九百五十九兩

干海老

二萬〇〇八十担

元價關銀

十八萬〇六百二十三兩

白米

二十七萬七千六百四十六担

元價關銀

五十五萬五千二百九十五兩

紅茶

七萬九千六百三十五担

元價關銀

二百五十一萬九千〇八十七兩

但此內一百六十一萬六千五百〇八兩ハ再輸出

支那產品輸入

但元價十萬兩以上ノモノ

荳餅

三十二萬六千〇四十二担

元價關銀

四十八萬八千八百三十五兩

大豆

十一萬九千九百九十七担

元價關銀

十九萬三千二百十三兩

『此外牛莊港占領中該地產品ヲ外國品トシテ輸入セシ荳餅及黃豆類元價ニシテ七十餘

ト  
朱書ノコ

萬兩アリ

棉花

一萬七千八百〇一担

元價

二十四萬四千二百十四兩

支那

阿片(四川省)五百七十一担

元價

十九萬千八百四十八兩

干海老

一萬三千五百二十八担

元價

十二萬千七百五十一兩

白米

六十萬二千七百七十二担

元價

一百二十萬四千三百八十五兩

小麥

十八萬千六百七十担

元價

十八萬千六百七十一兩

支那產品輸出

但元價十萬兩以上ノモノ

土布(即チ支那)

上製綿布)

元價

三千百〇三担

上等紙

十一萬六千六百十八兩

明治廿八年廈門ニ於ケル貿易額大略



元價	十萬〇四百八十九兩
下等紙	三萬三千七百十六担
元價	十八萬八千二百六十九兩
黃砂糖	九萬七千三百〇二担
元價	二十萬二千五百〇六兩
冰糖	九萬千六百六十一担
元價	五十六萬五千九百二十六兩
紅茶	八萬六千二百〇三担
元價	二百二十六萬三千六百六十四兩
刻煙草	一萬三千六百四十二担
元價	十七萬七千〇五十三兩

明治二十八年間廈門港ニ於ケル臺灣島トノ輸出入貿易額大略

外國產物輸入高ノ内

臺灣へ再輸出額

海關銀 四十萬八千八百七十四兩

外國產輸入高ノ内

臺灣ヨリ輸入額

海關銀 二百七十萬七百〇五兩

支那產輸入高ノ内

臺灣ヨリ輸入額

海關銀 二百十三萬千九百三十七兩

支那產輸出高ノ内

臺灣へ向ケ輸出額

海關銀 三十一萬九千五百〇三兩

右臺灣ヨリ輸入高ハ明治廿八年同島領有ノ前後ニ於テ海關ノ取扱上内國產、外國產ノ區別ヲ立テタルモノナリ。尙當時臺灣往來ノ諸貨物ノ調査充分ナラザル處アリ、右ニ前述ノ貿易額モ只其大略ヲ示スノミ。



# 金門島之記事

金門島へハ未ダ實際往着セザルニ付巨細ノ情況ハ取調付カザレドモ、該地ノ住民ニ就テ探問セシ二三ノ要項左ニ略記ス。

人口

金門及び其附邊ニアル烈嶼ト云ヘル一嶼ヲ合セテ凡ソ百三十郷社ヲ有シ其人口凡ソ十萬五六千人ナリト云フ。

文官

特授福建泉州同安糧捕海防金門分縣アリ其官衙ハ後浦市鎮ニアリ。

武官

福建水師金門協福建水師金門都司福建水師金門專汛（右等ノ官衙ハ何レモ後浦市鎮ニアリ）。

樹木

榕樹、苦令樹、梧桐樹、枯杞樹、刺桐樹。

漁業

廈門港外及び金門各島ノ郷民ハ大抵捕魚ヲ以テ生計ト爲セリ。金門著名ノ水産ハ蠔殼（即チ蠔灰用ト爲ス）ニシテ同島古寧頭湖下ノ二村ノ沿岸ニハ最モ多ク生殖シ殆ド無盡藏ナリト云フ。

春時 馬鮫魚、白魚、石首魚

夏時 刀魚、沙魚

秋時 烏賊、各種鹽魚

冬時 鯛、鰕魚

農業

土製鴉片煙、落花生、地瓜（即チ薩摩芋ナリ）、大麥、大豆、其他日用野菜。

商業

金門ノ住民ハ總テ農業漁業ヨリ成立シ居ルヲ以テ商業上格別記スベキコトナシ、只ダ二三ノ典舖アリ、又タ煤油其他諸雜貨類ヲ廈門ヨリ轉送シテ販賣スルニ過ギズト云フ。

同島内商賣輻輳ノ場所ハ左ノ如シ。

陳坑郷	料羅	溪邊	蠔殼屯	古寧頭
湖下	安岐	湖尾	湖裡	水頭社
苦坑				



金門ノ人情ハ樸厚勤儉能ク勞作ニ耐ヘ山間ノ住民ハ農業ヲ專トシ、沿岸ノ居民ハ捕魚ニ從事ス且ツ時アリテ南洋群島ニ出稼スルモノアリ。

港灣

金門島ニハ大船ヲ泊スベキ良港灣ニ乏シ、只ダ料羅ト云ヘル場處水深ク且ツ錨地ニ適スト云フ。

廈門ト金門トノ渡海

廈門金門ノ間ニハ毎日二艘ノ渡船アリ其容積大約一艘三四百担ナリ尤モ天氣晴朗ナル時ハ普通ノ舢板ニテモ渡航スルコトヲ得ベシ。

### 淡水支廳所屬土人役員職務姓名其他

總理一名ヲ置ク滬尾市街芝蘭三堡及八里坌堡ヲ管シ直接人民ニ係ル事ヲ扱ハシム、現今ノ總理ハ曾家祥ト云フモノナリ。

總理ノ下ニ地保二名アリ吳慶清ト云ヒ蔡波ト云フ共ニ總理ノ事務ヲ助ク。

又局下六名アリ總理ノ命ヲ受ケ往復奔走ニ從事ス。

滬尾市街ニ街長三十五名ヲ置ク取締及清潔法ノ監督ヲナサシム。

芝蘭三堡八里坌堡ノ各庄ニ約首ヲ置ク現ニ三十七名ナリ人口ノ多少或ハ其他ノ事情ニ由リ二庄若クハ數庄ヲ兼ヌルモノアリ。

又別ニ土人中興望アル者三名ヲ選ビ名譽委員トシ、取締等ノ事ヲ命ジ、以テ行政ノ參考ニ供フ。其氏名ハ曰ク黃寶成前政府ノトキ總理タリシモノ、曰ク吳輔卿管下ノ紳商、曰ク嚴清華本島全體ノ耶蘇傳道師タリ。







計	至九十年	至八十五年	至八十年	至七十五年	至七十一年	至六十五年	至六十一年	至五十五年
二、九三三		三	八	三三	四八	八六	一三二	
二、三六二	三	三	七	二六	四二	五四	七六	九八
五、二九五	三	三	一〇	三四	七五	一〇二	一六二	二三〇

〔戶數九百五十六戶〕

淡水支廳管下芝蘭三堡及八里坌堡戶口  
其他統計 明治廿九年三月一日現在

蘭		芝										庄名	約首名	戶數	人		計	校	學	廟	寺	地	官	舟	漁
頭圍庄	棟板庄	後厝庄	大屯庄	灰磙庄	興化店庄	下圭柔山庄	頂圭柔山庄	林仔街庄	大庄埔庄	沙崙庄	油車口庄				男	女									
謝連壽	張宙	楊珍	葉金英	陳良泉	盧蘊	李萬	黃輯五	李文圭	楊矮	陳連登	郭九泉	二二五	二二〇	四五〇	一							未詳			
一二五	一二八	一五五	九四	一四三	一四三	九二	七三	一八二	三五	七五	一〇六	二八七	二二〇	五〇七	一							三			
												四五〇	二一五	三四九											
												二三五	一一五	三九九											
												一九八	七四	一九九											
												一一五	四二九	九七九											
												二二五	一八八	四二〇											
												二五九	二一七	四七六											
												二二二	三四二	四二〇											
												四四九	二九二	七九一											
												三七三	二九二	六六五											
												三二二	二三一	五五三											
												四四四	三四八	七九二											
												四四〇	三五六	八〇六											
												二八七	二二〇	五〇七											

淡水支廳所屬土人役員職務姓名其他



三													
芋藜林庄	庄仔內庄	水堆庄	北投庄	中田寮庄	水梘頭庄	草埔尾庄	蕃薯寮庄	新庄仔庄	土地公埔庄	小基隆舊庄	小基隆新庄	老梅庄	石門庄
黃雄	江河士	洪成枝	鄭捷化	李國章	張隆溪	鄭紹基	林才	盧九	張沙	曾石岳	江甲技	潘乾仁	林泰
八三	九〇	八八	九八	一〇〇	三二四	一〇五	八一	三五三	三四二	二四一	四一八	五三三	一五六
二五七	二六二	二五六	三二四	四一三	九一五	三一五	二三五	一、〇二六	八三九	五七一	一、二〇六	一、三四二	四三二
一八六	二二二	一九九	二四四	三一二	七一二	二五二	一八八	八一七	六三〇	四四三	一、〇四六	一、一〇三	三四四
四四三	四九四	四五五	五六八	七二五	一、六二七	五六七	四二三	一、八四三	一、四六九	一、〇一四	二、二五二	二、四四五	七七六
		一	三	二			一		二		四	三	
一		一						二			六	三	
									一				
一五												七	

八里分堡						堡							
合	計	荖阡坑庄	下罟庄	松仔脚庄	大藜脚庄	渡頭庄	蛇仔形庄	計	小八里分庄	小坪頂庄	興福炭庄	三空泉庄	樹林口庄
		劉牛	汪式金	張縣	李東州	莊尾獅	謝旺		蔡宗興	蘇大吉	張洸	許烏獅	黃際唐
五	六	九〇	五九	一二	二	一	一九〇	四、七〇	九九	八六	六六	三三	六二
二	一	二、八〇	一六七	五九九	四四五	六七六	五一二	一	二七五	二四七	一六一	一〇三	一九三
一	六	二、二五七	一三八	五〇四	三四八	五三五	四二〇	一〇、五二二	二一七	一七五	一三四	七六	一五一
八	〇	五、〇六〇	三〇五	一、一〇三	七九三	七一六	九三二	二二	四九二	四二二	二九五	一七九	三四四
二	八							八	一	一			
二	八							二	二	二	一		
二	三							二					
三	七							三					



土地負擔稅額概表

上田	中田	下田	下々田	平均	壹甲ニ對スル地租		同上小作米高		負擔惣高	一反歩ニ該ル負擔高
					錢糧兩	換算金	大租石高	同上代金		
二、四六四九	二、〇一八一	一、六四四三	一、三二五五	一、八七〇二	三、四五五	一〇、一三三	六、三四九	二四、九五五	一三、八三三	
三、四五六	二、八二六	二、三三〇	一、八六四	二、六八	三、八二	二、一九七	四七、七六	八七、七七二	九、七〇九	
三、八二	三、三二	二、五七	二、〇六	二、八九	一〇、一三三	三、七四	四七、七六	八七、七七二	九、七〇九	
一〇、一三三	二、一九七	一、五三	一、二四	三、七五六	一七、一〇七	二、六三	四三、八〇	七九、五九	八、七九七	
一七、一〇七	三、七四	二、六三	一、九七八	六、三三五	二七、一〇七	四、七三	四三、八〇	七九、五九	八、七九七	
六、三四九	四七、七六	四三、八〇	一四、六六	四、九〇五	六、三四九	四三、八〇	四三、八〇	七九、五九	八、七九七	
一四、二九三	八二、二二	七四、五六	二四、八四七	七、一三七	一四、二九三	八二、二二	八二、二二	八七、七七二	九、七〇九	
二四、九五五	八七、七七二	七九、五九	二八、六八九	八〇、二四〇	二四、九五五	八七、七七二	八七、七七二	八七、七七二	九、七〇九	
一三、八三三	九、七〇九	八、七九七	三、一七〇	八、八七六	一三、八三三	九、七〇九	八、七九七	八、七九七	八、八七六	

備考

壹甲ハ方貳拾五才ニシテ壹才ハ凡ソ壹丈貳尺五寸ナルヲ以テ反別九反拾貳步餘ニ當ル。  
 兩ハ庫平銀トシテ金壹圓四拾錢ヲ以テ採算セリ。  
 米壹石代金ハ壹圓七拾錢トス。  
 大租石、小租石ハ佃戸ト大小租戸トノ契約ニ由リ成立ツモノナレバ一定ノ率アルナシ。  
 田地ハ一般ニ四等ニ區別セラレタリ。

臺灣住民刑罰令

同令第二十一號

臺灣住民刑罰令臺灣住民治罪令臺灣住民民事訴訟令及臺灣監獄令別冊之通相定メ明治二十八年十一月二十日ヨリ施行ス

明治二十八年十一月十七日

臺灣總督伯爵 樺 山 資 紀

第一章 總 則

- 第一條 此刑罰令ハ臺灣 臺灣島澎湖列島 住民ニ適用ス。
  - 第二條 此刑罰令ノ總則ハ他ノ總則ヲ定メサル諸罰令ニ適用ス。
  - 第三條 此刑罰令ニ正條ナキ所爲ト雖モ帝國陸海軍刑法及ヒ普通刑法ニ正條アルモノハ之ヲ罰スルコトヲ得。
- 但其刑ハ輕重ヲ斟酌シテ此刑罰令ノ刑ヲ適用ス。



第四條 刑ハ左ノ四種トス。

- 一、死 刑
- 二、懲 役
- 三、罰 金
- 四、沒 收

第五條 死刑ハ斬首トス。

第六條 懲役ハ一日以上十五年以下トシ懲役場ニ留置シ定役ニ服セシム。

第七條 罰金ハ拾錢以上千圓以下トス。

第八條 左ニ記載シタル物件ハ沒收ス。

- 一、法令ニ於テ禁制シタル物件
- 二、犯罰ノ用ニ供シタル物件
- 三、犯罰ニ因テ得タル物件

第九條 罰金ヲ納付スル資力ナキ者ハ五拾錢ヲ一日ニ換算シテ懲役ニ服セシム。

第十條 未タ判決ヲ經サル數罰俱ニ發シタル時ハ一ノ重キニ從ヒテ處斷ス一罰前ニ發シ已ニ判決ヲ經テ餘罪後ニ發シタル時亦同シ。

第十一條 教唆者從犯未遂犯ハ正犯既遂犯ノ刑ヲ科ス。

第十二條 所犯情狀原諒ス可キ者ハ酌量シテ本刑ヲ減輕スルコトヲ得。

### 第二章 犯罪及ヒ刑罰

第十三條 左ニ記載シタル所爲アル者ハ死刑ニ處ス其豫備陰謀ニ止ル者亦同シ。

- 一、内亂ヲ起シタル者
- 二、政府ニ抗敵スル目的ヲ以テ官吏ヲ殺害シタル者
- 三、軍隊軍艦々隊用船舶官廳ニ對シ黨ヲ結ヒ抗敵シタル者
- 四、船舶兵器ノ工場船渠壘柵兵器彈藥其ノ他戰爭ノ用ニ供スヘキ物件及軍事ニ關スル道路橋梁河溝港埠森林家屋船舶水道等ヲ毀壞シ又ハ火ヲ放チ之ヲ燒燬シタル者
- 五、電信ノ器械柱木ヲ毀壞燒燬シ又ハ條線ヲ切斷シタル者
- 六、汽車鐵道又ハ其標識ヲ毀壞燒燬シタル者及ヒ汽車ノ往來ヲ妨害スル爲メ危險ナル障礙ヲ爲シタル者
- 七、燈臺浮標其他航海ノ安寧ヲ保護スル標識ヲ毀壞燒燬シタル者及船舶ノ往來ヲ妨害スル爲メ詐僞ノ標識ヲ點示シタル者



八、偽計又ハ威力ヲ以テ兵器彈藥其他軍用物件ノ運搬及郵便ヲ妨害シタル者  
九、兵器彈藥金穀物件ヲ敵ニ支給シタル者及ヒ軍隊軍艦艦隊軍用船舶ノ動靜軍用品ノ集積所等ヲ敵ニ密報シ又ハ敵兵ヲ誘導シタル者

十、間諜ヲ誘導助成シ又ハ隱避セシメ若クハ藏匿シタル者

十一、俘虜ヲ逃走セシメ若クハ之ヲ劫奪シタル者又ハ逃走ノ俘虜ナルコトヲ知テ之ヲ藏匿シ若クハ隱避セシメタル者

十二、軍隊軍艦艦隊軍用船舶ノ嚮導ヲ爲スニ當リ詐僞ノ所爲アリタル者

十三、造言飛語ヲ爲シ又ハ喧嘩呼號シテ軍隊軍艦艦隊軍用船舶其他官廳ノ靜肅ヲ妨害シ若クハ民心ヲ攪擾シタル者

十四、毒物ヲ井泉河流ニ投シタル者及汚穢物ヲ投シ若クハ其他ノ手段ヲ以テ軍用ニ供スル淨水ヲ害シタル者

第十四條 官吏ノ職務ヲ行フヲ妨害シタル者ハ一月以上六年以下ノ懲役及ヒ拾圓以上千圓以下ノ罰金ニ處ス因テ官吏ノ死傷ニ致シタル者ハ死刑ニ處ス。

官吏ノ職務ニ對シ公然又ハ其目前ニ於テ侮辱シタル者ハ一月以上二年以下ノ懲役及ヒ五圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス。

第十五條 囚徒逃走シタル者ハ二月以上四年以下ノ懲役ニ處ス。

囚徒ヲ劫奪シ又ハ逃走セシメタル者ハ六月以上八年以下ノ懲役及ヒ二十圓以上千圓以下ノ罰金ニ處ス。

第十六條 犯罰人又ハ逃走ノ囚徒ヲ藏匿シタル者ハ十五日以上一年以下ノ懲役又ハ五圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス。

第十七條 官廳ヨリ召喚ヲ受ケ故ナク出頭セサル者ハ一圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス。

第十八條 帝國ニ於テ通用スル内外國ノ金銀貨及ヒ紙幣ヲ偽造シタル者ハ死刑ニ處ス其變造シタル者及ヒ白銅貨若クハ銅貨ヲ偽造シタル者ハ二年以上五年以下ノ懲役及ヒ五圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス。

第十九條 偽造變造ノ情ヲ知テ其貨幣ヲ行使シタル者ハ二月以上四年以下ノ懲役及ヒ二圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス。

第二十條 官印ヲ偽造シ又ハ盜用シタル者及ヒ官ノ文書ヲ偽造シ又ハ變造シタル者ハ六年以上十五年以下ノ懲役及ヒ五十圓以上千圓以下ノ罰金ニ處ス。

第二十一條 私印ヲ偽造シ又ハ盜用シタル者及ヒ私書ヲ偽造シ又ハ變造シタル者ハ一年以上六年以下ノ懲役及ヒ五圓以上千圓以下ノ罰金ニ處ス。



第二十二條 官吏ノ職務上ノ訊問ニ對シ僞證シタル者又ハ詐僞ノ陳述ヲ爲シタル者ハ一月以上六十年以下ノ懲役及ヒ五圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス。

被告人ヲ陷害スル爲メ僞證シ又ハ詐僞ノ陳述ヲナシタル者ハ被告人刑ニ處セラレタルト否トヲ問ハズ其刑ニ反坐ス反坐ノ刑前項ノ刑ヨリ輕キ時ハ前項ニ依リ處斷ス。

第二十三條 人ヲ誣告シタル者ハ亦前條第二項ニ同シ。

第二十四條 亞片煙又ハ其吸食器ヲ軍人軍屬其他渡來ノ帝國臣民ニ交付シタル者ハ死刑ニ處ス其情ヲ知テ房屋ヲ給與シタル者亦同シ。

第二十五條 墳墓ヲ發掘シタル者及ヒ埋葬ス可キ死屍ヲ汚辱シ又ハ毀棄シタル者ハ二月以上四年以下ノ懲役及ヒ五圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス。

第二十六條 官廳ノ命ヲ受ケ公務ヲ行フ者賄賂ヲ收受シタル時ハ一月以上四年以下ノ懲役及ヒ十圓以上千圓以下ノ罰金ニ處ス。

第二十七條 賄賂ヲ行使シタル者ハ五圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス。

第二十八條 人ヲ殺シタル者ハ死刑ニ處ス。

第二十九條 人ヲ傷シタル者ハ一月以上八年以下ノ懲役ニ處ス因テ死ニ致シタル者ハ九年以上十五年以下ノ懲役ニ處ス。

第三十條 過失ニ因テ人ヲ傷シタル者ハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス因テ死ニ致シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス。

第三十一條 擅ニ人ヲ逮捕シ又ハ監禁シタル者ハ一月以上二年以下ノ懲役及ヒ五圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス。

第三十二條 十五歳以下ノ幼者ヲ略取シ又ハ誘拐シタル者及ヒ略取誘拐ノ情ヲ知テ之ヲ收受シタル者ハ六月以上五年以下ノ懲役及ヒ五圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス。

第三十三條 婦女ヲ強姦シタル者ハ六年以上十二年以下ノ懲役ニ處ス因テ傷シタル者ハ十二年以上十五年以下ノ懲役ニ處ス其死ニ致シタル者ハ死刑ニ處ス。

第三十四條 人ノ財物ヲ窃取シタル者ハ二月以上八年以下ノ懲役ニ處ス。

第三十五條 人ヲ脅迫シ又ハ暴行ヲ加ヘテ財物ヲ強取シタル者ハ四年以上十五年以下ノ懲役ニ處ス二人以上兇器ヲ携帯シテ犯シタル時ハ死刑ニ處ス強盜人ヲ殺傷シタル者及ヒ婦女ヲ強姦シタル者亦同シ。

第三十六條 遺失物又ハ漂流物ヲ拾得シ若クハ埋藏物ヲ掘得シテ隱匿シ所有主ニ還付セス又ハ官署ニ申告セサル者ハ十五日以上六月以下ノ懲役又ハ三圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十七條 人ヲ欺罔シ又ハ恐喝シテ財物若クハ證書類ヲ騙取シタル者及ヒ受托物ヲ消費シ又ハ拐



帶シタル者ハ一月以上四年以下ノ懲役及ヒ十圓以上千圓以下ノ罰金ニ處ス。

第三十八條 贓物ナルコトヲ知テ之ヲ受ケ又ハ寄藏故買シ若クハ牙保ヲ爲シタル者ハ十五日以上三年以下ノ懲役及ヒ五圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス。

第三十九條 火ヲ放チ家屋其他ノ建造物若クハ船舶ヲ燒燬シタル者ハ死刑ニ處ス。

第四十條 火ヲ放テ廢屋及ヒ柴草肥料等ヲ貯フル屋舎又ハ山林ノ竹木田野ノ穀麥若クハ露積シタル柴草竹木其他ノ物件ヲ燒燬シタル者ハ六年以上十五年以下ノ懲役ニ處ス。

第四十一條 人ノ家屋其他ノ建造物又ハ船舶ヲ毀壞シタル者ハ一月以上五年以下ノ懲役及ヒ五圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス。

第四十二條 人ノ權利義務ニ關スル證書類ヲ毀棄シタル者ハ二月以上四年以下ノ懲役及ヒ五圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス。

第四十三條 人ノ牛馬ヲ殺シタル者及ヒ器物ヲ毀棄シタル者ハ十五日以上六月以下ノ懲役及ヒ五圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス。

## 臺灣住民治罪令

第一條 臺灣臺灣島澎湖列島及ヒ附屬諸島住民ノ犯罪ハ別表ニ定メタル管轄區域ニ從ヒ臺灣總督府法院若クハ其支部ニ於テ之ヲ審判ス但臺灣總督ノ命令ヲ以テ特ニ法院ノ審判ニ付シタル事件ハ此限ニアラス。

第二條 左ニ記載シタル犯罪ハ犯罪人所在地又ハ犯罪地ノ憲兵諸隊長警察署長分署長之ヲ審判ス。

一、帝國刑法ノ違警罪

二、臺灣諸罪令ニ於テ本刑懲役二月以下罰金三十圓以下ニ該ル犯罪

第三條 陸軍憲兵將校下士守備隊長兵站司令官地方各行政廳長官警部長警部ハ檢察官トシテ犯罪ヲ捜査シ其證據ヲ蒐集シテ法院若クハ支部ニ起訴スヘシ。

第四條 官吏職務ヲ行フニ因リ犯罪アルコトヲ知リタルトキハ檢察官ニ告發スヘシ。  
何人ニ限ラス犯罪アルコトヲ知リタルトキハ檢察官ニ告發スルコトヲ得。

第五條 憲兵上等兵及ヒ巡查ハ審判官又ハ檢察官ノ命令アルニアラサレハ被告人ヲ逮捕スルコトヲ得ス但現行犯ハ直ニ逮捕スヘシ。



何人ニ限ラス現行犯ヲ認メタルトキハ直チニ逮捕スルコトヲ得其逮捕シタルトキハ速ニ檢察官若クハ憲兵上等兵巡查ニ交付スヘシ。

第六條 被告人逮捕ノ後審判官ノ命令アルニアラサレハ五日以上留置スルコトヲ得ス。

第七條 審判官ハ事實發見ノ爲メ證人ヲ喚問シ鑑定ヲ命シ臨檢ヲ爲シ家宅ヲ搜索シ物件ヲ押收スルコトヲ得。

第八條 審判官ハ職務執行ノ爲メ官吏ヲ喚問シ憲兵下士上等兵及ヒ警部巡查ヲ指揮スルコトヲ得。

第九條 犯罪ノ證憑十分ナラス又ハ被告事件罪トナラサルトキハ判決ヲ以テ無罪ヲ宣告スヘシ。

第十條 本刑死刑ニ該ル被告事件ハ總督ノ認可ヲ經テ判決ヲ宣告スヘシ。

總督若シ認可セサルトキハ原法衙ニ於テ又ハ法院ニ移シテ更ニ其事件ヲ審判セシム。

第十一條 判決書ニハ左ノ事項ヲ記載スヘシ。

一、被告人ノ住所氏名年齢

二、事實及ヒ判決ノ理由

三、判決主文

四、審判ヲ爲シタル年月日

五、審判ヲ爲シタル法院若クハ支部ノ名稱

六、審判官及ヒ書記ノ官氏名

第十二條 判決ニ錯誤アリタルコトヲ發見シタルトキハ審判官檢察官及監獄長ハ總督ニ再審ノ申請ヲ爲スヘシ刑ノ宣告ヲ受ケタル者亦之ヲ爲スコトヲ得。

總督若シ其申請ヲ理由アリトシタルトキハ法院ニ命シテ再審セシム。

第十三條 刑ノ宣告ヲ受ケタル者改悛ノ情狀顯著ナルトキハ總督ハ其刑ノ全部若クハ一部ヲ赦免ス。

(別表)

臺灣總督府法院管轄區域

法院及支部廳名	管轄區域
本院	臺北縣直轄地及基隆淡水各支廳管轄地
宜蘭支部	同 宜蘭支廳管轄地
新竹支部	同 新竹支廳管轄地
苗栗支部	臺灣民政支部苗栗出張所管轄地
彰化支部	同 直轄地及彰化出張所管轄地
雲林支部	同 雲林出張所管轄地
埔里社支部	同 埔里社出張所管轄地

臺灣住民治罪令



嘉義支部	同	嘉義出張所管轄地
臺南支部	臺南民政支部直轄地及安平出張所管轄地	
鳳山支部	同	鳳山出張所管轄地
恒春支部	同	恒春出張所管轄地
澎湖島支部	澎湖島廳管轄地	

# 臺灣住民民事訴訟令

第一條 臺灣（臺灣島澎湖列島及ヒ附屬諸島住民ノ民事訴訟ハ別表ニ定メタル管轄區域ニ從ヒ臺灣總督府法院若クハ其支部ニ於テ之ヲ審判ス。

第二條 審判官ハ地方ノ慣例及ヒ條理ニ依リ訴訟ヲ審判ス。

第三條 原告及ヒ被告ハ自ラ訴訟ヲナス可シ但審判官ノ許可ヲ經テ親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代理人訴訟補佐人ト爲スコトヲ得。

第四條 訴ノ提起ハ訴狀及ヒ其副本ヲ法院若クハ支部ニ差出シテ之ヲ爲ス。訴狀ニハ左ノ事項ヲ記載スヘシ。

一、原告及ヒ代理人ノ氏名住所年齢

二、被告ノ氏名住所年齢

三、要求ノ事物

四、要求ノ事實及理由

五、立證



六、年月日  
七、原告及ヒ代理人ノ署名捺印

第五條 審判官ハ訴狀ヲ審査シ若シ受理ス可カラサルモノナルトキハ之ヲ却下スヘシ若シ訴ヲ受理シタルトキハ訴狀ノ副本ヲ被告ニ送付シ相當ノ期限ヲ指定シテ答辯書及ヒ副本ヲ差出サシムヘシ。

第六條 答辯書ニハ左ノ事項ヲ記載スヘシ。

- 一、原被告及ヒ代理人ノ氏名住所年齢
- 二、答辯ノ事實及ヒ理由若シ反訴アルトキハ其事實及ヒ理由
- 三、立證

四、年月日

五、被告及ヒ代理人ノ署名捺印

第七條 審判官ハ答辯書ノ副本ヲ原告ニ送付シ其期日ヲ定メ口頭辯論ノ爲メ原被告ニ出頭ヲ命スヘシ。

第八條 口頭辯論終結シタルトキハ審判官ハ左ノ事項ヲ記載シタル判決書ヲ以テ判決ヲ言渡スヘシ。

一、原被告及ヒ代理人ノ氏名住所年齢

二、事實及ヒ争點ノ摘示

三、判決ノ理由

四、判決主文

五、審判ヲ爲シタル年月日

六、審判ヲ爲シタル法院若クハ支部ノ名稱及ヒ審判官ノ官氏名

第九條 口頭辯論ノ期日ニ原被告共ニ出頭セサルコトアルモ審判官ハ直ニ判決ヲ爲スコトヲ得。

第十條 審判官ハ證人參考人鑑定人ヲ召喚シ、臨檢ヲ爲シ物件ヲ差押ヘ停止命令ヲ發シ保證ヲ立テシメ其他便宜ノ處分ヲ爲スコトヲ得。

第十一條 審判官ハ職務執行ノ爲メ陸軍憲兵下士上等兵警部巡查ヲ指揮スルコトヲ得。

第十二條 判決ノ執行ハ之ヲ求ムル者ノ申請ニヨリ審判官判決謄本ニ執行文ヲ付シ憲兵下士上等兵又ハ警部巡查ニ交付シテ實施セシム。

(別表)

### 臺灣總督府法院管轄區域

法院及支部廳名

管

轄

區

域

臺灣住民民事訴訟令

三四九



本院	臺北縣直轄地及基隆淡水各支廳管轄地
宜蘭支部	臺北縣宜蘭支部廳管轄地
新竹支部	同 新竹支廳管轄地
苗栗支部	臺灣民政支部苗栗出張所管轄地
彰化支部	同 直轄地及彰化出張所管轄地
雲林支部	同 雲林出張所管轄地
埔里社支部	同 埔里社出張所管轄地
嘉義支部	同 嘉義出張所管轄地
臺南支部	臺南民政支部直轄地及安平出張所管轄地
鳳山支部	同 鳳山出張所管轄地
恒春支部	恒春出張所管轄地
澎湖島支部	澎湖島廳管轄地

# 臺灣監獄令

第一條 監獄ヲ別テ左ノ三種トス。

- 一、留置場 刑事被告人ヲ一時留置スル所トス
  - 二、未決監 刑事被告人ヲ拘禁スル所トス
  - 三、既決監 懲役ニ處セラレタル者ヲ拘禁スル所トス
- 第二條 未決監既決監ハ法院及ヒ其支部所在地ニ置キ留置場ハ各憲兵隊及ヒ警察官署内ニ置ク。
- 第三條 監獄ハ民政局長ノ監督ニ屬シ其所在地行政廳長官之ヲ管理ス但シ憲兵隊ニ於ケル留置場ハ憲兵隊長之ヲ管理ス。
- 第四條 監獄ニ關スル規則ハ民政局長總督ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム。



# 治罪令民事訴訟令監獄令

日令第二十一號

臺灣住民刑罰令臺灣住民治罪令臺灣住民民事訴訟令及臺灣監獄令照別冊所定自明治二十八年十一月廿日着即施行

明治二十八年十一月十七日

臺灣總督府伯爵 樺 山 資 紀

男 有

臺灣住民治罪令臺灣監獄令一概不列於茲

## 臺灣住民刑罰令

第一章 總 則

第一條 此刑罰令通行臺灣臺灣島澎湖列島及附屬諸島住民

第二條 不定總則之諸罰令一概住此總則施行。

第三條 此刑罰令內雖無有正條行爲若有正條於帝國陸海軍刑法及普通刑法者即按律處斷。

但其刑酌量輕重而依刑罰令之刑施行。

第四條 將開列於左之四種爲刑

- 一、死 刑
- 二、懲 役
- 三、罰 金
- 四、沒 收

第五條 死刑者斬首。

第六條 懲役者自一日起至十五年爲止留在懲役場應役。

第七條 罰金者以十錢起至千圓爲止。

第八條 開列於左之物件一概沒收。

- 一、法令所禁之物件
- 二、供犯罪之用物件
- 三、因犯罪而所獲之物件

第九條 如無繳納罰金之資財者以金五十錢換算應役一日。

治罪令民事訴訟令監獄令



第十條 數罪俱發未經論決者從重處斷若一罪先發已經論決而餘罪後發者亦同。

第十一條 教唆者從犯未遂犯即以正犯已遂犯之刑處斷。

第十二條 所犯者可原諒者酌量減輕。

第二章 犯罪及刑罰

第十三條 犯左列之條目者罪當死刑其豫備隱謀者亦同。

- 一、企起謀反者
- 二、有意敢抗敵政府而殺官吏者
- 三、結黨敢抗敵軍隊軍艦艦隊軍用船隻及官廳者
- 四、毀壞或燒燬船隻軍器之工場船渠壘柵兵器彈藥及備戰應用物件並有關軍務道路橋渠河溝港埠港茂林家屋水渠等類者。
- 五、毀壞或燒燬電信之器械柱木或斷其電線者
- 六、毀壞或燒燬火車鐵路及其標識等類者或因為妨礙火車來往障礙造險者
- 七、所有備航海安寧物件即燈臺浮標標識等類一概毀壞燒燬者及因為妨礙船隻來往以偽標識指示者。
- 八、以偽計威力妨礙兵器彈藥及一概軍用物件之搬運及郵便者。

九、私給兵器彈藥全穀等類與敵軍者及以軍隊軍艦艦隊軍用船隻消息並貯積軍需各處密報敵軍或引誘敵軍者

十、引誘助成奸細或使之隱避或藏匿之者。

十一、使俘虜逃走或劫奪之者或知其逃走而使之隱避或藏匿之者。

十二、為軍隊軍艦艦隊軍用船隻作嚮導而詐騙者

十三、造言飛語喧嘩呼號妨礙軍隊軍艦艦隊軍用船隻並官廳靜肅或攪惑民心者

十四、將毒藥投井泉河流者及投污穢物或以別樣邪法使軍用淨水不堪其用者

第十四條 當官吏施行職務妨礙之者懲役自一月起至六年為止並罰金十圓至千圓為止因而致死傷者死刑。

對官吏之職務而公然或於目前侮辱之者懲役自一月起至二年為止并罰金五圓至五百圓為止

第十五條 囚人逃走者懲役自二月起至四年為止劫奪囚人或使之逃走者懲役自六月起至八年為止並罰金二十圓至千圓為止

第十六條 藏匿犯人或逃走之囚人者懲役自十五日起至一年為止或罰金五圓至五百圓為止

第十七條 受官廳之召喚無故不赴者罰金一圓至百圓為止

第十八條 偽造帝國從來所通用內外國之金銀貨及紙幣者死刑其變造者及偽造白銅貨或銅貨者懲役



自二年起至五年爲止并罰金五圓至五百圓爲止。

第十九條 知偽造變造之情而使用其貨幣者懲役自二月起至四年爲止并罰金二圓至五百圓爲止。

第二十條 偽造或盜用官印者及詐爲官文書者懲役自六年起至十五年爲止并罰金五十圓至千圓爲止。

第二十一條 偽造或盜用私印者及詐爲私書者懲役自一年起至六年爲止并罰金五圓至千圓爲止。

第二十二條 當官吏施行職務時對其質訊干證者及爲詐僞口陳者懲役自一月起至六年爲止并罰金五圓至五百圓爲止。

因爲陷害被告人僞干證者及爲詐僞口陳者不問被告人處刑與否反坐之刑輕於前項之刑卽照前項處斷

第二十三條 誣告者與前條第二項所錄同。

第二十四條 將亞片煙或其吸煙什器交付軍人軍屬及渡來之帝國臣民者死刑知其情而給與吸煙所有亦同。

第二十五條 發掘墳墓者及將可以埋葬死屍污辱或毀棄之者懲役自二月起至四年爲止并罰金五圓至五百圓爲止。

第二十六條 受官廳之命辦公事者有私受賄賂時懲役自一月起至四年爲止並罰金十圓至千圓爲止。

第二十七條 行使賄賂者罰金五圓至五百圓爲止。

第二十八條 殺人者死刑

第二十九條 傷人者懲役自一月起至八年爲止因而致死者懲役自九年起到十五年爲止。

第三十條 過失傷人者罰金二圓至百圓爲止因而致死者罰金二十圓至二百圓爲止。

第三十一條 擅捕拿人或監禁之者懲役自一月起至二年爲止並罰金五圓至五百圓爲止。

第三十二條 約未滿十五歲幼孩而略取或誘拐之者及知其略取誘拐之情而收受之者懲役自六月起至五年爲止并罰金五圓至五百圓爲止。

第三十三條 強姦婦女者懲役自六年起至十二年爲止因而傷者懲役自十二年起至十五年爲止其致死者死刑。

第三十四條 竊取人之財物者懲役自二月起至八年爲止。

第三十五條 脅迫人或加暴行而強取財物者懲役自四年起至十五年爲止若二人以上攜帶兇器而犯之時死刑強盜殺傷人或強姦婦女者亦同。

第三十六條 拾得遺失物漂流物或挖掘埋藏物而隱匿不還付於主或不申告於官者懲役自十五日起至六月爲止或罰圓三圓至百圓爲止。

第三十七條 欺罔或恐喝人而騙取財物契單等類者及費消或拐帶受寄財物者懲役自一月起至四年爲止并罰金十圓至千圓爲止。

第三十八條 知爲贓物而受之或寄藏故買之或爲牙保者懲役自十五日起至三年爲止并罰金五圓至五百



圓爲止。

第三十九條 放火燒燬人之家屋諸建造物及船隻者死刑。

第四十條 放火燒燬廢屋及貯積柴草肥料等類各屋舍或山林之竹木田野之穀麥及露積之柴草竹木等類一概物件者懲役自六年起至十五年爲止。

第四十一條 毀壞人之家屋諸建造物及船隻者懲役自一月起至五年爲止并罰金五圓至五百圓爲止。

第四十二條 將關人之權利義務契單券抄等類毀棄之者懲役自二月起至四年爲止并罰金五圓至五百圓爲止。

第四十三條 殺人之牛馬者及毀棄人器物者懲役自十五日起至六月爲止并罰金五圓至五百圓爲止。

### 臺灣住民民事訴訟令

第一條 臺灣、臺灣島、澎湖島及附屬諸島住民之民事訴訟者照於別表管轄區域各依臺灣總督府法院或支部斷之。

第二條 審判官準任地方之慣例及條理斷訴訟。

第三條 原告及被告可躬爲訴訟但得審判官之準許或以親族或雇人得爲訴訟代理人訴訟補佐人。

第四條 起訴者用訴狀及其副狀可呈供於法院或支部訴狀可記左之事項。

一、原告及代理人之氏名住所年齡

二、被告人之氏名住所年齡

三、要討之事物

四、要討之事實及理由

五、立證

六、年月日

七、原告及代理人之署名號印

第五條 審判官審查訴若不可准理則批却之若准理則發於被告人以副狀指定相當之期限而可使被告呈出赴訴書及其副書。

第六條 赴訴書可記左之事項

一、原被告及代理人之氏名住所年齡

二、赴訴之事實及理由若有反訴則其事實及理由

三、立證

四、年月日

五、被告及代理人署名號印

第七條 審判官將赴訴書之副書送付於原告定其期日可命原被告之兩口對辯。



第八條 兩口對辯明白終結則審判官列記之事項以教示判決。

一、原被告及代理人之氏名住所年齡

二、事實及爭點之摘示

三、判決之理由

四、判決主文

五、判決年月日

六、審判之法院或支部之名稱及審判官之官氏名

第九條 當兩口對辯之期日雖原告被告俱不出頭審判官直得判決。

第十條 審判官得召喚證人參考人鑑定人為臨檢押留物件發停止命令使原被告立保證其他便宜處分。

第十一條 審判官為執行職務得指揮陸軍憲兵下士上等兵警部巡查。

第十二條 判決之嚴施依其申請審判官付判決謄本以嚴施文使憲兵下士上等兵或警部巡查實施。

(別表)

### 臺灣總督府法院管轄區域

本院	法院及支部廳名	管轄區域
	臺北縣直轄地及基隆淡水各支廳管轄地	

宜蘭支部	同	宜蘭支廳管轄地
新竹支部	同	新竹支廳管轄地
苗栗支部		臺灣民政支廳苗栗出張所管轄地
彰化支部		臺灣民政支廳直轄地及彰化出張所管轄地
雲林支部	同	雲林出張所管轄地
埔里社支部		臺灣民政支廳埔里社出張所管轄地
嘉義支部	同	嘉義出張所管轄地
臺南支部		臺南民政支廳直轄地及安平出張所管轄地
鳳山支部	同	鳳山出張所管轄地
恒春支部	同	恒春出張所管轄地
澎湖島支部		澎湖島廳管轄地



## 戰役行賞ニ付上申

明治二十七八年戰役ニ對スル論功行賞ハ既ニ實施セラレ、臺灣ノ役ニ從事シタルモノハ近衛師團ヲ除キ他ハ勳績調査中ニ有之候處、第二師團ハ他師團ノ例ニ準ジ、其賜ハルベキ勳章ノ員數内達相成了承致候。然ルニ測カニ承ル處他ノ師團ニ賜ハリシ勳章ノ員數ト比較スルトキハ、第二師團ハ第六師團ト同數ナリト云フ。第六師團ハ旅順ノ戰闘ニ參與シタル事一回、他ノ一旅團ハ威海衛ノ戰闘ニ從事シタル事一回ニシテ、其他ニハ大ナル戰闘ニ參與シタルナキヤニ承知致候。

第二師團ハ威海衛ノ戰闘ニ參與スルノミナラズ混成第四旅團ノ如キハ昨年七月以來臺灣ニ在テ賊徒ノ鎮壓及兵站專備ニ任ジ其南進軍ノ戰闘部列ニ入ルヤ、布袋嘴ニ上陸後屢々戰闘シ、又第二師團長ハ第三旅團及其他ノ兵種ヲ率ヒ枋寮ニ上陸ノ上數回ノ戰闘ヲ爲シ、尙臺南占領ノ後ハ各地ニ技隊ヲ派遣シ今尙戰闘ニ從事シアリ。且ツ瘴癘人ヲ傷フノ地ニ在リテ各所ニ轉戰セシコトナレバ、其困苦固ヨリ第六師團ノ比ニアラズ。然ルニ其戰闘及困苦ノ程度竝從軍日數ノ長短ヲ第六師團ト同様ニシ勳章ノ員數ヲ之ト同様ニセラレタルハ不適當ノ様ニ思考セラル。聞ク第四師團ニ賜ハルベキ勳章ノ數ハ金鷄勳章コソナシト雖モ、其勳章ノ總數ハ尙第二師團ト同數ナリ。第二師團戰死傷者或ハ瘴

癘毒ニ斃レ又ハ其爲メニ後送セラレタル者ノ人員甚ダ多ク、隨テ之ガ補充ヲ爲シタル人員モ固ヨリ夥多ニシテ、決シテ第四師團ノ比ニアラザルモノニシテ、第二師團ノ其以前ヨリ北部、南部ニ轉戰シテ今尙駐在スルモノト程度ヲ同フシテ語ルベカラズ。故ニ第二師團ノ勳章數ヲ増加セラル、ハ至當ノ事ト存候。

常備艦隊モ征臺ノ當初ヨリ本島平定ニ至ルマデ終始戰闘ニ從事シ、或ハ風濤ニ凌ギ或ハ瘴癘ヲ冒シ、百難ヲ排除シテ遂ニ能ク勳績ヲ收メタル者ニ付、其行賞ハ近衛師團ト權衡ヲ保テ御吟味相成度。臺灣ノ役以前ニ從軍シタルモノハ六月一日ヲ以テ限リトシ勳績ノ調査ヲ爲シ行賞セラレタル者ニシテ、其後臺灣ノ役ニ於テ戰闘ニ參與シタル者及其他樞要ノ職務ニ從事シ臺灣ノ戡定ニ與テ最モ力アルモノ、如キモ既ニ前ニ行賞セラレタルモノハ再ビ行賞セラレザルヤニ聞ク、若シ果シテ然ルトキハ獎勵ノ道ニ於テ如何コレアルベキヤ。窃カニ懸念ナキ能ハズ。假令臺灣出張前ノ功績ニ對シ賞賜アリタル者ト雖モ、更ニ臺灣ニ於テ功績顯然タル者ハ別ニ相當ノ賞賜アルベキハ理ニ於テ當然ノ事ト思考ス。凡論功行賞ノ事ハ之ヲ均一ニスル頗ル難シト雖モ、前顯ノ如キハ最モ見易キ道理ニシテ、已ニ昨年六月一日ヲ分界トシ調査セラレタル儀故、前ノ行賞ハ六月一日以前ノ功績ニ對スルモノニシテ、其以前ニ對シテハ何等ノ關係ヲ有セズ前後共ニ功績アリタル者ハ假令其身ハ一人ナルモ猶二人ナルト同ジク、即チ前ノ賞賜ヲ以テ後ノ功績ヲ沒セントスルハ一人ニ賞賜ヲ行ヒタルガ故ニ



他ノ一人ニハ行賞セザル可ナリト云フニ似タリ。之レ論功行賞ノ道ヲ失スルモノト存候。  
右等ノ件ト充分論議ヲ盡シ内定セラレタル事トハ存候得共尙篤ト御謚議相成様致度過去ヲ鑑ミ將  
來ヲ慮リ茲ニ鄙見ヲ具シ及内稟候也。

明治二十九年一月七日

臺灣總督伯爵 樺 山 資 紀

參謀總長 彰 仁 親 王 殿

## 會計検査院支廳設置

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル臺灣ニ會計検査院支廳ヲ設置スルノ法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム。

明治二十九年五月一日

法律第九十二號

第一條 臺灣地方所在官廳ノ歳入歳出及官有物ニ關スル計算ヲ検査スル爲メ會計検査院ニ一部ヲ増設シ之ヲ臺灣ニ置キ會計検査院臺灣支廳ト稱ス。

第二條 會計検査院ニ部長一員検査官三員書記官一員検査官補五員屬若干員ヲ増置シ臺灣支廳ノ職員ニ充ツ。

第三條 部長ハ検査上必要ナリト認ムルトキハ所屬官吏ヲ派遣シテ實地検査ヲ爲スコトヲ得。  
第四條 此ノ法律ニ規定セザル事項ハ總テ會計検査院法ニ依ル

朕會計検査院臺灣支廳事務章程ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム。

明治二十九年五月一日

會計検査院支廳設置



勅令第六十四號

會計検査院臺灣支廳事務章程

會計検査院  
臺灣支廳事務章程

第一條 部長ハ支廳中一切ノ事務ヲ管理シ廳員ヲ監督ス。

第二條 部長ハ部會議ノ議決ヲ不當ト認ムルトキハ其ノ實行ヲ停止シ十四日以内ニ之ヲ再議ニ付スルコトヲ得。

再議ノ議決ニ對シテハ會計検査院總會議ニ提出スルノ外復タ之ヲ停止スルコトヲ得ズ。

第三條 部長ハ臺灣總督ニ對シ文書ヲ以テ質問ヲ爲シ又ハ注意ヲ要求スルコトヲ得ルモ審理書ヲ發スルコトヲ得ズ。

第四條 部長ハ其ノ主管事務ノ分配ヲ定メ又ハ院長ノ認可ヲ得テ支廳ノ處務ニ關スル規程ヲ定ム。

第五條 部長ハ其ノ主管事務ニ關シ會計検査院法第十四條ニ代レル検査報告書又ハ第十五條ニ依レル行務成績書ニ掲載スベキ事項其ノ他會計検査院總會議ノ議決ヲ要スト認ムル事項ハ報告書ヲ添ヘ其議決ヲ求ムル爲メ院長ニ提出スベシ。

第六條 部長事故アルトキハ上席ノ検査官之ヲ代理シ課長事故アルトキハ部長ノ命ニ依リ他ノ課長之ヲ代理ス。

第七條 書記官ハ部長ノ命ヲ承ケ庶務會計ヲ掌理ス。

第八條 屬ハ各課ニ屬シ調査ニ從事シ又ハ書記官ニ屬シ庶務會計ニ從事ス。

第九條 計算検査ノ判決ハ部會議ニ於テ之ヲ爲ス但院長ニ於テ總會議ヲ要スト定メタルモノハ此ノ限リニ在ラズ。

第十條 支廳主管ノ事務ニシテ部長ヨリ會計検査院總會議ノ議決ヲ求ムル爲メ院長ニ提出スルモノハ會計検査院ノ或ル一部ニ於テ之ヲ管理シ所屬検査官補ヲシテ議案提出及其辯明等ヲ爲サシムベシ其ノ部ハ院長之ヲ定ム。

第十一條 會計検査院長ハ其ノ權限ニ屬スル事務ノ一部ヲ部長ニ委任スルコトヲ得。

第十二條 此ノ勅令ニ規定セザル事項ハ總テ會計検査院事務章程ニ依ル。

會計検査院臺灣支廳經費説明書

本年五月法律第九十二號ヲ以テ臺灣地方所在官廳ノ歲入歲出及官有物ニ關スル計算ヲ検査スル爲メ本院ニ一部ヲ増設シ之ヲ臺灣ニ置キ會計検査院臺灣支廳ト稱シ、而シテ部長一員、検査官三員、書記官一員、検査官補五員及屬若干ヲ増置シ之ヲ其職員ニ充テ、以テ合議判決ノ組織トナシ、又同時ニ勅令第六十四號ヲ以テ會計検査院臺灣支廳事務章程ヲ定メ、以テ部長ニ於テ支廳中一切ノ事務ヲ管理シ、廳員ヲ監督スルコトヲ始メトシ、會計検査院長ノ權限ニ屬スル事務ノ一部ヲ委任スル



コト等ヲ規定セリ。今其法律ノ結果ニ依リ要スル經費ヲ豫算スルニ一ケ年度ニ於テ十二萬千六百六十七圓二十五錢一厘ヲ要ス。之ヲ各項ニ區分スレバ、俸給及諸給五萬二千八百圓本項ハ勅任、奏任、判任ノ各俸給並加俸ヨリ成立シ、而シテ其高等官ノ定員ハ法律ニ於テ已ニ定ムル所ニシテ其俸給額ハ一般豫算標準額ニ憑據シタリ。判任官ハ検査事務ニ從事スルモノ五十名、庶務會計等ノ各掛ニ從事スルモノ二十名、合計七十名ナリ。元來本院ノ屬定員ハ現今二百二十人ニシテ、其検査事務ニ從事スルモノ百八十人、庶務會計等ニ從事スルモノ四十人、即チ検査事務ニ從事スルモノ各部平均六十人ナルヲ以テ、此比例ニ據レバ臺灣ノ一部モ亦六十人ヲ要スルノ計算ナリト雖、今俄ニ其人數ヲ要セザルモノト認メ、彼是參酌シ十人ヲ減ジタリ又庶務會計等ニ從事スルモノニ至テハ一廳ヲ組織スル上ニ於テ少クモ前記ノ人員ヲ要ス。

廳 費 七千六百五十九圓四十一錢一厘

本項ハ備品、圖書及印刷、筆紙墨文具、消耗品、通信運搬等ニ要スル費途ニシテ、其計算ノ基礎トスル單價ハ總テ臺灣總督府ノ豫算ニ準據シ又其所要ノ程度ハ支廳ノ人員ト本院廳費ノ比例ニ由リ算出シタルモノナリ。

修繕費 二千五百圓

本項ハ臺灣支廳設置ニ就テハ廳舍及官舍ノ建築ヲ要スト雖右ハ臺灣總督府ヨリ一時借用ノ見込ヲ

以テ單ニ修繕費ノ豫算ニ止メタリ。

旅 費 一萬八千九百六十四錢

本項ハ實地検査其他職員ノ交替往復等ニ要スルモノニシテ、其旅費定額ハ拓殖務省及臺灣總督府職員ニ支給スベキ額ニ準據シタルモノナリ。

雜給及雜費 三萬九千八百一圓二十錢

本項ハ在勤手當、雇員給、傭人料、被服費、雜費、賄料等ニシテ、其在勤手當ハ本年勅令第七十號臺灣島及澎湖島駐劄陸軍部隊給與規則ニ準ジ、陸軍高等文官及判任官ニ準ジ俸給五分ノ一ノ加俸及食料ヲ給スルコト、シ、其加俸ハ之ヲ俸給及諸給ノ項ニ編入シ食料ハ之ヲ在勤手當ト稱シ則チ本項ニ編入セリ。然レドモ其各項ヨリ支出スルノ妥當ナラザルヲ以テ其範圍ニ於テ更ニ適當ノ支給額ヲ案出シ已ニ之ヲ法制局ニ回付シ置ケリ其他ノ各費目ハ概ネ臺灣總督府豫算ノ例ニ準據シ編製シタルモノナリ。

以上ハ平年一ケ年度ニ對スル經費豫算ナリト雖創立ノ年則チ本年度ニ於テハ諸物品新調費其他赴任旅費等創業ニ屬スベキ經費ヲ要スルニ由リ、比較上多少増額スベキモノトス。然リト雖本年度ハ已ニ四五ヶ月ヲ經過シタルヲ以テ此際緊急支出ヲ要スルモノハ僅カニ數萬圓ノ見込ナリ。

抑臺灣ニ會計検査院支廳ヲ設置スルノ法律ハ第九議會ニ對シ政府ヨリ緊急事件トシテ讀會省略及



委員付托省略ノ要求ヲ爲シ以テ速ニ議決スルニ至ラシメタルモノナリ。蓋シ臺灣ノ行政タル百事草創其財務自カラ紊亂シ易ク大ニ監督ノ厲行ヲ要スルノミナラズ、且臺灣ハ絶海遼遠ノ地ニシテ會計證明上頗ル日子ト手數ヲ要ス。今ヤ已ニ總督府會計上ニ關シテハ往々物議ヲ醸シツ、アルニ於テヤ。故ニ臺灣會計ノ監督ハ寸時モ之ヲ忽諸ニ付シ去ルベカラザルナリ。希クハ當初該法律提出ノ目的ヲ一串シ速ニ開廳ノ運ニ至ラシメ、以テ應急ノ時機ヲ失ハザランコト切望ノ至リニ堪ヘズ。

## 桂臺灣總督訓示

太郎臺灣總督ノ重任ニ膺リ、親シク此地ニ到ル而シテ諸政ノ施設ハ前總督樺山伯爵ト其方針ヲ異ニセルヲ以テ、各官擔當ノ事務ハ着々其歩武ヲ進メ萬遺算ナキヲ信ズト雖、左ニ將來施行スベキ政務ノ大要ヲ述ベテ各官ノ行務上ニ資セントス。

一、總督ハ條例ノ明文ニ基キ委任ノ範圍内ニ於テ陸海軍ヲ統率シ、又諸般ノ政務ヲ統理スルガ爲ニ府中ニ民政軍務ノ二局ヲ置カレタリ。而シテ其職務ハ各異ナリト雖、之ヲ究竟スルニ皆臺灣ニ於ケル國防及治民ノ目的ヲ達スルノ機關ナルガ故ニ、双互相倚リ相輔ケ毫モ相軒輕スルコトナキヲ期シ、文武官ハ今後益其交情ヲ溫メ互ニ相謀リ臺灣全體ノ利益ヲ進捗スルコトヲ勉ムベシ。

二、文武ノ政務ヲ問ハズ、其事ノ外國政府又ハ外國人ト交渉スル者ニ付テハ之ヲ處置スルコト最周匝確實ナルコトヲ期スベシ。蓋外國政府又ハ外國人ニ交渉スル者ハ其事件ノ進行如何ニ依テハ、其關係ハ當府ニ止ラズシテ帝國政府ニ累及スルコトアルベク、畢竟小故ノ爲ニ國際ノ問題ヲ引起スコトヲ欲セザルト同時ニ苟クモ帝國ノ威信ヲ損傷スルコトナキヲ期セザルベカラズ。



三、内地ニ於ケル法律規則ハ漸次之ヲ臺灣ニ普及スルヲ勉ムベシト雖、人情風俗言語ノ異ナルモノアルガ故ニ、今ニ於テ彼是ノ區別ヲ撤シ、同一ノ法律規則ノ下ニ之ヲ律セントスルトキハ彼此衝突ヲ免レザルノミナラズ、人民ヲシテ生命財産ノ安固ヲ保タシムルノ目的ヲ達スルコト能ハザルベシ。故ニ地方行政ノ進行ト俱ニ各地ノ人情風俗言語ノ異同ヲ審査シ、法律規則ノ之ニ適應セザルモノニ就テハ勅令又ハ律令ヲ以テ除外例ヲ規定シ、兩々相行ツテ法律規則ノ目的ヲ達セザルベカラズ。

四、地方行政ハ被治者ト直接ノ關係アルヲ以テ政務ノ施行上寛猛其度ニ適スルヲ要スルガ故ニ、一面ニ於テハ指導教養以テ皇化ニ服セシメ、一面ニ於テハ刑罰嚴明以テ威信ヲ示スコトヲ勉ムベシ。特ニ無智矇昧ナル生蕃人ニ至テハ之ニ施スニ恩ヲ以テスルコトニ過グルトキハ狎レ、之ニ接スルニ威ヲ以テスルコト過グルトキハ怖レ、俱ニ撫育ノ目的ヲ達セザルノ結果ニ止マルコトアルベシ。故ニ地方行政ノ目的ヲ達セントセバ地方官ハ警察ト兵備トヲ羽翼トシ以テ寛猛其中正ヲ得ンコトヲ期スベシ。

五、公衆衛生ノ人生必要ニ屬スルハ内外固ヨリ相異ナルナシト雖、臺灣ノ氣候ハ殆ンド熱帶ニ接シ、風雨寒暖ノ變化ハ之ヲ内地ニ比スレバ懸隔甚シク、之ニ加フルニ清國一般ノ風トシテ清潔法ヲ行フコトナキヲ以テ、常ニ健康ヲ害スルモノアルハ免カレザル所タリ。而テ臺灣事情ノ相

知ラレザル、或ハ全島ヲ舉テ瘴癘毒霧ノ境域ト誤認スルモノ之ナキニアラズ、故ニ經費及事情ノ許ス限ニ於テ衛生的施設ヲ實行シ、以テ之ヲ内ニシテハ現ニ臺灣ニ居住スル者ノ疾病ヲ免カレシメ、之ヲ外ニシテハ將來ニ移住シ臺灣經營ヲ翼賛セントスルモノ、爲メニ畏怖心ヲ生ゼシメザランコトヲ要ス。

六、殖産興業ハ利用厚生ノ方法タリ。故ニ之ガ施設ヲ怠ルベカラザルハ言ヲ須タズト雖モ、之ヲ施設スルノ當初ニ於テ充分其施設スベキ事項ノ利害得失ヲ審査覆シ、萬缺失ナキヲ勉ムベシ。故ニ各地方ニ於テ特ニ施設スベキ殖産興業ノ方法ニ就テモ豫メ目的順序ヲ明カニシ、將來發達ノ成算確定スルニ至テ始メテ着手スルノ方法ヲ取ルベシ。

七、土人ノ教育ハ一日モ輕忽ニ付スベカラズ。而シテ之ヲ施行スルニ方リテハ邦語ヲ學バシメ、主トシテ帝國ナル觀念ヲ養成スルハ勿論、之ト同時ニ智識ヲ開發スルノ手段ヲ行フベシ。而シテ刻下ニ於テハ教育方法ノ高尚ナランヨリハ寧ロ普及ヲ以テ要旨トスベシ。

八、運輸通信ノ便利ヲ發達スルノ必要ナルハ勿論ナリト雖、臺灣ニ於テハ今僅ニ電信郵便ノ端ヲト同時ニ、吏員モ亦事情ノ許ス限リニ於テ臺灣語ヲ研究スルヲ勉ムベシ。特ニ警察官、收稅官ノ如キ人民ニ直接ノ關係ヲ有スルモノニ於テ然リトス。

八、運輸通信ノ便利ヲ發達スルノ必要ナルハ勿論ナリト雖、臺灣ニ於テハ今僅ニ電信郵便ノ端ヲ



開キタルニ過ギズシテ、將來益之ガ發達ヲ圖ラザルベカラズ。故ニ鐵道ノ敷設港灣ノ修築沿岸航海ノ保護皆臺灣ノ經營上緊急ニ屬スルヲ以テ、政府ニ於テモ已ニ之ガ目的ヲ達スルノ方法ヲ講究シツ、アリ。就中最緊急ナルハ内地ト臺灣トノ交通ノ安全ヲ保ツト、沿岸航海ノ發達ヲ計ルニアリ。蓋シ内地ト臺灣トノ交通ヲ將來ニシテハ内地ト臺灣トノ商賣上ノ聯絡ヲ保ツ能ハザルヲ以テナリ。

九、各官ノ事務ヲ處理スルハ須ラク繁文縟禮ヲ避ケ、敏捷活達ヲ勉メ實務ヲ進行スルヲ期スベシト雖、當該機關ノ責守ヲ明カニシ、以テ相侵犯スルコトナク、相互能紀律ヲ守リ其權域内ニ於テ充分其職責ヲ盡スベシ。顧フニ秩序ヲ保維スルニ切ナルトキハ繁縟ニ流レ易ク、敏捷ニ進行スルニ急ナルトキハ放漫ニ陷リ易キノ弊アリ。故ニ各官各其責守ノ範圍内ニ於テ秩序ヲ保ツト同時ニ敏捷ナル手段ヲ以テ事務ヲ進行センコトヲ要ス。

十、文武官ノ其職務ニ對スル常ニ誠實勤勉ナルベキハ勿論ナリト雖、各官率先シテ此新領地ノ經營ニ從事シ、日夜勤苦セラル、ハ夙ニ聖聰ニ達シタリ。已ニ屢々侍臣ヲ派シテ慰勞ノ恩典ヲ拜シタルガ如キヲ以テ見ルベキナリ。是レ各官ノ榮譽ニ止ラズ、臺灣全體ノ榮譽タリ、故ニ各官ハ平素益誠實勤勉以テ此聖恩ニ報ヒザルベカラズ。

以上ハ太郎ガ所思ノ一斑ヲ叙シタルモノナリ。今之ヲ概括セバ官紀ハ嚴肅ニシテ其責守ヲ明カ

ニシ威信ヲ保ツベク、各般ノ政務ハ確實敏捷ニシテ緩急ヲ過ツコトナキヲ要スベシ。各官ハ此意ヲ推シテ他ニ及ボシ、以テ行政全體ノ進行ヲ企圖スベシ。而シテ其要旨ニ至テハ更ニ各局長ニ命ジテ通達セシムル所アルベシ。



# 學事上申書

吳 泰 壽

明治二十七年九月征清ノ役ニ當リ、第一軍ニ從フテ朝鮮元山ヨリ平壤九連城大東溝海城牛莊田庄臺等ニ轉ジ、休戰後蓋平ニ移リ滯在中民情ヲ視テ頗ル日本語學教授ノ必須ヲ感ジ、民政廳ニ請フテ一寺院ヲ借り市民ノ子弟ヲ集メテ之ニ從事セシガ、幾バクモナク不圖第三師團司令部ヨリ大本營付ニ轉ジ、臺灣ヘ差遣ハスノ命アリ。不得止該教育事業ヲ代理者ニ委シ、猶之ガ繼續ニ付キ意見ヲ司令部ニ具申シテ同地ヲ去リ、爲メニ自ラ其結果ヲ見ルコト能ハザルニ至リタルヲ遺憾トスル而已。續テ二十八年五月臺灣ニ着シ以來基隆淡水新竹ニ轉勤シテ各支廳ノ創立ニ從事シ、同九月淡水支廳詰ヲ命ゼラレ、引續キ勤務中熟々土地ノ情況ヲ視ルニ、民意稍平穩ニ歸シ心アルモノハ既ニ日本語ヲ修得スルヲ以テ目下ノ急務トシ、以テ該語學校ノ設立ヲ望ムコト最モ切ナリ。不肖モ亦思ヘラク臺灣ハ遼東ト異リ既ニ日本ノ版圖ニ歸ス、宜シクカメテ本土ノ言語文字ヲ普及シ、一ハ日常ノ便ニ供シ、一ハ本土ノ風俗ヲ識ラシメバ將來ノ施政上ニ於テ不少ノ便益ヲ得ベシト、乃チ公務ノ餘暇ヲ

以テ之ガ教授ヲ始ムルニ決シ、一個人ノ資格ヲ以テ當地ノ宣教師マカイ氏ノ代理者ゴールド氏ニ計リテ其會堂ヲ借り校舍ニ宛テ、十月一日ヲ以テ茲ニ日本語學校ヲ設クルニ至リシガ、時勢ノ然ラシムル處十一月三日ニ在リテハ生徒ノ數六十餘名ニ達シ、即チ之ヲ引率シ支廳内式場ニ於テ一同君ガ代ヲ唱シテ遙ニ天長節ヲ祝セリ。爾後來リテ教ヲ請フモノ次第ニ増加セシガ、十二月三十一日ノ變ニヨリ止ムヲ得ズ二ヶ月間授業ヲ止メ、三月一日再ビ開校ノ際生徒ノ數ハ實ニ百一名ノ多キニ至レリ。後右會堂ニ破損ヲ生ジタル爲メ四月一日ヨリ更ニ滬尾永吉街ニ一家屋ヲ借り受ケ、此ニ右教場ヲ移セシモ、一己人ノ薄資ヲ以テ授業料ヲモ徵スルコトナク、然モ家賃其他ノ費用ヲ支出スルコトナレバ、未ダ校舍トシテ適要ナル器具スラ備フルノ餘融ナク殊ニ遺憾ヲ覺ヘ居リ候ヘ共此儘拋棄スルトキハ所謂九仞ノ功ヲ一簣ニ缺クモノニ有之、仰ギ願クバ此際直チニ相當ノ御保護ヲ享受シ完全ナル校舍ヲ建設セン事ヲ希望致シ。若シ夫レ教授ノ方法ニ至リテハ他日ニ讓リ不取敢別紙生徒名簿相添ヘ此段上申候也。

明治二十九年四月二十七日

淡水支廳詰

陸軍通譯 吳 泰 壽

淡水支廳長 西郷菊次郎殿

學事上申書



日本語學生

助教—雷俊臣。同—林安貞。同—高文有。

- 莊天能 葉福順 駱頂盛 林清火 游阿乾 林費 郭源清 陳鴻銘 劉祖思 陳景盛
- 曾順 林俊 張水 李德 謝力 陳進 劉光明 揚福生 劉才 洪抱
- 洪諒 王朝 黃炎 楊清河 楊桃仁 楊飛龍 曾進丁 陳世傳 陳榮宗 嚴金皇
- 嚴仁德 莊世賢 楊君田 林土羹 白金火 林有翼 施潤 弛靜仁 陳乞 江金土
- 范意成 張火炎 周文炳 黃春來 鄭塗生 葉成樹 趙維石 蔡老泉 徐占頭 柯桃仁
- 王良明 劉添進 劉錦繡 蔡洺書 陳燦枝 許山助 雷思九 候在崑 郭金火 黃世德
- 郭坤厚 李金釵 楊文慶 李和尙 林金城 王順元 歐王佛 汪天生 張添木 白來成
- 葉爾仁 葉滄海 葉金柱 郭昆賜 郭金鐘 連金狗 王金火 汪添極 林登舟 林登波
- 張金爐 林得發 雷烏車 吳河塗 駱金火 林永新 陳金番 高烏頭 張佛堂 連燈號
- 林來進 林其美 雷溪源 陳成 林勃螺 陳港 洪心同。

### 臺灣支金庫設置ノ件

臺灣ニ設置スベキ金庫ノ件ニ付日本銀行へ事務上ノ打合セヲナセシニ、同行總裁ハ左ノ如ク申出タリ。

臺灣地方ニ於テ壹千萬圓ニモ達スル國庫金出納ノ任ニ當ルハ何分日本銀行ノカトシテ及ブ能ハザル所ナレバ、輕忽御受致シ難シ、差向ノ處ハ御斷申上度存念ナリト申出タリ（薄井佳久ヲ以テ）

政府ガ日本銀行ニ國庫金ノ取扱ヲ命ズルハ會計法第三十一條ニ「國庫金ノ取扱ヲ日本銀行ニ命スルコトヲ得」トアルニ職由スルモノニシテ、法律ニ基因スル命令權ノ作用ニ外ナラズ。

又日本銀行條例第十三條ニ「政府ノ都合ニ依リ日本銀行ヲシテ國庫金ノ取扱ニ從事セシムヘシ」トアリ、又金庫規則第六條ニ「中央金庫本金庫支金庫ノ現金ノ保管出納ハ日本銀行ヲシテ取扱ハシム」同規則第七條ニ「日本銀行ハ本金庫支金庫ノ現金ノ保管出納ヲ取扱フ爲メ各地ニ其支店又ハ代理店ヲ設置スヘシ」トアリテ、日本銀行ガ國庫金ノ取扱ニ從事スルハ法律命令ニ依リ負擔シタル義務タルコト明カナリ。



右二者被是對照スルニ於テハ政府ガ日本銀行ニ國庫金ヲ取扱ハシムルハ純然タル命令權ノ作用ニ出ルモノナルコトハ明瞭ナリ。

故ニ日本銀行ハ自己ノ都合ニ依リ、臺灣ニ於ケル國庫金ノ取扱ヲ辭退スルヲ得ザルノミナラズ、政府ハ國庫金ヲ取扱ハシムルコトニ就テハ初ヨリ日本銀行ノ諾否如何ヲ問フノ要ナキモノナリト此主意ヲ以テ日本銀行ノ申出ヲ排斥セリ。

日本銀行總裁ハ更ニ左ノ如ク申出タリ。

臺灣金庫ノ事務ハ日本銀行ニ於テ御受ケスルコト、スルモ、特ニ大藏大臣ト日本銀行總裁トノ間ニ於テ向何ケ年間トカ其取扱ノ年限ヲ定メ約定致度旨申出タリ。(薄井佳久ヲ以テ)是又國庫金ノ取扱ヲ法律命令ノ作用ニ基カズシテ單ニ大藏省ト日本銀行トノ間ニ於ケル特約ヲ以テ國庫金ノ事務ノ取扱ヲ爲サントスルモノ、如シ。

凡ソ行政府ハ法律命令ノ命ズル處ニ據リ其事務ヲ執行スベキモノニシテ、法規ノ範圍ヲ脱シ隨意ノ契約ヲ以テ國庫金ノ取扱ヲ日本銀行ニ委スルガ如キ違法ノ行爲ヲナスヲ得ズト。此主意ヲ以テ日本銀行ノ申出ヲ排斥セリ。

日本銀行總裁ハ又更ニ左ノ各項ヲ覺書キヲ以テ申出タリ。

本金庫ハ臺灣守備兵ヲ以テ護衛相成度且支金庫ハ自衛ノ途相立候迄守備兵ヲ以テ同様護衛

相成度。

臺灣地方ノ狀況ニ照シ危險ノ虞アルニ於テハ其金庫ヲ守備兵ヲ以テ護衛スルコトハ必要ノコトナルニヨリ、臺灣總督府ヘ照會シテ之レガ保護ノ方法ヲ設クベシ。

金庫保管ノ現金及遞送中ニ係ル現金ニシテ金庫員ノ不注意ニヨリ生ジタル損失ヲ除クノ外、不可抗力ノ損害ヲ受ケタルトキハ國庫ニ於テ補填相成度。

現金保管上不可抗力ノ損害ヲ生ジタル場合ニ於ケル責任ノコトハ會計法第二十七條ニ「其保管スル處ノ現金若クハ物品ヲ紛出毀損シタル場合ニ於テハ其保管上避ケ得ベカラザリシ事實ヲ會計検査院ニ證明シ、責任解除ノ判決ヲ受クル云々」ト明文アリ。即金庫出納役ノ責任ニ關シテハ會計法ノ規定ニ從フベキモノナルニ付、大藏大臣ト日本銀行總裁トノ間ニ於ケル約束ニ依リ之ヲ左右スルヲ得ザルモノナリ。

各廳經費ノ送金ニシテ其爲替ノ取組ミ得ラル、地方ハ金庫ニ於テ爲替取組ノ上爲替券ヲ各廳ヘ交付シ各廳ヨリ受取人ヘ直接送付相成度。

又現金遞送ノ場合ハ臺灣守備兵ヲ以テ護衛相成度。

金庫ハ金庫所在地外ニ於テ支拂ヲ爲ス場合ニ於テハ金庫ノ責任ヲ以テ正當債主ニ送金ヲ爲スベキ責アルニヨリ、各廳ニ送付シタルノミヲ以テ其責ヲ了リタルモノト致シ難シ。尤モ現金遞送ノ場合



ニ護衛ヲ要スルトキハ實況ニヨリ適當ノ處分ヲナスベシ。

金庫ニ供スベキ家屋倉庫ヲ新築スル迄、總督府ヨリ相應ノ家屋貸與相成度、但本金庫建築ハ凡ソ三ケ年以内ニ建築ノ見込ニ有之候。

家屋借入ノコトハ臺灣總督府ノ都合ヲ問合セ貸與セラルベキモノアラバ之レヲ貸與スベシ。

本支金庫ヲ創立シ、事務實施期日ハ更ニ日本銀行總裁ヨリ具申ノ上ニ告示相成度、但先以テ臺北本金庫ヲ開設シ漸次臺南、臺中、基隆、澎湖島ノ四支金庫開設致度。

金庫開始期日ハ一ニ行政上ノ必要ニ基クモノニシテ、日本銀行ノ具申ヲ待ツベキモノニアラザルナリ。大藏省ハ臺灣ニ金庫設置ノ必要アルハ夙ニ豫期セシコト故、既ニ本年三月ノ央ニ於テ之レガ準備ヲ日本銀行ヘ豫令シ置ケリ。

臺北本金庫及四支金庫取扱手数料ハ當分ノ間一ケ年金七萬二千圓(二十九年臺灣金庫歲入金六萬二千四百萬圓ト見積リ此金)交付相成度但金庫間現金遞送費及各廳經費送金料等ハ實費ニテ御交付相成度。

右本支金庫ノ外ニ尙ホ支金庫若クハ出張所ヲ設置スルヲ必要トセラル、トキハ前項手数料ノ外實費御交付相成度。

金庫事務取扱費用ノコトハ互ハ費額ノ高低程度ヲ論ズルニ外ナラザレドモ、政府ハ別紙……ノ如

ク第九議會ヘ豫算ヲ提出シ其協賛ヲ求メ、既ニ勅裁公布ニナレリ。此豫算ヲ組織セシ基隆ハ大阪本金庫ノ經費ニ據リ調製セリ。而シテ之ヲ臺灣總督府官吏ノ俸給及給與額ニ準ジテ支給スルモノトスルモ敢テ不足ヲ感ゼザルモノニシテ(本年七月一日ヲ以テ金庫開始期日ト爲セシニヨリ一年間ノ豫算ヲ以テ實際九ケ月間ノ經費ニ充用スルニ由ル)即チ此豫算金額ヲ以テ適當ノモノト信ズ但赴任旅費ハ別ニ支給ス。

然ルニ今日本銀行ノ申出ハ俸給雜費其他ノ經費ニ於テモ頗ル多額ナルモノナルニヨリ採用シ難シ。故ニ本年度ハ別紙計算書ノ數ヲ以テ日本銀行ノ受負額ト定ムルヲ要ス。

但書ハ申出ノ通りニ項ハ其時ニ臨ミ適當ノ處分ヲ爲スベシ。

前項手数料ハ金庫ニ於ケル經常ノ費用ニシテ更ニ削減シ得ベカラザル金額ナレバ、實際歲入出額ニ増減アルモ此金額ヲ以テ向フ十ケ年間ノ請負料ト定メ交付相成度。

國家ノ歲出ハ年々帝國議會ノ協賛ヲ求メ確定スルモノナルニ據リ、豫ジメ十ケ年間据置キノ約定等致シ難キノミナラズ、元來經費ナルモノハ物價ノ高低及ビ事務ノ繁閑ニ伴フモノナルニヨリ、將來臺灣ノ經營如何ニ因リ或ハ之レガ増減ヲ必要トスル場合ナキヲ保セズ、故ニ今日將來十ケ年間ノ受負額ト定ムルコトヲ得ズ。

臺灣ニ流通ノ兌換銀券ヲ交換ノ爲メ同地ニ交換所ヲ設立シ、該基金トシテ豫テ一圓銀貨(凡ソ十萬圓)ノ回送ヲ要ス。右ハ目下總督府ニ於テ回送ノ振合ニ依リ該運搬費ハ實費ヲ以テ